

# 日本医書出版協会 50年史



一般社団法人

日本医書出版協会



## 日本医書出版協会創立 50 周年に 際して



一般社団法人 日本医書出版協会  
代表理事 金原 優

日本医書出版協会は 1961 年 3 月 18 日に創立され、このたび創立 50 周年を迎えました。この日を迎えるにあたり、これまで永年にわたり当協会ならびに当協会会員社を支えて頂いた著者・執筆者の先生方、読者、取次・書店、ならびに出版関連業界各位に改めて厚く御礼を申し上げます。

日本医書出版協会は設立当初から医学ならびに医学関連領域の専門書籍・専門雑誌を発行する出版社で構成され、現在は会員社 29 社で運営しております。医学専門領域で活躍されている先生方は日夜最先端の医療と生命科学研究を行っており、そのために必要な情報は当協会を中心とした医学専門書出版社によって出版されております。発行された出版物は迅速かつ適切に先生方にお届けしなければなりません、日本医書出版協会はこれらの出版物がきわめて高度の学術専門書であるという特殊性から、既存の出版団体では対応が困難な出版情報の提供、医学専門書店の育成と支援、流通体制の整備、著作権の保護等を目的として活動してまいりました。具体的には、医学専門領域の医師・研究者の先生方ならびに学生が必要とする専門書籍・専門雑誌の出版目録の発行、新刊書籍ならびにその内容を含むその他の情報提供、日本医学会総会その他主要学会における地域書店と連携した書籍・雑誌の展示活動、読者に出版物を安心して購入して頂くための日本各地の医学書専門店・医学書取扱店を対象とした専門書店の認定等を行っています。

日本の医学・医療界は 80 の医科大学、29 の歯科大学、約 9,000 の病院ならびに全国約 10 万ヵ所の診療所を中心に医師約 29 万人、歯科医師約 10 万人、看護師 125 万人、その他関連領域の専門職の方々を含めて 200 万人ほどの市場です。日本医書出版協会はこの限定的な市場に緊密に接し、きめ細かい情報提供と出版物流通に対応してきました。日本の医療は世界でも有数の技術水準を有しています。それを維持し、さらに発展させるためには医学専門情報が出版物として常時発行され、全国の専門領域の先生方に向けて発信されなければなりません。日本医書出版協会は取次、流通業界ならびに書店と連携し、適切に市場に届ける努力を重ねてまいりました。

日本医書出版協会は創立当初から出版物にかかる著作権問題にも積極的に取り組んできました。医学専門書、とりわけ各専門領域の雑誌、定期刊行物は高度に細分化された研究

成果と臨床報告を掲載しており、各領域の臨床医ならびに研究者の先生方にとっては貴重な情報源となっています。またこれらの文献は医薬品ならびに医療関連器材の開発にとって必須の情報であり、論文単位で利用される要素の強いものとなっています。必然的にそれぞれの論文は複写利用されることが多く、もともと発行部数の少ない学術専門雑誌は大きな影響を受けてきました。こういった複写は過去 40 年間の複写機器の浸透とともに増大し、コンピュータとインターネットが普及したことによる情報伝達と検索機能の進歩によってさらに拍車がかかり、医学専門雑誌にとっては存立にも関わる大きな問題となりました。日本医書出版協会はこの問題に対応するため、1991 年設立の日本複写権センターの運営ならびにその使用料体系の問題点を指摘し、出版者著作権協議会を通じてその是正に尽力、最終的には 2001 年に新たな複写管理団体、日本著作出版権管理システムを自然科学書協会との連携によって設立し、複写管理の適正化に努力してまいりました。

医学研究は最近の技術革新によってものすごいスピードで進んでいます。日本医書出版協会はその医学研究を読者により速く、より確実に伝えるための努力を重ねています。特に、近年の大きな変化は出版の電子化であり、電子技術の進歩によって情報の処理能力と伝達速度が格段に進歩しました。このことによって、より多くの情報が電子的な検索技術の進歩によって確実に入手できることになりました。今後はそれを可能にし、利便性と経済性を高める出版活動が必要であると考えています。しかし、一方では情報の電子化によって出版された情報を瞬時に大量に流通させることも可能になり、著作権の保護もまた重要な課題となりました。日本医書出版協会は出版社と読者をつなぎ、この出版の電子化の時代にどのように情報を流通させ、著作者と出版社の権利を保護しながら読者のニーズにどのように応えるかを追求し、医学専門書が幅広く流通することを目標として活動してまいります。それが最終的には国民を疾病から守り、健康で安心して生活できる日本の社会を形成することに貢献すると考えます。

日本医書出版協会は創立 50 周年を記念し、2009 年 11 月に一般社団法人日本医書出版協会として組織変更を行いました。今後は社団法人としてますます公益性を高めた活動を展開し、専門書出版業界の一員として著者・読者のご意見に耳を傾け、専門書の普及と医学研究の促進の一助となる努力を重ねてまいります。関係各位におかれましては引き続きご支援を頂きますようお願い申し上げます。

# 目次

日本医書出版協会創立 50 周年に際して iii

---

- 第 1 章 日本医書出版協会の沿革 1
  - 第 2 章 祝辞 7
  - 第 3 章 座談会 51
  - 第 4 章 50 年の委員会活動 67
  - 第 5 章 日本医学会総会開催の協力と展示販売 111
  - 第 6 章 歴代の理事長 117
  - 第 7 章 会員社一覧 123
  - 第 8 章 江戸から平成へ——今に生きる医学の足跡 127
- 
- 編集後記 133



## 第1章

# 日本医書出版協会の沿革

---





## 日本医書出版協会の沿革

日本医書出版協会は 2011（平成 23）年 3 月 18 日に設立 50 周年を迎えます。医学書出版界に關しましては、日本出版年表によると、1886（明治 19）年に医書組合が丸善、金原医籍店、沢田屋、南江堂、半田屋等で組織されました。1893（明治 26）年に英蘭堂、南江堂、金原商店、半田屋、吐鳳堂、朝香屋が発起人となり医書組合がつけられました。この時期は出版社の中にも書店がありました。南江堂書店、吐鳳堂書店というように出版社のあとに書店がつき仲間内のみの販売でした。1934（昭和 9）年に区域を拡張して全国医書組合と改称しました。この組織は医書同業会になります。売捌書店として 33 書店が名を連ねております。当時の本の奥付の裏に書店名が印刷されております（図）。これは吐鳳堂の本なので吐鳳堂は含まれておりません。1886（明治 19）年は出版社だけの集まりでしたが、1934（昭和 9）年は出版社と書店の集まりになっております。



日本医書出版協会加盟各社の先代あるいは先々代が亡くなられた今、設立の時期やどなたが中心になって協会を運営していたかなどの詳細が十分わからないのが実情でございます。医書出版協会として、1955（昭和 30）年 9 月 25 日発行の第 17 回日本医学会総会特別講演集を発行した記録がございます。講演集を作成するための集まりから、また、社団法人自然科学書協会の設立に刺激を受けて団体を組織しようとしたのではないかと思います。自然科学書協会も出版用紙の統制割り当てを獲得するために出版協会を設立しました。1951（昭和 26）年社団法人自然科学書協会の初代理事長は金原出版の金原作輔氏であります。

歴史はいろいろございますし、不明な点が多々ありますが日本出版年表にも記述されておりますことで、当協会として 1961（昭和 36）年 3 月 18 日をもって設立ということにした次第です。

設立当初の協会員は、19社で以下の通りです。

1. 株式会社医学書院 文京区本郷 6-20 金原一郎
2. 医学中央雑誌刊行会 渋谷区衆楽町 10
3. 医歯薬出版株式会社 文京区駒込片町 32 今田見信、今田喬士
4. 金原出版株式会社 文京区湯島切通坂町 21 金原作輔、金原四郎
5. 協同医書出版社 中央区湊町築地 2-3 木下英一
6. 株式会社杏林書院 文京区龍岡町 31 太田四郎
7. 株式会社金芳堂 京都市左京区下鴨上川原町 28 小林鐵夫
8. 克誠堂出版株式会社 文京区金助町 72 今井甚太郎、今井彰
9. 診断と治療社 千代田区丸ノ内丸ビル 354 藤實人華、藤實廣由
10. 中央医書出版社 浦和市常盤町 9-85 武藤乾生
11. 株式会社中外医学社 中央区銀座東 2-11 青木三千雄
12. 永井書店 大阪市福島区上福島中 1-79 永井秀一
13. 株式会社中山書店 千代田区神田神保町 2-24 中山三郎平
14. 株式会社南江堂 文京区春木町 3-23 小立正彦
15. 株式会社南山堂 文京区龍岡町 36 鈴木正二
16. 株式会社日本医事新報社 中央区東銀座 2-11 梅澤彦太郎、梅澤信二
17. 日本臨床社 大阪市東区道修町 2-20
18. 株式会社文光堂 文京区本富士町 2 浅井忠晴
19. 鳳鳴堂書店 文京区新花町 97 永井幸一郎

設立時の世話人代表は金原出版・金原作輔氏です。

1961（昭和 36）年には医書同業会が医学書総目録を発行しましたが、出版社、取次会社、書店という組織で目録を作るのは同業会の事業ではないということで、丁度この時日本医書出版協会が設立されたので目録は日本医書出版協会が発行するのがよいということで、その翌年 1962（昭和 37）年から発行することになりました。当初は新刊書も少ない時期で新刊書の目録と春と秋の 2 回の旅行ぐらいが事業でした。

当時の世話人代表は南江堂の小立正彦氏、そして文光堂の浅井忠晴氏、南山堂鈴木公雄氏、診断と治療社藤實廣由氏、医歯薬出版今田喬士が世話人代表をされています。1975（昭和 50）年 4 月（世話人代表今田喬士）の第 19 回日本医学会総会（京都 平沢興先生）で日本医書出版協会として初めて展示会を開催しました。展示担当書店は丸善でした。

1975（昭和 50）年 11 月から日本医書目録刊行会と名称を変更して、医歯薬出版今田喬士氏が理事長として会を運営され、企画委員会を設置。木下英一氏（協同医書出版）が就任しました。

1976（昭和 51）年 5 月 25 日医書目録刊行会に著作権委員会設置。

1976 年 11 月今井彰（克誠堂）理事長就任。著作権委員会委員長に青木三千雄氏（中外医学社）が就任。

1979（昭和 54）年 9 月長谷川泉（医学書院）理事長。

1981（昭和 56）年 9 月青木三千雄理事長。

1982（昭和 57）年 12 月から青木三千雄理事長のもと専務理事（今田喬士・医歯薬出版）、販売委員会（浅井宏祐・文光堂）、PR 委員会（中島上・医学書院）、著作・出版権委員会（吉川元章・金原出版）、総目録委員会（三浦裕士・医歯薬出版）、医学会総会担当理事（永井忠雄・永井書店）、会計担当理事（木村道之助・南山堂）と会の運営は充実して参りました。

1985（昭和 60）年 7 月小立武彦（南江堂）理事長の時、日本医書目録刊行会からもとの日本医書出版協会に名称を戻しました。

1987（昭和 62）年 4 月第 22 回日本医学会総会（中尾喜久会頭）では池袋サンシャインシティにて医学書展示販売会を実施。販売委員会と PR 委員会が協力し、医学書専門店連合に販売を委託しました。学会担当は今井彰（克誠堂）氏。小立理事長が前年より体調を崩されて、急遽三浦裕士（医歯薬出版）専務理事が代行でテープカットを行いました。

1987（昭和 62）年 8 月三浦裕士理事長が就任。医学会総会展示準備委員会が発足。柴田勝祐（金芳堂）が委員長に就任。

1990（平成 2）年 8 月三浦裕士理事長。広告委員会が PR 委員会から独立し、篠原義邦氏（篠原出版）が就任。

1991（平成 3）年 4 月三浦裕士理事長。第 23 回日本医学会総会（岡本道雄会頭）が京都国際会議場で開催される。

1995（平成 7）年三浦裕士理事長。第 24 回医学会総会（飯島宗一会頭）が名古屋国際会議場で開催される。医学会総会展示委員長藤実彰一氏（診断と治療社）。

1995（平成 7）年 8 月浅井宏祐理事長。理事は委員会委員長を兼務することになり、無任所理事を廃止。

1999（平成 11）年 4 月浅井宏祐理事長。第 25 回日本医学会総会（高久史磨会頭）が東京国際フォーラムで開催される。初めて一般向医学書の展示販売をビッグサイトにて行う。本郷允彦（南江堂）医学会総会展示委員長。

1999（平成 11）年 8 月本郷允彦理事長就任。

2003（平成 15）年 4 月本郷允彦理事長。第 25 回日本医学会総会（杉岡洋一会頭）が福岡国際会議場にて開催。医学書展示販売は隣接会場にて、一般医学書はダイエードーム球場にて実施。小林謙作（医学書院）医学会展示委員長。

2005 年 8 月金原優（医学書院）理事長。電子出版委員会が発足。委員長は金原優理事長が兼務。

2007（平成 19）年 4 月金原優理事長。第 26 回医学会総会（岸本忠三会頭）が大阪国際会議場にて開催。梅澤俊彦（日本医事新報社）医学会総合展示委員長。

2009 年 11 月 2 日公益法人改革の中一般社団法人日本医書出版協会に生まれ変わりました。委員会委員を会社推薦の公募にする。

## 日本医書出版協会の事務所

1961 年文京区湯島切通町 21 番地（金原出版内）

1967 年文京区湯島 4-1-12 SY ビルの医書同業会に間借りしておりました。

1990 年文京区本郷 2-12 谷口ビル

2000 年文京区本郷 2-19-7 ブルービルディング



現在の役員

## 第 2 章

# 祝 辞

---



## 日本医学会と日本医書出版協会との 連携



日本医学会  
会長 高久史磨

日本医書出版協会 JMPA 50 周年おめでとうございます。医学書や医学雑誌が医学生、研修医の勉強、医師の日常診療にとって欠かせないものであることは今さらながら申し上げる必要はないと思いますが、この協会がわが国の医師の養成に重要な役割を果たしてきたことは疑いのない事実であります。

私事に渡って恐縮ですが、私自身、現役の教師として働いた時期には JMPA に加入しておられる雑誌社から刊行される医学雑誌に編集者として、また執筆者として数多く関わらせていただきましたし、学生を直接教えることがなくなった現在も、その数は激減しましたが、一部の雑誌の編集、執筆に関与させていただいています。

また、日本医学会会長として是非お礼を申し上げたいことは、各 4 年ごとに開かれる日本医学会総会において医学書の展示を昭和 54 年の第 20 回日本医学会総会以来、毎回開催していただいていることでして、そのご尽力に感謝しています。

日本医学会総会の展示には、医療関係者はもちろんのこと、最近の総会では一般市民の方が数多く参加されますので、医学会総会での医書、医学雑誌の展示は一般の方に医学・医療の現状を知っていただく良い機会だと思います。またこのような一般の方々への医学や医療の情報の伝達も日本医学会総会の重要な使命の 1 つと考えています。

日本医学会には 108 の学会が加盟していますが、日本医学会は医学用語集の作製を医学会の重要な事業として現在までに第 4 版を出版、第 4 版からは用語集のオンライン化を実施しています。なお、この日本医学会の用語集の元になっているのは各学会ごとに刊行している用語集で、日本解剖学会、日本生理学会等の基礎系の学会、日本衛生学会等の社会系の学会、日本内科学会、日本外科学会等の臨床系の学会等、35 の学会が JMPA の出版社から各学会の用語集を刊行しています。また 4 つの学会が関連した専門の手引き、ガイドラインを同じく JMPA 加盟社から刊行しています。

日本医学会に加盟している各学会は学会が専門とする領域に関する学術的な論文を和文、英文の雑誌として刊行しています。またこれらの 108 学会の学会誌の編集者が集まる医学雑誌編集者会議を定期的に開催しています。最近も医学論文の筆者の利益相反に関する symposium を編集者会議と日本医学会の利益相反に関する委員との共催で開催しま

した。日本医学会に属する各分科会が出版する医学雑誌と JMPA 加盟社が出版する医学雑誌とは当然その性質が異なりますが、日本医学会の編集者会議に JMPA の代表の方が何らかの形で参加されることは日本の医学書、医学雑誌の発展、ひいてはわが国の医学生、医師の教育にとって必要なことではないかと考え、そのことをこの JMPA 50 年史の刊行にあたってご提案したいと思います。



## 『JMPA 50 年史』によせて



日本医師会  
会長 原中勝征

日本医書出版協会が設立 50 周年を迎えられ、記念事業として『JMPA 50 年史』が発行されるにあたり、日本医師会を代表して、一言お祝いのことばを申し上げます。

日本医書出版協会が、1961（昭和 36）年の設立以降、優れた医学書籍の発行に努められ、わが国の医学・医療の発展・向上に大きく寄与してこられましたことに対して、深く敬意を表するとともに、設立 50 周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

さて、今から 50 年前の 1961 年は、わが国に国民皆保険制度が実現された年であり、国民は貧富の差に関係なく医療が受けられ、命の尊さは平等であるということが、国の仕組みとして確立されました。この皆保険制度の実現により医療提供体制の整備が進み、現在わが国は、世界一の健康長寿国となったわけであります。

この間、医学・医療は、飛躍的な進歩・発展を遂げており、分子生物学研究の進歩によって、一人ひとりの遺伝子解析が可能になり、それに対応した医療も実現されるようになってきました。かつては不治の病といわれた疾病のいくつかが克服されつつあり、医学・医療の研究の進歩と広がり、とどまるところを知らず、人類にとって非常に大きな恩恵をもたらしています。その輝かしい実績の陰には、そこに携わる方々の熱意と地道な努力があることは言うまでもありません。

貴協会は、医学、看護学をはじめとする医学関連領域の出版物を発行する専門出版社 29 社により、かけがえのないヒトの生命を守り、人類の健康に寄与する医学の最新情報を迅速に、かつ正確に、医学関連領域に携わる方々に届けることを使命として組織されており、今日まで、見事にその使命を果たしてこられました。

医療は医学の社会的適用であるといわれ、医学の進歩・発展なくして、医療の進歩・発展・向上もありません。

遺伝子診断や再生医療など、医学・医療の進歩に対する国民の期待はますます高まっております。一方で、患者さんの QOL についても同様であります。このような中で、まさに日進月歩する高度で先端的な医学と、日常必要とされる医療の有機的連携が求められております。そのような意味からも、医学と医療の連携において深い関わりをもつ貴協会が、今後も医学・医療の進歩・発展に多大に寄与されますことを期待申し上げます。

日本医書出版協会の設立 50 周年を節目として、協会を構成される 29 社のすべてがさらなるご発展とご繁栄を遂げられますとともに、関係各位の一層のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、お祝いのことばといたします。

## 日本医書出版協会と医薬品業界との 関わり



日本製薬団体連合会  
会長 庄田 隆

このたびは、日本医書出版協会がめでたく 50 周年を迎えられ、また記念事業として『JMPA 50 年史』が発刊される運びとなりましたことにつきまして、日本製薬団体連合会傘下の千数百社ある医薬品企業を代表して、心よりお慶び申し上げます。

貴協会が設立された昭和 36 年は大衆薬が広く使われていた時代ですが、翌年の国民皆保険制度導入以降、次第に医療用医薬品のウエイトが高まり、今では 9 割以上を占めるに至っております。

この医療用医薬品の需要の高まりに加えて、安全性を中心とした適正使用意識の高まり、医学・薬学の発達などが相まって、医薬品情報に関するニーズは年々高度に、また幅広いものとなり、これに合わせて医学書が医療の中で果たしてきた役割も大きくなって参りました。

実際、私ども医薬品企業では、それぞれの業務遂行において、貴協会加盟の各出版社発行の医学書を、日頃から大変活用させていただいております。

疾患そのものを知り、診療法を知り、そして類似薬・併用薬を含めた治療薬を知る、その必要がある時は必ず医学書で確認し、エビデンスに基づいた理解・判断、根拠性を確認したうえでの情報提供を行っております。通信技術が発達した今日においても、正確な情報が集積されている医学書は最も信頼できる情報源であり、医学書がなければ医薬品企業の活動は成り立たないといっても過言ではありません。

ここで、医薬品企業における医学書の活用事例をいくつかご紹介します。

研究部門では、創薬研究の基礎情報、最新知見を医学書から得ておりますし、開発部門では、治験プロトコール作成時に活用しており、特に新たな領域での開発においては大変貴重な情報源とさせていただいております。

また、学術・営業部門では、副作用評価や適正使用情報資材作成時の情報整理、お客様などから受けたご質問への対応、製品普及のための資材作成時の用語確認や学会等が出された話題の学習、お客様に理解されやすい表現の確認にも活用しております。

これからの時代は、ますます高度化・複雑化した情報がより数多く生み出されることとなりますが、どのような時代であってもエビデンスに基づく活動が医薬品・医療に携わる

者としての基本でありますから、医学書に期待されている役割は、時代の進化とともにますます高まるものと思われまゝ。貴協会ならびに貴協会会員会社の皆様のますますのご発展を祈念申し上げます。

## 『JMPA 50 年史』によせて



日本書籍出版協会  
理事長 相賀昌宏

医学は、常に医学書とともに発達してきました。さかのぼれば、あの『解体新書』の例を引くことができます。『ターヘルアナトミア』、実はその書だけを逐語訳したものではないそうですが、その翻訳に情熱を傾けた前野良沢、杉田玄白らの存在がなければ、またその刊行がなければ、日本の近代医学の夜明けはかなり遅くなったのではないのでしょうか。また、その時に訳された「神経」「動脈」などの用語が、今もそのまま使われていることを思えば、書物と医学の幸福な出会いを思わずにられません。

どのような高邁な思想も画期的な発見も、言葉にし、書物を通して伝えられなければ、その力を発揮することはできません。医学のような、命に直結する精緻な科学であれば、その重要性はいうまでもないことでしょう。

インターネットとは論文の共有というところから始まっていますから、パソコンがあればそれで十分な情報を得ることはできるともいえますが、その浮遊し、飛び交っている最新の情報を、捕捉し、咀嚼し、沈殿させる場所が、書物ということになるのでしょうか。

いずれにしろ、これから医学の道を進む人にも、すでに実績を積みながら、さらなる高みを目指す人にも、医書というものはなくてはならないものです。

日本医書出版協会（JMPA）50周年、この半世紀、人類の健康に寄与する医学の最新情報を少しでも早く、かつ正確に必要な先生方に届けて来ていただいていたことに深く感謝するとともに、ますますスピードアップするこの分野の進歩に、これからも寄与していただくことをお願い申し上げたいと思います。

## 学術発展の牽引役として半世紀 —日本医書出版協会の功績を讃えて



社団法人自然科学書協会  
理事長 後藤 武

日本医書出版協会の創立 50 周年、誠におめでとうございます。

日本の医療技術は世界の最前列を歩んできていますが、これも貴協会が長年に亘って学術研究の成果の普及・啓蒙に努められ、優れた研究者の育成、また先端医療を含むあらゆる医療分野の発展の牽引役を担ってこられたご功績によるものと確信します。

一口に 50 年といっても、その道程は必ずしも平坦ではなかったと存じます。特に専門書は長い間一般書店での店頭販売がかなわず、流通方法の模索を重ねながら出版活動を続けてきました。とりわけ高額商品の多い医書関係では流通問題は深刻で、業界でもひとかたならぬご苦労があったはずです。そんな時代背景のなかで全国医書同業会から一部事業を引き継ぐかたちで貴協会が創立されたとのことですが、以来、医学関連領域の出版目録の発行、医学会総会や関連学会会場での図書展示販売、そして医学専門書店の認定などの事業を意欲的に展開され、結果として出版物の普及促進はもとより学術の啓蒙・発展に大きく貢献されることになったと拝察いたします。

創立 50 周年を機にご尽力された先人たちのご苦勞を偲ぶとともに、その事業が金原代表理事を中心とする現体制にも営々と受け継がれ、斯界の発展に寄与されていることに衷心より敬意を表したいと思います。

今日の出版界においては媒体の多様化に伴う諸々の問題が浮上してきています。著作権や出版権、それに再販制度などに関わる諸問題がそれですが、これらは長年取り組んできた懸案事項ながら一歩間違えば出版界を揺るがす大問題になりかねません。今後とも将来を見据えた出版人としての英知を結集し、一致協力して対処していきたいものです。また若者の理科離れをなくすことや研究環境の整備の重要性を関係機関に働きかけるなど、研究者の育成と学術の振興のために努力していくことも、われわれ専門書出版社に課せられた使命であると考えます。

さて、自然科学書協会は理学・工学・医学・農学・家政学の 5 分野の専門出版社で構成する文部科学省所管の社団法人ですが、医学関連では多くの貴協会員が重複しており、協会活動を支えている有力メンバーでもあります。振り返れば終戦間もない 1946 (昭和 21) 年に創立した当協会ですが、資源の乏しいわが国の国策ともいえる「科学技術創造立国」

の旗印のもとに、協会員が一丸となって普及・啓蒙活動を展開して学術振興の一端を担ってきたことが今日の日本の発展に繋がっていることを思い、改めて先達たちのご尽力に感謝しつつ、今後とも手を携えて諸問題に取り組んでいきたいと希っています。

創立 50 周年という節目に当たり、一般社団法人日本医書出版協会の幾久しいご発展と会員各社のますますのご隆盛を祈念いたします。

## 日本医書出版協会設立 50 周年に よせて



全国医書同業会  
会長 大畑 秀穂

日本医書出版協会様の設立 50 周年にあたり、全国医書同業会を代表して心よりお祝い申し上げます。

日本医書出版協会様と全国医書同業会は、いわば「血を分けた兄弟」ともいえるべき関係であります。

当会の設立は諸説ありますが、明治 26 年とされており、明治維新以降、欧米の進んだ医学を取り入れて急速に発展する日本医学界の新たな知識への需要に応えるべく、本郷台の数社で「医書組合」を立ち上げたのが当会の始まりといわれています。その後、戦後の用紙配給時代の困難を乗り越え、会員相互の親睦や公正な業界発展のための勉強会、研究会などを活発化させ「医書同業会」として新たに歩み始め、昭和 41 年には「全国医書同業会」となって今日に至っております。

昭和 36 年、当会は「医学書総目録」を発行しました。日本医書出版協会様はこの年に設立され、総目録の発行は当会から日本医書出版協会様へと引き継がれました。

冒頭に日本医書出版協会様と当会は「血を分けた兄弟」と申し上げたのは、こうした歴史を振り返れば明らかであり、今後も末永く日本医書出版協会様とのこのような深いつながりを継続いただくよう改めてお願いするところでもあります。

日本医書出版協会様は、会員社・非会員社出版物の総目録などによる紹介、医書営業に関わる人たちに向けたテキストの発行、販売正価の維持活動と認定書店への支援・育成、出版・著作権の知識の普及など、医書業界にとって欠かすことのできない重要な事業を幅広く展開されております。

また、直接の読者である医師や医療専門職への学会展示を通じた図書普及への協力、とりわけ日本医学会総会展示を企画立案され、総会準備の先生方のご指示の下、医書専門店をはじめとする書店、取次社の皆さまと協力されて 4 年に一度の大規模書籍展示を推進されていることは、業界のみならず医学界にとってもきわめて有意義な一大事業であり、当協会としても敬意を表するところでもあります。

昨今の情報の電子化の波は、出版社のみならず、制作に携わる印刷・製本業界、広告業界にも大きな波として押し寄せてきております。またなにより書店、取次社をはじめとし



た出版流通に大きな影響が出るのではないかと、ともいわれております。

しかし私どもは、医書の出版・販売を通して医学・医療の進歩に貢献し国民の健康増進に寄与する、という原点を忘れてはなりません。

日本医書出版協会様におかれましては、この原点を踏まえて、今後のさまざまな困難に対し当会にもご指導を賜り、その先頭に立っていただくことをご期待申し上げ、ますますのご隆盛を祈念申し上げます。

## 『JMPA 50 年史』によせて

社団法人日本出版取次協会  
会長 山崎厚男

貴会におかれましては今年めでたくご創立 50 周年の節目をお迎えになられ、まことに慶賀にたえません。これもひとえにご加盟各社様の歴代役員各位の真摯なご研鑽ご努力の賜物と、心から敬意を表する次第でございます。

歴史をたどれば文明開化間もない頃の医書組合にさかのぼり、現在まで連綿と続く全国医書同業会の流れも汲んで、今日の日本医書出版協会様があると伺います。わが国社会は戦中戦後の激動期を経て戦後は一転して目覚ましい経済発展を実現し、その後景気の面では一進一退を繰り返して参りましたが、こと医療技術の進歩という観点から申すならば、この間多少の速度の緩急はあったにせよ、それは決して一歩たりとも後に退くことのない前進の日々であったこと、そしてわが国医学界を駆動する原動力として、各社様の手になるあらゆる出版物がその役割を果たして参られたことと確信いたしております。その輝かしい足跡は、志ある読者の訪れを待つ医学書総目録のページにも鮮やかに刻まれております。

もとより、広く書物は人をして動物との間を画然と分かつ精神活動の所産であり、時と場所を越えて、やがて読者の心の糧となる大切な存在です。加うるに医学、あるいはその精髓の結晶たる医書というものは、人が人の命を守りいたわる崇高な理想に発するものであり、医療の進歩を支え、その担い手を育成する、まさに命の書であります。

医書をつくり、それを世に伝え閲読に供する営みは、かかる理想を深く理解して行われており、なかんずく普及・販売に携わる者ならば、これを必ずや読み手に到達させる最終走者の重責を全うすべきものであると、私ども販売会社一同は決然たる覚悟を胸に日々の仕事に取り組んで参りました。かねて強固な特約店制度で知られた医書業界に対しても、取次として近年販路の拡大に多少のお手伝いができるようになりましたことは、私どもが内心ひそかに誇りといたすところであり、それだけにこの良き節目をともにお祝いできますことは大きな喜びでございます。

いまや世界屈指の長寿国となったわが国であります。これに比例して増加する医療費が国家財政を圧迫しております。国民一人一人の健康増進とさらなる医療技術の発展なくしては将来にわたって社会の活力を保持することはかないません。その良き先導者たるべき医療者の育成と医学の発展に寄与する、優れた医書の発行と普及が今後ますます重要な

社会的要請となることは明白であり、私どもも今まで以上に販売に力を尽くして参る決意でございます。ともに未来への活路を切り開き、次なる五十年、百年に向けて皆様のご健勝ですますご活躍されますよう祈念申しあげ、併せて貴会の繁栄と大いなる飛躍を心からご期待申しあげます。

## ご創立 50 周年に寄せて



株式会社トーハン  
代表取締役社長 近藤 敏貴

ご創立 50 周年にあたり心よりお慶び申し上げますとともに、平素のお引き立てを深謝申しあげ、半世紀以上にわたる会員各社様の弛まぬご尽力に深く敬意を表します。

顧みますと、日本医書出版協会様とトーハンとはお互いに浅からぬご縁で結ばれ、ともに今日を迎えております。昭和 24 年、日配閉鎖の混乱を收拾すべく弊社が設立された折には、株式会社金原商店（28 年より金原出版株式会社に改称）の初代社長でもあった金原作輔氏が、全国出版協会に属する他の多くの方々とともに創立準備委員として参画され、弊社監査役として創業時代の経営に力を尽くされました。

やがて日本が高度成長期へと向かう中、出版界におきましてもマスセールス型のベストセラーから小部数の専門書に至るまで、多岐にわたる商品の確実な流通整備が求められるようになり、弊社ではその対応の一環として医書専用の在庫・流通システム「東販メヂカル・デポ」を新設いたしましたところ、その運用にあたっては日本医書出版協会の各社様より商品供給等で格別のお力添えを賜り、お蔭様で書店からも非常に感謝されました。

さらには、4 年に 1 度の日本医学会総会における展示販売のお手伝いも弊社にとりまして重要な催事として定着しております。私自身も西日本地区の営業責任者として大阪に赴任しておりました平成 19 年に、第 27 回総会での販売会を経験させていただき、医書に対する先生方の絶大な信頼を目の当たりにして、その一冊一冊が最先端の医療を支え、ひいては私たちの健康にまで直結していることを肌で感じました。皆様との仕事を通じて販売の一翼を担う喜びとともに、改めて責任の大きさを噛み締めたことが思い出されます。

さて、急速な高齢化が進む昨今、医書分野においては主に介護やリハビリ等の領域を中心に店頭での販売実績が拡大基調にあり、一方少子化の中で縮小傾向にある学校採用品市場においても医書への需要は底堅く、一部にはむしろ拡大の動きも見られます。

他方電子書籍も徐々に普及しつつあり、一般書だけでなく学術出版の分野でも読者のニーズが高まりを見せております。弊社でも、全国の書店とともに医書・医学雑誌の電子記事を販売するサイト「Medical e-hon」を平成 21 年 4 月に開設し、先生方から看護師さん学生さんに至るまで幅広い読者にご利用頂いております。

今後ともアナログ・デジタル両面で多様なニーズにしっかりとお応えし、三位一体で医

書販売の活性化に全力で取り組む所存です。倍旧のご支援をお願い申し上げますとともに、皆々様のさらなるご健勝ご活躍と、貴会の限りないご発展をお祈り申し上げ、50周年のお祝いのご挨拶とさせていただきます。

## 『JMPA 50 年史』によせて



日本出版販売株式会社  
代表取締役社長 古屋 文明

(社)日本医書出版協会様の設立 50 周年、誠におめでとうございます。心よりお祝いを申し上げます。

50 年前の昭和 36 年当時というのは、政府の出した所得倍増計画のもと、日本が大きく成長し始めた時代でした。一方、医療現場においては、日本医師会と日本歯科医師会が診療報酬の値上げ要求を出して、全国一斉休診をしたというようなニュースもありました。ある意味で、日本中がバイタリティにあふれていた時代であったように思われます。

それから半世紀、わが国の経済も産業も医療をめぐる環境も、大きく様変わりをしました。特に近年は閉塞感にとらわれ、先行きに不安を感じる時代になってきています。

医療現場においても、医師や看護師の絶対数の不足やそれに伴う過重労働、また診療施設の閉鎖等もあり、これはいずれも日本国民の健康維持に大きな影を落とす深刻な問題です。

そのように時代が様変わりする中で、(社)日本医書出版協会様は一貫して、医療に関する情報を素早くかつ正確に医療従事者の方々にお届けすることを最大の使命として、今日まで歩んでいらっしゃいました。それはとりも直さず、日本国民全体の心身の健康と生活の安定を陰で支えるということであり、その誇りを原点に各社様は日々業務に勤しんでいらっしゃると思います。

近年のインターネットの普及によって、医療に関する情報というのは、さまざまなものが簡単に閲覧できるようになってきています。しかし、インターネットに掲載されている情報を鵜呑みにするというのは、ある意味、非常に危険なことでもあります。ましてや医療や薬事など人間の生命に関わる情報には、決して間違いがあってはならないわけです。

昨年 2010 年は電子書籍元年とマスコミが盛んに取り上げ、出版業界でも黒船来襲といったような空気が流れました。医書というのは、ある意味では電子書籍に対するユーザーのニーズが比較的高い分野であるかと思えます。しかし、医療や薬事に関するさまざまな情報が、出版社様のきちんとした編集や確認の作業なしに流されるようなことがあっては決してなりません。このような意味においても、医書の専門出版社様の使命というのは、今後ますます高まっていくこととなります。長年培われてきた編集・発行のノウハウにま

すます磨きをかけ、正確な情報を医療従事者の方々に提供して、日本国民の健康を支え続けてくださることを切にお願い申し上げます次第です。

末筆ながら、(社)日本医書出版協会様ならびに会員各社様のますますのご発展を心よりお祈り申し上げて、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 日本医書出版協会の 50 周年を祝う



西村書店  
社長 西村俊雄

日本医書出版協会設立 50 周年記念おめでとうございます。

弊社日頃格別の御高配を賜りありがたく御礼申し上げます。

1961 年頃といいますと戦後約 16 年ほど経過した頃と思われませんが、当時流通していた医学関係の出版物は、いまでいう戦前の老舗の社の出版物が主力であったように記憶しておりますが、その後約 10 数年ほどの間に、医療関係者の増員に伴い新しい出版社が創立され現代のような多品種の商品が流通するようになって来たのではないかと考えています。

それ以後も協会各社それぞれに立派な出版物を出版され、業界が競争しておりますが、弊社としては、医学界発展のためいささかでも寄与したいと願っています。



## 日本医書出版協会に期待する



鎌谷書店  
社長 鎌谷睦男

日本医書出版協会が設立 50 周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

私感ではありますが、設立当初の医書出版協会は、一部老舗出版社の閉鎖的なサロン組織のように思っておりました。しかし、現在では会員数も 29 社にのぼり、当社売上の相当部分を占めるに至っております。今後も開かれた組織として会員社数を増やされ、文字通り、日本の医学書出版社を代表する総本部として、役割を担われることを期待しております。

しかしながら、現在、当社で取引している医学書の出版社は 400 社を越えております。ひと昔前までは各出版社が、それぞれ特徴のある書籍を出していましたが、現在では、その書名 1 つを聞いただけでは、一体どこの本なのか、大変わかりにくくなってしまいました。もちろん、出版物の増加も 1 つにはありますが、それ以外に、どの版元さんも売れ筋分野に集中するあまり、自社独自のもつ特徴ある出版物というものが少なくなっているのではないのでしょうか。

今、書店・取次を取り巻く情勢はますます厳しさを増しております。そのうえ、書店同士の売上獲得のための値引き合戦が、相変わらず横行しているように思われます。日本医書出版協会が、その影響力を行使して書店への指導を強化し、時には毅然とした態度を示し、無茶な値引きをやめさせる方策がとれないのでしょうか。

また、経営が行き詰っている書店に対しては、協会会員各社が協力・支援し、立ち直りの手助けを行うことはできないのでしょうか。悪くなったら取次任せということでは、今後は通らないと思います。

医学書の業界では、一部の老舗といわれる出版社の取引条件が他社に比べて、きわめて厳しすぎるようにも思われます。医学書業界がこれからも健全に発展してゆくためにも、こうした出版社が医書を販売・流通させている者のことを考えて、取引条件を緩和していただければと思います。

勝手なことばかり述べましたが、医学書専門取次として、日本医書出版協会が、業界全体のことを鑑みて、その重要な役割を今後もますます発揮されますことを期待しております。

## 40 有余年



株式会社日本医書配送センター  
村田 博美 (第4代社長)

現場、実務でのお付き合いは、協会様作成の月刊の「新刊書籍ポスター」、「雑誌特集テーマポスター」および「医学書情報」、そして毎年3月発行の「医学書総目録」の配送業務であります。

平成5年からは、製本所から直納されます毎月の「ポスター2種」、および「医学書情報」を、協会加盟出版社29社、センター系書店105店、取次店5社の配送業務をさせていただいております。

また、「医学書総目録」の配送は創刊第1号（平成3年？）から毎年3月中旬に刊行され、センター系書店105店に、配送。現在も継続の業務とし実施されております。

弊社の、株主出版社10社すべてが、協会加盟出版社で構成され、弊社の設立には、大変なご助力をいただき、現在も配送の根幹を、形成しています。株主書店は、現在28書店で、協会加盟出版社の発行される書籍雑誌を主軸に、医書専門店として、販売活動を続けて来ました。

日本医書出版協会様との関わりは、弊社初代社長、廣川西松、2代目社長、関 明吉、3代目社長、井上澄彦との関わりであり、われわれ後輩たちに示してくれた医書専門店の生き方そのものと思います。

今後とも、株式会社日本医書配送センターは、日本医書出版協会と医書専門店との配送面でのパイプ役として、微力ながらお手伝いできればと思い、所長、田辺徳宏を筆頭に、日々配送業務に専念致していきます。

## 『JMPA 50 年史』によせて



日本医書専門店連合会  
会長 家田通久

(社) 日本医書出版協会 創立 50 周年を迎えられこれを記念して「JMPA 50 年史」を刊行されますことは大変意義深く、心からお祝い申し上げます。

日本医書出版協会と日本医書専門店連合会との関わりについて述べさせていただきます。

連合会は 1983 年 1 月に発足され 自己の利害関係のみを追求するものでなく、関係各位が満足できる販売活動（書店活動）を通して医学の発展、医書界の発展そして出版文化に寄与するため一致団結し努力する主旨を基に会ができ 初代会長に明倫堂書店 関明吉社長がなり私が事務局を仰せつかり、この時より日本医書出版協会様とのお付き合いの始まりと記憶しております。当時私は書店業も新米でありまして連合会の事務局などの仕事などしたことがなく、たびたび協会事務局に出向き、医書版元、関係団体などの情報を教えてもらい事務的な書類文章作成など大変お世話になりました。日頃、医書専門店に対して日本医書出版協会さんには、販売、展示、宣伝など色々な応援をしていただき感謝しております。

医書界においてここ数年来、再販制度を無視した極端な値引きのため、医書専門店の経営基盤の在立さえもおびやかされております。また電子出版と紙媒体などこれからどうなるか書店業界を取り巻く問題がたくさんあり、日本医書出版協会さんと話し合いをもち、今後医書業界がいい方向に進むことを願いたいと思います。

日本医書出版協会におかれましても、50 周年の輝かしい歴史と伝統の上に立って、ますます活発な活動を展開なされ、業界の安定とさらなる発展にご尽力くださいますよう祈念申しあげお祝いの言葉といたします。

## 『JMPA 50 年史』によせて



(株)井上書店  
会長 井上澄彦

(社)日本医書出版協会設立 50 周年に当たってまずはお祝いと、われわれ書店業界の発展に多大のご指導とご支援を賜ったことに御礼を申し上げなければなりません。この出版協会の設立は只医学書出版界だけでなく、広く医書業界全体にも大きな影響と進化をもたらし、特に今日在る医書専門書店の発展にも大きな恩恵に預かり、併せて深く感謝をし御礼を申し上げ、心から敬意を表するものであります。

これまで医書業界と称しても、大都市圏を除く地方においては、医大やその関連養成学校が所在している一部の地域で、それも限られた特定の書店で取り扱われていたに過ぎませんでした。

しかしこの日本の経済急成長の中で、医療関連従事者の増大も急速に高まってきたために、医学関連の書籍の需要が急テンポで拡大することになりました。

地域医療の拡充と医学の進歩はそれに平行して、医学教育や医療施設の新設・増設も急を成し、一大産業として大きな注目を浴びることにもなるなどして、日本医書出版協会誕生となり、今日の医書業界の第一歩が始まったのです。

われわれ医書専門書店に関した物だけを取り上げても、医学会総会での医書の展示販売・医学専門書店認定制度・全国医書専門店連合会・各社学術雑誌の年極め直送制の普及・全国医書同業会主催の合同研修会等々、数多くの分野で、協会の積極的な指導あるいは支援を仰ぎながら、進歩を重ね、医学専門書店は次々とめまぐるしい変革を遂げつつ、今日までこのような実績を挙げる事ができたのです。一方、協会自身の事業として書店にも共通することでは、医学書業界独自の図書分類法の手引きの作成・日本医書総目録の作成およびそのデータの電子化・電子ジャーナルの実用化、あるいは OA システムの導入にも積極的に手を掛けて流通システムの近代化にも牽引的役割を果されるなどして、今日の二人三脚の大きな地盤を築かれたことは高い評価を得て、今では大きな功績として残ったのです。このようにしてこれまでの日本医書出版協会 50 年の歩みを振り返って述べましたが、これを記念して将来に向けたこれからの課題の一環として期待することは、医書業界の外に対して、特にユーザーに向けても (社)日本医書出版協会および認定医学専門書店の、つまりわれわれ医書業界全体の認知度をもう一段階も二段階も大きく引き上げる

ための事業として取り挙げた展開を大いに期待して止みません。もちろんそれにはわれわれ医学専門書店もそれに呼応して、平行したレベルアップを図り、これまで以上の努力と自覚を重ねた事業として取り組み、向上を目指さなければならないと思います。

最後に日本医書出版協会のさらなる繁栄と発展を心から祈念いたします。

## 『JMPA 50 年史』によせて



(株) 大竹書店  
社長 大竹 勝

日本医書出版協会の 50 周年おめでとうございます。

50 年間、志の高い書籍の出版を目指して来られた皆様方のご努力に感謝するとともに常に書店側に目を向け続けていただいていることにも感謝致しております。

日本医書出版協会との思い出といえばやはり平成 7 年に名古屋で行われた医学会総会のことです。丸善と大竹書店で共同で開催ということで丸善さんと是非とも成功させたいとずいぶん力こぶが入ったものです。

1 月には阪神大震災があり、被害にあわれた方々に、日本中から温かい励ましのメッセージに充たされていましたが 3 月に起きたサリン事件で一変に不穏なピリピリした空気になった事を思い出します。

そんな中、医学会総会のプログラムが恙なく進行して行き、夏に一通り終わったときの充実感本屋をやっていて始めて味わったように思います。

日本医書出版協会の皆様のお陰で無事に済んだことを今も忘れることはできません。

楽しく、バイタリティーに溢れ、よく飲み、名古屋の美味しい物を発掘していただき、その頃の皆様の様子が昨日のことに思い出されます。

それから何回もの医学会総会があり、その都度皆様のご活躍のお陰で成功裏に済んで参りました。年々、出版、書店には厳しい状況になって参っておりますが、このところの不透明さにも必ずや道筋を付けていただくものと期待致しております。

ますますのご発展をお祈り申し上げます。

## 国立大学医学部最後の設置県



株式会社考文堂メディカルブックセンター  
代表取締役 新木 毅

私と協会の初めての出会いは、克誠堂の今井社長と中外医学社の青木社長がきっかけでした。お二人から協会のことやこれからの業界のリーダーとなる方々と接触することを助言していただきました。また上京の度に各出版社、取次を訪問することで物流と特約店制度について勉強の機会を得ました。昭和 52 年 JMPA の事務局は女性事務職員一人と各出版社の幹部で構成され、野生味に満ちた野武士の集団のようでした。各出版社は利害を超えて常に出版会の行く末を喧々諤々議論、書店、取次、出版社等、酒を酌み交わしながらともに情報交換して親睦を深めておりました。彼らの頭の回転の速さに圧倒、業界を背負う JMPA 幹部との出会いは大きな力となり考文堂の土台づくりが出来、沖縄県の医療関係者に情報を発信しております。

第 22 回医書同業界研修会の講演依頼が事務局からあり、テーマ自由ということでチャレンジをしました。講演の内容は、販売とは自分自身との戦いであり一定のリズムで作るあげる無限の芸術である。販売の知識はまず現場を見る、聞く、読むことによって知識が溜りそのエネルギーが回転することによって販売の環境ができる、だが環境は地域によって変化、知ることと理解することは別々であると理論と実践を交えて話をしました。この講演は私の貴重な体験となりました。

1981 年に日本医書出版協会認定制度が発足、当社も認定書店となりました。琉球大学医学部内売店への出店を希望、協会のアドバイスで、JMPA の推薦状と資料を添え医学部設立準備室に提出、資料の作成に関しては、出版社の方と各大学生協および学内出店書店を訪問、案内していただきそれを参考に売店願いを提出することができましたが、経験が浅く、創業間もない当社には地盤、資金、知識がなく出店は無理との評価でした。私は沖縄県環境保健部に出向き、環境保健部長、次長そして那覇市立病院院長、JMPA の推薦状を持参し再度、琉球大学医学部長、医学部設立準備委員会と事務局長等に働きかけた結果、設立準備委員会 5 人中 4 人が考文堂に賛成、投票で売店が決定し、学生、教授陣を迎える準備ができました。契約締結は直接、独立行政法人琉球大学です。

●われわれは一度原点に戻り

書店の役割。取次の役割。版元の役割とは何か？ 確認すべきである。

書店の役割は地域に根ざした文化情報の発信地であり、無駄な価格競争を止め質的競争で魅力ある場作りを心掛けるべきである。



## 『JMPA 50 年史』によせて

学友社書店  
社長 家田通久

(社) 日本医書出版協会が創立 50 周年を迎えられこれを記念して「JMPA 50 年史」を刊行されますことを心からお祝い申し上げます。

日本医書出版協会と学友社書店との関わりについて述べさせていただきます。

当店は昭和 25 年に会社組織になり先代家田通男が社長となり医学書・看護学書・書籍・雑誌など店舗外販で営業してきました(創業は昭和 4 年)。昭和 47 年に私が社長になり現在に至っております。協会さんと私がお付き合いし始めたのが連合会事務局の仕事をやるようになってからだと思います。私が最初に思ったのは、日本医書出版協会は版元さんの集まりなので敷居が高く書店の出入りがなかなかできなかったように感じて思っていました。

連合会の仕事をするようになってからは気軽に行けるようになりました。代々理事長さん、委員長さんはじめ委員の方には大変お世話になり、書店にも認定医学書専門店という称号をいただきこれを宣伝に使うことが医書専門店と認めてもらえることで営業がやりやすくなりました。

ただ大型店の再販を度外視した値引き販売が横行しているために当店は苦慮しております。認定医学書専門店が生き残るためにも日本医書出版協会さんと打開策を考えていきたいと思っています。

日本医書出版協会におかれましても、50 周年の輝かしい歴史と伝統の上に立って、ますます活発な活動を展開なされ業界の安定とさらなる発展にご尽力くださいますよう祈念申しあげ、お祝いの言葉といたします。

## JMPA の設立の頃と『医学書総目録』



(株) 考古堂書店  
会長 柳本雄司

日本医書出版協会 50 年おめでとうございます。

医学関連領域の専門出版社が力をあわせて、最新の医療情報を必要とする先生方に的確に提供してこられた 50 年の業績は高く評価されるものと思います。私ども書店にとりましても、立派な『医学書総目録』の発行や、医学会総会をはじめとする学会への協力、医学専門書店の認定など、販売活動にとりましても頼れる存在になっておりますことを厚くお礼申しあげます。

日本医書出版協会におかれましては、1961 年 3 月をもって設立とされたとのことですが、私が神田神保町の稲垣書店に見習い社員としてお世話になり新潟から上京したのが 1957 年 3 月ですので、日本医書出版協会が正式に発足された 4 年前のことになります。

その頃、考古堂書店は医学書を主に営業をしておりましたが、それより前に私の父と兄が山で突然の遭難死、母もその後亡くなり、営業は親戚の叔父に頼んでいるという気息えんえんたる状況でした。私は新潟大学の学生を 2 年で休学、当時 医学書小売店の研修学校ともいべき稲垣書店へ入学したのです。稲垣近義社長は医書同業会の副会長を務められ、地方の書店の後継者育成に熱心でおられました。

神保町角の稲垣書店は現在、貸しビルになっておりますが、当時は木造 2 階建ての店舗で、その 2 階が住まいで自炊の生活でした。現在の志学書店の菊田社長や東邦稲垣書店の先代などがご一緒でした。菊田さんとは、早朝に皇居のお堀の周りをジョギングして、2 人でご飯を炊いて朝飯といった生活も忘れられぬ思い出です。

さて、日本医書出版協会の最大の事業は、各社の出版情報の的確な発信と伝達にあると思いますが、現在発行の「医学書総目録」を拝見いたしますと隔世の感しきりです。総頁 550 頁余 17,000 点の情報が詰まっている堂々たる目録に成長いたしました。

その頃は、医学書院発行の『医歯薬学書総目録』が唯一の情報源でした。創業者・金原一郎社長の理念のとおり、医学関連の出版物をすべて網羅し、それも掲載料を無料で、どの出版社のものも収録するという理想的な総目録を目指したものでした。まず、50 音順で疾患や項目を引き、それから書名・著者名を探すと、頁数・定価や内容が細かい文字でぎっ

しり詰まっているという優れものでした。年4回、特約書店名を刷り込んでもらい配布、書店も先生も重宝いたしました。国会図書館の資料によると、1952年から1977年までに1号から132号を発行、その後は『医学書総目録』と改称し1994年の195号まで継続、発刊されております。

さらにその資料によると、日本医書出版協会が設立の1961年の2年前、1959年に日本医書出版協会の名前で『医学書総目録』が月刊で発行され、2～11号が国会図書館に保管されていることも興味深いことです。金原出版が発行した『医学書総目録』も、1962年に発行のものが現在、宮崎県立図書館に保存、1963年に発行のものが熊本県立図書館に保存されていることがデータに記録されております。

そんな歴史のうえに現在、立派な『医学書総目録』が発行され、電子媒体でも自由に閲覧できることは隔世の感がありますが、金原一郎氏の理想とする、「掲載料を無料で、すべての医学関連出版物を掲載」は残念ながら難しいようです。考古堂書店のささやかな出版物も、一行いくらかの有料で掲載させていただいております。

電子書籍元年などといわれる昨今ですが、出版社各位のますますのご健闘を祈念申し上げますとともに、書店も若い人たちがこの仕事に入って良かったといえるような業界になりますように温かいご指導を切にお願い申し上げます。

## 『JMPA 50 年史』によせて



高陽堂書店  
代表取締役社長 高橋 穰

今年、「国民読書年」国を挙げて本に親しもうの運動が展開されています。

この度は、日本医書出版協会様が創立 50 周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

また、2009 年 11 月には、新たに一般社団法人格を取得されましたことに、重ねて祝意を表します。今後は認知された組織として、業界ならびに地域社会発展のために一層貢献されますよう、ご期待申し上げます。

さて、出版科学研究所の調査では、1996 年書籍・雑誌売上高 2 兆 6,563 億円をピークに、一昨年 2009 年は 2 兆円を割り込み、1 兆 9,300 億円。13 年で 7,000 億円 27%も減少し、1989 年 20 年前の売上高に逆戻りしてしまいました。書店の総店舗数は 2 万店を割り込み、1 万 6,000 店にまで減少しています。日本書店商業組合の会員数もピーク時の半数を割り込み 6,000 社に減少していますが、その間新規出店により、毎年 5 万坪強の売り場面積が増床し、既存書店の経営環境はますます厳しさを増幅しています。

一方、ネット書店最大手アマゾンジャパンの売上は紀伊国屋書店の売上を凌駕する勢いで急成長し、古書店ブックオフは、店舗数全国一に成長しました。さらに疲弊するこの業界を改善するべく大日本印刷を中心とするグループが形成され、丸善、TRC（図書館流通センター）、ジュンク堂、島崎文教堂、小学館、講談社、ブックオフ、等が資本提携し、出版社、書店が補完し未来の出版業界、書店業界の再構築に向けて行動を始めたようであります。紀伊国屋書店も凸版印刷と業務提携し、同様の行動を始めました。市場の拡大が見込めない今、取次ぎ主導の出版バブルから有利な枠組みの構築に向けて書店、出版社が行動をはじめました。出版バブル崩壊目前の今、危機感をもって行動を起こしたものと考えられます。

日本医書出版協会認定医学書専門店である弊社は、協会はもとより、会員出版社様各位のご指導ご鞭撻ご協力の中で地域医療に従事される皆様から認知され信頼されるまでに至りました。皆様の叱咤激励により、今日弊社が書店業を継続できたものと認識し衷心より感謝申し上げます。

今後、医療関連領域に就労される人口の増加は見込めますが、携帯端末の普及そして、

情報の電子化により情報伝達方法の多様化は必至です。書店として扱える市場は、縮小していくことでしょう。変革の時代を迎え、多事多端のことと推察いたしますが、貴協会の使命、「最新情報を少しでも早く、かつ正確に医学関連領域の先生方にお届けする」ことに、精進努力することをお約束いたします。

日本医書出版協会、会員各社各位、認定医学書専門店が、今後ますます太い絆で結ばれ、さらなる 60 周年、80 周年、100 周年と刻まれることを心より祈念いたします。

## 偉人 先人



(株)志学書店  
社長 菊田高利

日本医書出版協会創立 50 周年、おめでとうございます。

その意義ある記念誌に寄稿させていただくことは、誠に誇りであり光栄であります。

1965 年秋、伊豆の「三養荘」での同業会総会するとき、長老の方一人一人の宴席に挨拶参上の折、「君は威勢がいいね」と声をかけてくれたのが金原作輔会長でした。1956 年稲垣書店入社から 64 年志学書店に入社する迄の間約 4 年、横浜での貿易関係の仕事に携わって居り、敢えて業界の皆さまへカムバックレビューの好機がこの会の旅行（総会）で、そして金原さんとの久々の出会いだった訳です。残念ながらその後お逢いすることはありませんでした。

私たちは同業会を通してのみ出版協会関係の人の動き、物の流れを学んできました。

老舗の金原出版さん、南江堂さん、南山堂さんなどには常に業界を指導していただきました。金原一族でも一郎さんは感覚が前向きで、常に先を読んで居たようです。特に同業界に目を配り、全体の繁栄と安定を考えて下さった方でした。「蝮のたわごと」全 18 巻は将に名著で剃刀と金槌の使い分けの妙が今でも語り草です。そこで述べられている「医療の一隅を照らす」はまさに名言といえましょう。そして今田見信さんの名著「天、地、人」。ともに古典をこよなく愛した方ようです。歯科学書出版の今田さんは協力医書小売店がおらず、歯科医療機器店との協力関係を結び安定経営を歩んだと聞きます。なによりも 1,000 頁を越す東京都歯科医師会百年誌をほとんど一人で編纂、奥付に「編集・今田見信」とだけ記してありましたのには、この方の偉大さに感じ入りました。金原四郎さん、医学資料館等を作られ業界に種々心遣い下さいましたが、維持管理が大変だったと思います。

南江堂の小立さん一族、鉦四郎さんから鉦彦さん迄続く 120 年は、南山堂の鈴木さん一族とともに老舗と崇められ延々と、さながら銀の輝きを放ちながら健康と幸せを作り出して参りました。

先人の偉大さをしかと継承し、守り、業界に寄与している同族の多さに頭が下がりますがさらに、先輩起業家が続きます。中山、太田、浅井、今井、梅澤、木下、永井、小林の皆さん。そして金原元さん、椿さん、泉さん、今田喬士さん、三浦裕士さん、金原出版の小室さん等々の諸先輩。名番頭は南江堂の山崎さんと南山堂の木村さん。そしてますます

お元気な藤實さんと青木さんには、今、確かな歴史を伝えてほしいと思います。

協会員ではありませんが取次の西村さん、楢谷さん。小売関係の井上、谷口、栗田、山口、渡辺、大竹、関、家田、河野、戸賀崎、相江、天野、岩瀬、曾根（雅）、鈴木さん等々。

同業界として敢えて3業種の方々を勝手に列挙させていただきましたが、いずれも錚々たる方々で斯界への貢献度は計り知れないものがあります。

先に掲げた偉大な先人たちは考えられないほど厳しい時代を生き抜かれました。それが私たちへの指導の糧だったように、私たちも次なる世代への栄養剤と咀嚼の力を与えなければなりません。100年を遥かに過ぎた医書出版界が厳然と続くため、業界一人一人が努力し助け合い、日本医書出版協会を主軸にさらなる団結をもって進み、「医療の一隅を照らしつづける」ことが私たちに与えられた責務と役割であると確信しております。

## 日本医書出版協会 50 年史によせて



株式会社神陵文庫  
代表取締役社長 谷村 俊樹

日本医書出版協会が 50 年史を作られるという。

50 年そんなものかと思われる。もっと以前から存在しているような気がしているが長老に聞くと、なんの今のかたちになって 40 年チョイだと言うが、改めて 50 年史となると何をおいてもお目出度い。心からお祝いを申し上げます。

当年 60 歳の私が 50 年の歴史を知るはずもなく、聞きかじりと独善と偏見をお許しただきたい。

戦後 60 余年の今日、戦後いち早く医書の出版と、医書店の立ち上りを思うとき、医書同業会と併行して医書出版関係各社が協調活動として協会に発展されたと聞く。

私も戦後の書店にとって医学書との出会いは劇的なものであり、各科の全書類・大系書出現は医書界の黄金時代でもあったと思われるが、続いて大学生協の出現も書店界にとって冷水を浴びせかけられるものであった。割引問題から価格破壊に及ぼす昨今に至る間、日本医書出版協会さんの役割は何であったのか？

医学書総合目録の刊行は医学書店にとって誠に重宝なものと有難く利用させていただいております。これの出現までは医学書院さんの隔月に刊行される『MEDICINE』と各版元さんの出版目録が書店の書名検索の頼りであって、当時『MEDICINE』の出版社記号のひらがなが今でも生きている。

洪水のように刊行される毎月の新刊量を思う時、年 1 回の総合目録の刊行は少々もどかしく思える次第。

この総合目録の出現に合わせ、専門書店以外の書店や量販店の利便性が増し、今日では至る所で競争入札・割引合戦が繰り広げられる結果と結び付けるのは偏見か？ 戦後 60 年大学の医局を始め、医院・病院を丹念に訪問し医学書販売に専念してきた医書店に日本医書出版協会さんは医学書認定店のプレートを授与されますが、これをいただくのとただかないとの違いは何だろう？ 生協は法により割引自由、大型店はモラル無視でやりたい放題、弱小の医書専門店は嵐の中で孤立無援。医師の読書離れも手伝い、ますます、厳しい経営を余儀なくされているのが現状である。

学会展示にみるように多数の書店が競合し、乱戦・混戦の医学書販売現場に日本医書出



版協会様は何を考え、何を指しておられるのか？ 認定証をいただいたが？？ と思う書店はひとり私どもだけではないと思う次第です。

医書同業会では三位一体が叫ばれます。それが実現できればほんとに良いこと、素晴らしいことと思いますが、出版協会様は出版社さんのための協会である以上、出版社さんの利益を第一義に考えられることは当然と思いますが、書物を作り、それを売る以上、販売店を視野に入れた出版活動と秩序ある販売を販売店側と構築する努力も協会さんの役割ではないかと思う次第です。日本医書出版協会ができる以前は各出版社様と書店団とがそれぞれの出版社と膝を交えて会合する特約店会がありましたが、今日では医学書院さんの特約店会を残すのみで各医書出版社さんとの交流が希薄になりつつあることも否めません。4年に一度の医学会総会の段取りや総合目録作りは大変なご努力と思いますが認定証以外の事柄にも心を砕いてほしいと思っています。

50年の節目に際し医師・医学生の読書欲を呼び戻す出版物の出現と不況脱出に向けたアイデアが企画されることを願ってやみません。出版協会の益々の発展と同業各位の益々の御努力を祈念いたす次第です。

## 医書出版協会設立 50 周年に際して



株式会社文光堂書店  
代表取締役 浅井照夫

小社が文光堂書店部の頃より、医書出版協会のご後援・ご支持をいただいています。このたび、医書出版協会が50周年を迎えられるとのことを伺い心からお慶び申し上げます。

協会設立の頃は、私は4月の新学期には日本医科大学で教科書販売を手伝っていました。当時、日本医科大学では内科学の教科書では“沖中内科書”が圧倒的に売れていました。驚いたのはセットの定価が当時の高校卒業生の初任給をはるかに越えていたことです。当時の正月には、各地の専門書店の皆様が版元・取次店を回ったついでに、よく小社に立ち寄りました。専門書店の元老ともいわれる、高崎の広川西松社長・広島井上修三社長の二方は特によく覚えています。その後も一世代若い松本の関明吉社長・広島井上博社長・宇部の井上澄彦社長・奈良の栗田金策社長・志学書店の菊田高利社長の皆様がよく立ち寄っていただきました。

設立当時の医書出版協会の多くの方も思い出されます。医学書院の金原一郎相談役・金原元社長・医歯薬出版の今田喬士社長・克誠堂出版の今井彰社長・南江堂の小立武彦社長・佐野正司常務・南山堂の鈴木公雄専務などの皆様です。診断と治療社の藤實廣由会長・中外医学社の青木会長には当時からお引立ただいており、お二方はいずれもご壮健でご活躍しておられ、何かとご後援いただいております。

その後、医書出版協会では医学書専門店を力強く応援されて今日までいろいろと活躍されており、専門書店の一員として感謝しております。昭和60年代に医科大学が一気に増加したのは皆様のご承知のとおりです。その時、各県の新設国立医科大学にはそれぞれ地元の書店または医書専門店が学内に販売所を設けました。小社も新設の私立医科単科大学埼玉医科大学に支店を開設することができました。その際に協会発行の“医学書販売に携わる人々のために”は社員教育のために大変役立ちました。

また、日本医学会総会に医書出版協会が書籍展示を引き受けた最初の総会にも広川書店・明倫堂書店・稲垣書店・志学書店とともに参加することができました。その後は日本医書専門店連合会の一員として書籍展示に参加してきました。今年開催される第28回日本医学会総会には医書出版協会：小立鉦彦委員長(南江堂)・医書専門店連合会：家田通久会長のもとに準備段階から参加させていただいております。

専門医制度の発足とともに、各学会の主催する専門医の試験が行われるようになりました。そのための参考書が数多く発行されるようになり、そして各学会総会などの開催に併せて書籍展示会も行われるようになりました。医書出版協会の各社も学会の開催に会わせて多くのタイトルが出版されるようになりました。小社も多くの書籍展示会を行うことができました。これも偏に医書出版協会各社のご後援の賜物と感謝しております。

医学書専門店認定証は認定制度の発足の時から認定していただいております。特に顧客の新規開拓、病院・研究所の事務職への説明に使わせていただいております。

最近の厳しい状況で小社をはじめ、多くの医書専門書店の経営は必ずしも順調とはいえません。専門書店の存在が専門出版社にとっても必要というご認識のもとにより一層のご支援・ご後援をお願い申し上げます。

## 日本医書出版協会と私



文進堂書店  
代表取締役 青鹿 亮二

日本医書出版協会様にはめでたく創立 50 周年を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。昭和 30 年 9 月 25 日に日本医書出版協会様が第 17 回日本医学会総会特別講演集を刊行された記録が残されていると伺いました、偶然ですが私も昭和 30 年春に文京区本郷の医書小売店に入社致しました。当時は医学出版社も数少なく、医学書の出版点数も毎月数えられるくらい少ない状況でした。

今日のように 29 社が協会員として加盟され隆盛を迎えられたことは誠に喜ばしいことです。

その間関係各位の並々ならぬご尽力に心より敬意を表する次第です。また昨年 11 月には「一般社団法人 日本医書出版協会」として新たに設立され、多くの理事の方々が心機一転、出版社と医学専門書店の架け橋として、今後ますます医書界発展のためご尽力下さいますようお願い申し上げます。

最初に私が日本医書出版協会様の存在について耳にしたのは昭和 45 年頃です。全国医書同業会の事務をしておりました菅さんが、協会の事務を兼務しておられたと聞いております。当時普段は医書目録刊行会と名乗っていたようで、その理由は一部の医学書があまりにも高価であると一部の学生が騒いだため、その防衛対策であったと聞いております。

日本医書出版協会様が新しく事務所を構え、本格的に動き出したのは昭和 57 年に事務局専任の新しい事務員の方を正式に採用されてのことです。昭和 61 年頃から日本医書出版協会の名称を正式に使い始めたことと記憶しております。

特に私が協会様にお世話になったのは、昭和 62 年東京池袋サンシャインで開催された、第 22 回日本医学会総会の時からで、事務局の方には大変お世話になりました。その後平成 11 年に東京国際フォーラムで第 25 回日本医学会総会が開催され、南江堂の本郷社長様が出版社の会長に、小売店では私が会長に任命され医学書の他に初めて一般書の展示も依頼され準備に大変な思いをした記憶があります。

協会の本郷元会長様には大変お世話になりました。多くの医学出版元をはじめ、トーハン本社や三省堂の亀井社長様等へ出展の協力のお願いにお伺いした思い出があります。そのお陰で第 25 回医学会総会の書籍展示は盛況裏に終了致しました。その時の日本医書出

版協会様のご支援は生涯忘れられません。その後は多くの学会展示が協会様のご支援ご指導が欠かせないものになりました。その他書籍目録の作製は毎年行われており、現在ではわれわれにとってなくてはならない存在になりました。

近年、医書界を取り巻く状況は物凄い速さで変化し、電子書籍、雑誌の On-line 化、DVD、CD 等これからの 50 年、紙の文化はどうなるのか？ われわれ専門店がいかにして生き残れるのか、ますます日本医書出版協会様のこれまで以上のご支援ご指導をお願いする次第です。

最後になりましたが、日本医書出版協会様の 50 周年記念を心よりお祝い申し上げるとともに、100 周年に向けて一層の飛躍を祈念申し上げます。

## 医書と共に歩んで 33 年



丸善株式会社  
取締役 作中正喜

私は昭和 53 年（1978 年）に丸善株式会社に入社し、金沢出張所（現金沢支店）販売課に配属され、いきなり大学医学部の担当を命ぜられました。

幸い基礎講座から担当したため、基礎系の先生方から医療に関する基礎知識や文献、基本書籍等に関する数多くの知識を習得することができ、その後医学分野を担当するうえで重要な基礎作りができたことは今でも感謝しています。

当時の北陸は老舗医書専門店が代々築いた顧客基盤で市場を圧倒し、当社がそこに食い込むことの難しさをいやほど思い知らされました。学生や無給医局員時代から育てられた恩義から、そう簡単には丸善に切り替えられないというのがその理由です。しかし、大学が人事権をもち各講座と関連病院の密接な関係を構築している日本特有の医局制度が存在する以上、大学をおさえない限り医療市場全体を席卷することは難しいと考え、まずは新入医局員へのアプローチに徹し、その先生が関連病院に異動するあるいは講師、準教授、教授、学長と昇格していく中で、徐々に顧客関係が深まり顧客数も拡大していきました。その後その医書専門店の経営状態が悪化し閉店したことがきっかけとなり、市場が一気に拡大していったことを今でも鮮明に覚えています。

入社から 15 年が経過した平成 5 年（1993 年）11 月に金沢で全国医書同業会の医学書専門販売員研修会が開催されました。入社以来日常的に支援いただいた版元各位のご厚意により研修会講師を依頼され、「医学書外商の実際」というテーマで講演させていただいたことは貴重な体験でした。当時はまだ一介の営業マンで大勢の人前で話すことなどほとんど経験がなく、随分あがりながらも自分の経験談や営業姿勢を熱く語ったことは懐かしい思い出です。

この時の講演内容がその後平成 9 年（1997 年）に「医学書販売マニュアル」として出版され、平成 16 年（2004 年）には、その改訂版を出版いただいたことも自分自身の営業信条や営業哲学を整理するうえで貴重な機会となりました。

その後この「医学書販売マニュアル」がきっかけとなり、新人研修やこれから医書外商を目指そうとする人のための講演を何度か依頼されましたが、後進の育成はもとより、長年お世話になった日本医書出版協会や医書業界の発展に少しでも役立てればとの想いで務め

させていただきました。

丸善に勤めて 33 年になりますが、その間実に多くのお客様との出会いがありました。若い頃にはよく先生方に仕事上の悩みや人生相談に乗っていただいたものです。また、転勤の度に多くのお客様から感謝の言葉を頂戴したことは営業冥利に尽きます。その中でも、過去に医療事故に遭われてしまったある先生は、病状進行や寿命予測から仕事（教育研究）を随分急いでしまい無理難題を押し付けたが、それに対して一生懸命応え支えになってくれたと涙ながらに語ってくれました。恐らく親にも語れないような現実だと思いますが、それを聞かされた時は涙が止まりませんでした。医書に携わっていたからこそその経験ですが、自分の仕事の重さを改めて認識させられた出来事でした。

最近、とても嬉しかったのは、私が新入社員の頃にまだ大学医学部の講師だった先生が、準教授、教授、副学長を経て、この 9 月に学長になられたことです。私はそのご昇進を心から嬉しく思いまた若い頃お世話になったお礼も込めて祝宴を催させていただき先生と和やかに昔話を懐かしみ、大学の将来展望について夜遅くまで語り合えたことはとても感動的でした。このように医書を通じた多くの先生方との出会いや人間関係は正に私自身の財産であり、医書に関われた幸せをしみじみ感じております。

昨今の業界の状況は、出版不況に加え先行きの見えにくい電子の世界が交差し不安定要素が多いなかで、日本市場に参入しつつある強大な外国企業に脅かされないよう、われわれはリアルと電子をうまく融合させたハイブリッド出版や、電子コンテンツ流通をゼロサムではなくプラスサムとする努力を一層強化しなければなりません。残された会社人生を後進の育成と専門書店も含めた医書業界全体の発展のために費やすことで、日本医書出版協会への恩返しとなれば幸いです。

最後に、日本医書出版協会 50 年史の発刊に伴い、執筆の機会を与えていただいたことを心より光栄に思い、これまでの協会各社各位のご厚情に深く感謝する次第です。





# 第3章

## 座談会

---



## 日本医書出版協会のあゆみを語る — 創設期の活動 —

出席者（敬称略）

	青木 三千雄	（株）中外医学社代表取締役会長
	藤 實 廣由	（株）診断と治療社代表取締役会長
	太田 博	（社）日本医書出版協会 50 年史編纂委員長
誌上参加	浅井 宏祐	（株）文光堂代表取締役会長
司会	金原 優	（社）日本医書出版協会代表理事

### ■ 創設期は 1955 年（昭和 30 年）頃

**金原** お忙しいところ、お越しいただきましてありがとうございます。

お陰さまで日本医書出版協会も創立 50 周年を迎えることとなりました。この間、いろいろな変遷がありましたけれども、先輩方にご指導いただいたおかげで日本医書出版協会も、公益法人制度改革の中で新たに一般社団法人に生まれ変わることができました。ますます公益性が高まって、日本の医書出版界あるいは出版界全体にも影響を及ぼすような立場になってきました。これを機会に 50 周年を皆さんで祝って、同時に広く日本の出版界の中にアピールして、少しでも医書界あるいは出版界のために役立つ協会にしていきたいと思っています。

今日は歴代の理事長の方の中から藤實さんと青木さんにお越しいただきまして、協会を創ろうとしたきっかけ、設立当時の経

緯、また当時どういう協会運営をしていたか、理事長の時代以外にも協会の中核としていろいろご指導いただいた頃のお話など、また、苦労話もおありかとは存じますが、そのようなお話も聞かせていただいで、将来にわたってこの協会を運営していく人たちの参考になるようなお話をお聞きしたいと思います。どうぞ今日はいろいろなことをお話し下さい。なお、浅井さんにもご出席をお願いしたのですが、あいにく手術をされて入院加療中ということですので、後日インタビューをさせていただき誌上参加ということにさせていただきます。

創設当時の経緯については青木さんも藤實さんもおそらくその当時から関わっていたと思うのですが、まず、創設のいきさつについて聞かせていただければと思います。藤實さん、いかがでしょうか。どういう動機から協会を創ろうということになったのでしょうか。

**藤實** 創設期の前後についてお話しします。第二次大戦も終わりました、たくさん



(金原 優氏) 今日はいろいろなことをお話してください。



(藤實廣由氏) 先生方から親父にプレゼントしてくれたのがこの杖です。

の学徒兵が復員し、復学しました。私自身もその一員でして、1948年（昭和23年）、25歳の時家業である“診断と治療社”へ就職しました。その頃には由緒ある医書同業会はすでに存在していきまして、南江堂の小立鉦四郎さんや、金原出版の金原作輔さんを中心にして、主に親睦を目的として、非常に活発に活動されていました。戦後の医学の進歩は非常に目覚ましいものがあり、それに伴って医学書出版社だけを会員とする協会設立の必要性が非常に強まりました。そして昭和36年、金原作輔さんを初代会長として日本医書出版協会が設立の運びとなりました。年表にもありますように、設立の時期は1961年（昭和36年）ですが、私自身の記憶では昭和30年ぐらいから設立の動きがあり、金原作輔さんや小立鉦四郎さんが中心であったように思います。

そして先ほど申しましたように、初代会長は金原作輔さんでした。第2代目の会長は南江堂の小立正彦さん、第3代目が文光堂の浅井忠晴さん、第4代目が南山堂の鈴木公雄さん、その後私がおおせつかったような次第です。

当時の業務は、毎月の定例会議、毎年の懇親旅行です。それからもう1つ大きなこ

とは、日本医学会との関係が非常に深まってきたことです。4年ごとに行われる日本医学会総会は盛大に行われまして、その際にここにあります日本医学会総会の学術講演集を必ず日本医学会から出版されました。その製作を協会で行うことになりました。これは大変大きなもので、B5判で1,000ページぐらいありました。したがって学術講演集製作の委員長になる人は大変な重責でした。

**金原** これを医書出版協会で作ったのですか。

**藤實** はい。医学会から委嘱を受けましてね。お金のほうの心配はなかったのですが、こういう立派な本を5冊ぐらい分冊にして、何千ページという膨大なものを協会で作りました。

歴代の代表の一覧表のリストがありますが、私のあとに医歯薬出版の今田喬士さんがやり、それから克誠堂出版の今井彰さん、医学書院の長谷川泉さんがやって、そして青木三千雄さんになっていきますね。

**青木** ええ。長谷川さんのあとに私もやりました。

**金原** 藤實さん、年表では設立は1961年（昭和36年）になっていますが、藤實さん



(青木三千雄氏) 小料理屋に毎月定期的に全会員が集まっていました。

のご記憶ではもっと前から創設へ向けての動きがあったのですね。

**藤實** 昭和30年(1955年)頃から動きがありました。私の父が昭和30年に古希を迎えたのです。弊社発行の雑誌の編集委員の先生が音頭をとってくれまして、多くの先生方が集まりました。そのとき先生方から親父にプレゼントしてくれたのがこの杖です。

**金原** その杖は、先代から藤實さんまでずっと使われている……。

**藤實** そうです。これを今愛用しているのです。金のプレートが付いていまして、これを見ると「昭和30年(1955年)12月3日プリンスホテル」となっています。その時、われわれの業界の代表として挨拶して下さったのは金原一郎さんでした。

**金原** 青木さんはその少しあとですが、設立の頃のご記憶とか、その時の皆さんの活動とか、どのようなことを覚えていらっしゃるでしょうか。

**青木** 藤實さんがおっしゃるように、協会設立前からこういう会があったことは事実ですね。なぜそのときに改めて会の発足とすることにしたかについては、私はよくわかりません。私は、金原作輔さん、小立鉦

四郎さん、そういう偉い方の驥尾に付してやっていたわけなので、設立以前の本郷台の流れということについては、私はあまりよくは知らないです。克誠堂・今井彰社長が御存命中その辺の機微は御存知だったかと思います。

**金原** でもそういう動きがあるということ は実際に見ていらしたのですか。

**青木** 私がこの業界に身を投じたのが1952年(昭和27年)です。そして2年ぐらい経った時にはすでに医書出版社の会を創ろうという動きがあったように記憶しています。

**金原** 今のお二人のお話を総合すると、昭和30年頃から金原作輔さんや小立鉦四郎さんの周辺から「こういう会でも創ろうじゃないか」という話が出たのではないだろうかということになるのでしょうか。

**青木** そうですね。

**金原** われわれも業界の古い資料を紐解いてきて、「設立しました」という文章が出てきて、その資料によると創立は昭和36年(1961年)になっているわけです。そうすると創立に先立ち5~6年間、われわれの先達が協会でも創ったらどうだろうかということ、時間をかけて検討していたのでしょうか。

**青木** 創設を検討していたというよりも、同じような活動はすでにしていたが改めて再設立としたというように認識しています。金原一郎さんの名前があまり出てきませんね。けれども一郎さんは活発に動いていらしゃったので、その辺はちょっと不明ですね。

**太田** 金原一郎さんが「設立の準備委員会の委員になりました」という文章は医学書

院の50年史に載っています。それが昭和36年（1961年）の3月1日なのです。やはり昭和36年に設立の動きができたのですね。

**金原** 5年ぐらいの時間をかけて設立の準備を行った、その当時中心になって準備をした方は、今日ご出席の藤實さん、青木さんよりもかなり年配の方ですよ。もうすでにお亡くなりになっていますが。

**青木** 今井彰さんや金原作輔さんをご存命でしたら、準備段階のことを一番ご存知だと思います。金原一郎さんとは密接でしたから。

## ■ 協会設立準備期間

**金原** 先ほどの藤實さんのお話だと、毎月の定例会のようなものが発展して協会設立の動きが出てきた、毎月の定例会はどのようなものだったのでしょうか。

**藤實** 本郷三丁目近くの瀟洒なレストラン（月村）でフランス料理をいただきながら会合をしていました。

**金原** それは昼ですか。夜ですか。

**藤實** 昼です。記憶は薄れましたが、本郷中央教会の近くであったように思います。

**青木** 私は月村については記憶ありませんね。おそらく昭和30年頃のことでしょう。私が参加するようになってからは本郷三丁目の元医学書院さんの社屋の並びでもう少し三丁目よりの松好という小料理屋に毎月定例的に全会員が集まっていた。当時でも会員社数は15社を超えていました。そのころからすでに新刊リーフとポスターは作っていたと思います。会員社の新刊に限り、会員外のもの掲載していませんで

した。また会員社の共通の関心として全国の医書小売店の動静を、たとえばあの店はよく売るとか、支払いがよいとか、が話題になっていましたね。さらに金原作輔社長あたりかと思いますが、無断転載の事例を示されたりし、われわれ出版社にとって著作権が如何に大切なものであるか貴重な教訓をいただいた記憶もあります。労働問題についても話題になったことはあります。このような形が何年か続き、やがて全員で集まるのも大変だということで委員会制になっていったと記憶しています。

**金原** 洋食のレストランに昼に皆で集まって食事でもしているうちに、同業の会が必要なのではないかという話にでもなったのでしょうか。

**藤實** 金原作輔さんがよくしゃべっていましたね。私たちは黙って聞いていました。

**青木** 金原出版に集まってミーティングをした。金原作輔さんが見えて、業界の進む方向についてきわめて貴重なご意見をいただいたという記憶があります。

**金原** 金原作輔さんと小立鉦四郎さんは同じぐらいの世代だったのでしょうか。

**青木** そうですね。

**金原** その当時、藤實さんも青木さんも30歳ぐらいですか。

**藤實** はい。

**金原** 作輔さんとか鉦四郎さんは15、16歳上ですか。もう少し上ですかね。

**藤實** 当時、私は30歳くらいです。

**金原** 作輔さんとか鉦四郎さんは40代半ばぐらいだったのでしょうか。そういう方々が中心になって動いていたのですね。つまり社業バリバリの人たちが昼食を食べながら、「協会でも創らないといかんで



昭和 47 年 12 月、日本医書出版協会の忘年会。すでに故人となられた文光堂浅井忠晴氏（前列左より 4 人目）、中央医書出版社武藤乾生氏も見える。前列左端は医歯薬出版今田社長。（藤實廣由氏提供）

はないか」というような話になったのでしようね。医書出版社同士の横のつながりは、昔からかなり親密だったのですね。

**青木** 南江堂と金原出版はわりと仲よかったでしょう。

**太田** 小立滋さんは、金原四郎さんと仲よかったですね。

**金原** 会社が隣同士みたいなものですからね。

**金原** そういう意味では医書出版界は、出版社が皆近くにあったということが、まとまりがよかったということの背景としてあるかもしれないですね。

**青木** 医書出版というのはいろいろな面で特殊だったから（笑）。

**金原** 昭和 30 年から 35 ～ 36 年設立ぐらいまでは、皆さんの集まりがあって、おそ

らく昼飯でも食べながら「自然科学書協会という協会もできたことだし、医書でも一つ創ろうじゃないか」という話があったというように想像してよいのではないかと思います。

その後、年表（119 頁参照）を見ると小立正彦さんが二代目。金原作輔さんから小立正彦さんに継がれて、初代、二代とやってきたわけです。その後、10 年ほど経て藤實さんが理事長をお引き受けになったのですけれども、そのころは理事長という表現ではなかったのですね。代表世話人ですか。代表世話人時代は協会の活動について鮮明にご記憶なさっているのではないかとと思うのですけれども、当時はいかがだったでしょうか。

**藤實** 青木さんの時代あたりから変わって

きたのですね。

**金原** 藤實さん、この写真（前頁）はご記憶ありますか。

**藤實** これは私が世話人のときの忘年会です。

**太田** 昭和 47 年です。

**金原** そうですね。記録とぴったり合っています。この頃もやはり代表世話人と呼んでいたのでしょうか。

**青木** 1972 年（昭和 47 年）はまだ会長でした。1975 年（昭和 50 年）に今田さんが長になれば会名を日本医書目録刊行会にし、同時に長の名も代表世話人とされたのですよ。

**藤實** 代表世話人なんて言っていたかどうか。日本医学会と関係ができて、日本医学会総会のお手伝いをやるという、これが僕らのときの大きな仕事でした。いまは何もそういうことはなくなりました。

**青木** そのころの協会の大きな事業として日本医書配送センターの設立があります。1971 年（昭和 46 年）12 月です。設立の背景をお話すると、当時、本郷台の医書出版社は全国の医書専門小売店と直取引を行っている社が多かったのです。各社がそれぞれの小売店あてに出版物を木箱に入れて発送していましたが、それでは手間も送料もかかり能率が悪いから共同で配送会社を作ろう、そうすればそのころ取次が一般書出版社に加えていた掛の引き下げ交渉からも逃れられ、一石二鳥だと。一方で医書の小売店の間では協同組合を作り共同仕入で正味を下げようとの動きがあり、昭和 46 年 4 月に廣川書店の廣川西松社長を中心に日本医書販売組合が設立されていました。配送業務は版元だけでもできるけれど、業



（浅井宏祐氏）「名古屋で和書が売れている」という話が広まりました。

界を大局的にみると小売と共同のほうがいだろうとの意見が大勢をしめ、小売側と交渉、小売側は医書販売組合で配送業をしようと考えていたのですが、ぎりぎりのところで日本医書出版協会と日本医書販売組合の全社を株主とする株式会社の設立に至りました。この席で私が株式会社案を強硬に主張しなかったら今日の配送センターはなかったと思います。社長は廣川書店の廣川社長、専務は私が、その他役員は版元と小売から半々で当たることになり、結局、その後 10 年私が実質的に配送センターの運営を見ることになりました。配送センターの発足に当たりセンターは配送をするだけで個々の版元と小売の取引には一切かわらないことを最大の原則としました。他の出版業界に類を見ない独特の仕組みをもったわけです。

## ■ 日本医学会との関係樹立、出版目録の製作

**金原** 今も医学会総会はわれわれにとって大きなイベントですが、藤實さんが世話人をやられた頃のほうが、あるいはこの協会ができた当時のほうが、いま以上に医学会総会とのつながりが強かったということ





(太田博氏) 決算書が出たのが1975年(昭和50年)日本医書目録刊行会の第1期です。

しょうか。そういう意味ではわれわれはちょっとだらしがないという気がしないでもないですが(笑)。

この講演記録集を作ることを想定してつながりを強くしていったのでしょうか、やはり当時から展示活動などを積極的にやっていたのでしょうか。具体的には協会としては医学会総会とどういふかわり方をしたのでしょうか。青木さんは当時の活動というのをご記憶ですか。

**青木** 定例的なものとしては新刊ポスターとリーフレットの製作と配布で、その他に販売関係、著作権関係、あるいは労務問題など事あるごとに対応していました。日本医学会とのつながりはなんといっても医学会総会講演集の製作ですね。直接には聞いておりませんが講演集の製作については総会側から金原出版さんに諮問があり、金原作輔社長がこれは協会の事業とするのがふさわしいと判断され協会で作るようになったと認識しています。膨大な論文集であり製作も大変でしたが、会員各社がよく協力して無事に作り上げました。直接製作費は日本医学会から支給され、医学会総会に納めた以外のものは協会として売ってよいと

のことで、当時の収支決算書が残っていればわかるのですが協会の財源としてある程度潤ったと思います。

**金原** 協会が版元として、協会の出版物として発行したということですね。実際に取次経由か何かで売っていたのですか。そうするとかなりの収入になっていたのですか。

**青木** なっていたと思います。全国の医書小売店に卸すと同時に協会名義の(?)郵便振替貯金口座を設け直売もした覚えがあります。

**金原** これはいま定価を見ると8,000円ですね。

**太田** 一番最初が1,500円です。その後1,800円ぐらいのが3、4冊出ています。

**金原** 1,000ページぐらいのものが8,000円というのは、その当時としては結構高いのではないのでしょうか。しかもカラーでもないのだから、結構高いものですよ。

**太田** これは42年刊行でしょう。初任給が2万とか3万円の時代です。

**金原** 初任給の1/4か1/5くらい払わないと買えなかったのですか。そうすると、これを出すということがその当時の協会としてはかなり大きな仕事であると同時に、もしかしたら大きな収入源だったかもしれないですね。

**太田** だいぶ裕福だったという話は聞いたことがあります。

**金原** 今はもちろん協会としては講演集の作成はしていないのですけれども、何回ぐらい作ったのですかね。

**太田** 6回。

**金原** 当時の協会はお金に関してはきつと潤沢だったのかもしれないですね。その当

時の決算書がないからわかりませんが。それから次の資料は目録ですね。

**青木** 多分第16回で日本医学会総会の方針が変わり、総会講演集の製作は取りやめになりました。それに変わってということでもないでしょうが第17回の医学会総会（1967年 昭和42年）から会場で医学書の展示をしてくれ、即売してもよろしいとのご意向をいただきました。それ以前の医学会総会でも製薬会社や医療器械会社の展示は行われていましたが販売は禁じられていました。第17回の医学会総会は名古屋で行われ、残念ながら地元でそれだけの能力のある医学書小売店がないので丸善さんに協力していただき無事開催することができました。以降数回は丸善さんの協力を得ましたが第20回の東京での医学会総会は医学書専門店5社の協力で開催成功を収めました。そして今日に至っています。

**浅井** 医学会総会での書籍展示は第16回大阪医学会総会までは、洋書のみ販売でした。丸善さんに協力していただいた第17回の医学会総会で初めて和書の販売が認められました。「名古屋で和書が売れている」という話が広まりました。そして第20回東京晴海（1979年 昭和54年）での医学会総会、青木三千雄さんが企画委員会委員長の時ですが、初めて医学専門書店に書籍展示が任されました。それ以降今日まで続いています。

**太田** 1962年（昭和37年）から目録を協会に出していますね。

**金原** これが昭和37年の目録ですが、こんなものしかなかったのですか（笑）。とにかく目録というか、これは新刊案内のようなものであって、目録全部が載っていた

というのではないですね。現在の目録は業界の中で非常に幅広く使われています。私の社の企画会議でも、競合他社に類書がないか会議の席上で利用しています。長年培われた目録製作の know how はすごいです。

**浅井** 日本医書目録刊行会の製作物は始めは、書店からの要望による雑誌のみを掲載したポスターでした。ポスターの作成は書店からの要望でした。どの雑誌にどのような特集が生まれ、それを把握しなければ販売しづらい、だからといって医学雑誌の掲載内容をまとめるのは書店では無理だということで、目録刊行会に要望がきたように記憶しています。一方、書籍の目録は医学書院さんで出したものがあったでしょう。

**藤實** 医学書院さんのものは立派なものでしたね。

**太田** 医書同業会で1回出したのですけれども、同業会で出すものではないということで、その当時、医書出版協会ができたからそこで出したらどうかとあって、それから目録の製作が始まったと聞いています。

**青木** 総目録を作る前に共同のPR目的で新刊リーフレットと新刊ポスターを毎月作っていたのですが、それだけでは勿体ないというので総目録の製作に発展したのです。これも点数割の掲載料を取りました。今日に至るまで協会の財源として貴重なものでしょう。

当時、医学書院さんが国内の全医書を網羅した詳細な目録を刊行されていたので、最初は協会員の出版物のみを掲載した記憶があります。その折、この目録は販売のためのものかそれとも書誌的なものか議論があったことを覚えています。結局製作コス

トとして1点いくらの掲載料を取ることになり営業用目録に落ち着いたのです。かなり財源になっていた、今でもそうなのでしょうけれども。

**金原** その後、記録によると1975年（昭和50年）に日本医書出版協会という名称を止めて、日本医書目録刊行会に変えましたね。

**太田** 1975年の7月に「日本医書目録刊行会が発足」となっています。

**金原** この当時藤實さんはもう世話人を降りておられましたので、青木さんにその当時の経緯をお聞きしたほうがよいのかもしれないですね。その当時はいかがだったでしょうか。名称の変更はどうしてでしょうか。

**青木** 経営者の団体であると見られたくないということで名称を変えたということに尽きますね。

**金原** 多くの出版社で労働問題がかなり大きくなった時期でしたね。

**青木** 組合問題で協会自体が矛先にならないようにということで変えたと思います。

**金原** 1974年頃というのは非常に大きな春闘をやっていた時期でした。

**青木** そうですね。とにかく経営者の団体ではないことを明確にするために変えたのです。

**太田** 協会の中に残っている記録では、決算書が出たのが1975年（昭和50年）からです。日本医書目録刊行会の第1期です。だからその前は決算書があったかどうかというのはちょっとわからないのです。残っている決算書は1975年以降です。

**金原** やはり1975年の前に14年間の歴史があるわけですね。その間、決算書を作らなかったということはないと思うので

す。あったと思うのです。だけどそれは今まで調べた範囲ではわからないし、どういうお金が集まって、どのくらいだったかということとはよくわからない状況です。1975年といっても35年前の話ですからね。

今田喬士さんが日本医書出版協会から日本医書目録刊行会へと名前を変えたときの理事長あるいは代表世話人でいたわけですね。それから6年ほど経って青木さんが引き継がれた。この頃は出版社の経営問題、組合問題で名称を変更せざるを得なかったという経緯があったのであろうと思います。しかし、名称が変わっても、活動の中身はあまり変わらなかったのではないのでしょうか。目録はいずれにしても出していたわけですね。決して同業者の経営者団体ではなく、目録を作ることを目的とした団体であるということにしたのか、ちょっとよくわかりません。

**青木** 事業的には変わっていないと思います。

## ■ 事務所の間借りから独立へ向けて

**太田** 1976年（昭和51年）に著作権委員会ができたこと、医学書院の50年誌に書いてあります。

**金原** 1976年というと、今井彰さんが理事長。

**太田** 企画委員会の委員長が青木さんになっているのです。著作権委員長も青木さんがやっていたのですよね。私は青木さんが委員長のときに日本医書目録刊行会の著作権委員会に入っていますから。

**青木** そうですね。そのころの仕事としては著作権委員会です。1978年（昭和53年）に

「著作権の知識」の初版を作っています。今にして思うとまったく慙愧のいたりなのですが、草稿は医歯薬出版の今田喬士社長がお書きくださったのに私が全面改稿してしまいました。大変失礼したと今でも思っていますが30年以上前のことなので今田さんも天上でお許しくださっていると思います。

「著作権の知識」は2001年第5版まで続き、その後新しいものが2009年に出版されたね。

**金原** この当時、事務局はどこにあったのでしょうか。青木さんの時代はSYビルですか。そうするとその前は……。

**太田** その前の1、2年は金原商店。医書同業会でもっていたところへ間借りしていたわけです。

**金原** では金原作輔さんが世話人の頃は金原商店に事務局を置いて、小立正彦さんに移った頃からSYビルに、医書同業会の事務所に間借りしたのですか。

**太田** そうです。

**金原** SYビルを使っていた時期は長かったと思うのです。青木さんが理事長の頃もSYビルにいたわけですね。もちろん藤實さんの頃もSYビルの3階、崩れそうな階段を上がって行っていたわけですね。

**太田** 菅さんがいました。

**金原** 事務も菅さんがやっていたのですか。

**太田** ええ。

**金原** 言ってみれば、今の事務局の形態は昔の形に戻ったということですか。

日本医書目録刊行会になって、当然目録を発行するにあたっては委員会のようなものがあつたらうと思いますが、目録を作

ること以外にこの当時目立った活動というのはあつたのでしょうか。相変わらず医学会総会とのつながりは強かつたのですか。青木さんが理事長の頃も、医学会総会はやはり大きなイベントだったのですか。

**青木** 大きなイベントだったことは事実ですけれども、四六時中、医学会総会に関わつたというわけではなくて、著作権委員会もありましたし、販売委員会、PR委員会もありました。電子出版関係の委員会以外は全部ありました。

**金原** 販売委員会、PR委員会です。販売委員会は、青木さんのご記憶にはないですか。

**青木** それぞれの委員会に分かれる前は、企画委員会というところですべて扱っていたと思います。

**金原** 企画委員会というのがあつたと記録には残っているのですけれども、企画委員会というのは何をやっていたのですか。

**青木** 現在の各委員会が集合したようなものであつて。

**金原** つまり何でもやっていた。

**青木** ええ。何でもやっていました。PRも販売も著作権等もすべて企画委員会で対応していました。

**金原** では、その企画委員会とは別に著作権委員会があつたのでしょうか。著作権委員会は1976年（昭和51年）にできたという記録がありますから。著作権委員会と企画委員会と2つ、あるいは目録の委員会など、もう1つぐらい何かあつたのかもしれませんがね。

**太田** 南江堂の海老島孟さんが目録を作っていましたね。

**青木** そうですね。別ではなくその中のい



わば小委員会という形でしたが、各委員の得意分野によって専門と科した訳です。

**金原** そういう人たちが月に1回ぐらい集まって、SYビルの狭い事務所で委員会をやっていたということですか。その後、事務所が移転したのですが、事務所と歴代の理事長の関係というのはたぶん記録の中で図式化するとよいのかなと思うのですが。あるいはこの記録の中に歴史としての事務所の場所についても書いたほうがよいかなと思うのです（図参照）。青木さん、SYビルから移転した当時は移転に関して何か関与されていましたか。それは青木さんの次の時代ですか。

**青木** いえ。私の時代だったと思いますよ。

**金原** なぜ移ったのでしょうか。どういう経緯だったのでしょうか。やはり間借りからの独立ですか。

**青木** 狭いという事情もありました。事実余り狭いので医学書院さんの会議室を拝借して委員会を行ったことも何度もあります。

**金原** 医書同業会の事務所はそこへ残って、日本医書目録刊行会の事務所は独立さ

せようということになったのであろうと推測されます。その辺の経緯は誰もよくわからないのですが、日本医書目録刊行会として独立した事務所と独立した職員を置くべきだという意見になったのだらうと思います。

**太田** 委員会活動も増えたんですね。だからそれにしてもちょっと間借りではということではないかと思います。

**金原** 移転先は水道局そばの谷口ビル。あそこのスペースも狭かったですね。今の事務所の2/3ぐらいでしょう。そこで委員会がどんどんできたのですね。谷口ビルに移ったのと同時に猪川事務員が来られた。そういうことだったと思います。

日本医書目録刊行会の終わりの段階ではいろいろな委員会があったであろうと思います。資料によれば総務委員会、PR委員会、著作権委員会、販売委員会ができたらしいです。ちょうど青木さんが理事長であった時代だと思いますが、先ほどの企画委員会が発展的にいくつかの委員会に分離独立して、委員会構成ができあがったということでしょうか。記録によると、1982年（昭和57年）12月に委員会制度ができたとあります。昭和57年12月というはまだ青木さんが理事長であられたころなのですから。

**太田** 大阪の医学会総会（1983年／昭和58年）の担当理事が永井忠雄さん。1983年の代表世話人は青木さんです。だから1983年には医学会総会担当世話人という委員会はあったと思うのです。

**青木** その年の総会は大阪でしたので大阪の永井さんをおいて他にないので総会担当委員になっていただきました。

**金原** 医学会総会担当というのは昔からあったのではないですか。そういう担当を作らなければいけないし。だから医学会総会と目録委員会は、日本医書出版協会ができあがった当初からあったのだらうと思うのです。販売委員会などはつい最近の話で、昔から継続的にあったのは医学会総会の委員会と目録の委員会、今でいうところの医学会総会とPR委員会です。

(注：医学会総会担当理事はいたが委員会はなかった。委員会が発足したのは第23回(京都)で柴田さん(金芳堂)が担当理事になってから。これ以前は講演集を作っていた頃は製作費などの交渉。展示即売会を行うようになってからは展示料の交渉が役目と推測される)

## ■ 昭和59年、名称をまた元に戻して、日本医書出版協会として活動開始

**金原** 記録によれば、1984年(昭和59年)に、日本目録刊行会から日本医書出版協会へ名称を戻しますが、この当時は小立武彦さんが理事長の頃です。この経緯というのはおそらく青木さんもおわかりにならないかもしれない、これは太田さんのほうがよく知っているかもしれないのですが。経営者団体ではないかというように見られることももうなくなったので、出版協会ではないか、元に戻そうということだったと思うのです。この辺の方が存命ではないので、その当時の経緯を知る由もないのですが、浅井さんをご存じですか。

**浅井** 先ほど金原さんからもお話がありましたように、日本医書目録刊行会の終わりの段階ではいろいろな委員会がありました。総務委員会、PR委員会、著作権委員会、

販売委員会です。委員会制度を活発化させ、しっかり機能させるためにも名称を元に戻すということになりました。その後、理事は実務者だけに、いわゆる実務内閣、動く内閣という意識で協会の運営が行われるようになったわけです。

**金原** 昭和58年頃、名称をまた元に戻して、日本医書出版協会として活動していきましょうということになったわけですが、その改革は小立武彦さん、またそれを引き継いだ三浦裕士さんの時に充実していったのかなと思います。

現在の医書出版協会をご承知のとおり、昨年(2009年)11月1日に一般社団法人になり、ちょうど1年経ちました。実はこの社団法人化しようという話はかなり前から協会の中でもありました。例えば銀行口座一つ開設するにも理事長の個人名で開設しないとできない、それから活動量もかなり増え、事務所も構えて、職員も雇って、目録も出しながら、実は目録もかなりの掲載料収入があって、お金もかなり大きな金額が動いているにもかかわらず、いつまでも任意団体では具合が悪いのではないかという話はかなり前からありました。それで法人制度が変わって、一般社団法人ということなら比較的容易に設立が可能になり、法人の設立基盤を変えたわけです。

その辺、いかがでしょうか。先輩理事長からごらんになって、こういう形をとったわけですがけれども、その辺で何かお考えがあればぜひお聞かせいただきたいのですけれども。

**藤實** おっしゃるように、だいぶ前から社団法人化しようという話はありませんでしたが、法人化してどういうメリットがあるのか、その

当時はそれがよく見えなかったわけです。けれども昨今はすべてについてきちんとせざるを得なくなっています。それから信用という面でも、やはり法人化されていれば強いのではないかと思います。

**金原** 法人化への検討は、青木さんが理事長をされているころもあったのですか。

**青木** そういう話もありましたが、実質的には「法人も考えられるね」くらいで終わってしまいました。

**太田** 今回の法人化はタイミングがよくて、監督官庁は総務省になるわけです。以前は文部省（当時）でした。私が自然科学書協会の理事をやっていたころ文部省に対して会計面等で非常に苦勞しました。

**金原** 当時、社団法人を作ると、監督官庁が事務職員の採用に意見を出してくるといった話があったのですよね。

**太田** 自然科学書協会でも話はありましたね。

**金原** 監督官庁の要請は一切受け入れませんでした。やはり法人化しようとする。監督官庁からいろいろ言われることもあり。医書だけで一つにくるのは実はかなり難しいだろうなというようにわれわれも思っていたのです。

藤實さんはいかがですか。何かその辺の一般社団法人化するということについて、藤實さんの時代に話はなかったですか。

**藤實** はい。ありませんでした。

**金原** 社会的な信用が法人の場合とそうでない場合ではだいぶ違います。特に最近、著作権問題でコピーによる複製権の侵害あるいはPDFを作ってコンピューターに取り込む等の違法に対して「日本医書出版協会からです」と書状を送る、その時に社団

法人という名前がついているのと単なる出版社の集まりというのではだいぶ違います。今ちょうど1年経って振り返ってみるとやはり作ってよかったと思っています。

最後に、藤實さんと青木さん、浅井さんから、いまの日本医書出版協会ならびにその会員社、先輩方の会社も会員社ですけれども、次世代のこの協会の理事会あるいは運営している各委員会の委員の人たちに、ぜひ一言ずつアドバイスのようなものをいただければと思います。藤實さん、いかがでしょうか。

**藤實** 従来からの紙媒体での出版が無くなることはないと思いますが、いろいろな電子メディアを巡る動きが毎日のように報道されています。ただ、いつの世も変わらないことは、マーケティングに基づいて企画を考えること。著者がいて、読者がいること。著者もお忙しいのでその仲介を今までは出版社・印刷会社・用紙業者・取次・配送センター・書店ルートで行ってきた。

これからはわれわれも含めいずれの会社も中抜きされる可能性が出てくる。他業種、新しい業者の参入も考えられる。そうした中で、われわれ出版社はどうやって、著者と読者の橋渡し役を続けられるか。コンテンツビジネス、医学情報提供業としてわれわれのレーゾン・デートルを保っていかれるか。若い方々に知恵を振り絞っていただき、この大変な激動の時代を乗り切っていただきたい。アドバイスというよりも皆さんにお願いしたいことです。

**金原** 青木さんはいかがでしょう。アドバイスをいただけますか。

**青木** 著作権を取り巻く環境やIT産業の登場に伴って今年は電子書籍元年といわれ

ますが、さまざまな面で動きがものすごく激しくなってきましたね。今後をどのように予想してよいのか、非常に難しい状況です。そういうすごい激変に対して皆さんには是非とも頑張ってください。出版という言葉の意味はだいぶ変わってくるかもしれませんが、せっきやく社団法人があるわけですから、それを中心にしてしっかりやっていっていただければと思います。

**金原** 浅井さんはいかがでしょうか。

**浅井** 私は、日本医書出版協会と医書専門店との関わりの中で一つ提案があります。「洋書の医書専門店を作ろう」ということです。学会の展示では、海外の出版社がダイレクトに洋書を入れてきます。「文光堂さんの場所を貸してくれ」と言ってきます。やはり日本の医書専門店が責任を持って学

会場で医書を扱う、それが本来の姿であろうと思います。また電子書籍化に関しましては、専門書には息の長い商品、医学書の場合解剖学書等がこれにあたりますが、それと2～3年でなくなってしまう商品もあります。電子書籍元年と言われますが、すべての商品を電子化の流れに乗せるのではなく、その商品がもつ性質に併せて電子化していけばいい、やはり息の長い商品からの電子化を行い、すべての商品を激動の電子化の波に乗せる必要はないのではと考えています。

**金原** ありがとうございます。今日のお話を50年史の中に掲載させていただいて発行したいと思います。どうもありがとうございました。



(2010年11月4日、東京ドームホテルにおいて)



## 第4章

# 50年の委員会活動

---

- 1 歴代理事長
- 2 総務委員会
- 3 著作・著作権委員会
- 4 PR委員会
- 5 広告委員会
- 6 販売委員会
- 7 電子出版委員会
- 8 医学会総会展示委員会
- 9 電子化特別委員会



## JMPA 50 年史

### — 創設期前後 —



(株)診断と治療社  
取締役会長 藤 實 廣 由

### JMPA の歩みを語る

#### 創設期前後

1945（昭和 20）年太平洋戦争も終わり、たくさんの学徒兵が復員、または復学しました。私もその中の一員でした。1948（昭和 23）年、25 歳の時に家業である「診断と治療社」へ就職しました。

その頃には、歴史のある「医書同業会」はすでに存在しており、南江堂の小立鉦四郎さま、小立 滋さま、金原出版の金原作輔さまらを中心として活動されていました。

ところで戦後の医学の進歩は目覚しく、かつ専門分化は進み、それに伴って、医書専門出版社のみを対象とする“医書出版協会”設立の必要性が強まっておりました。そして 1961（昭和 36）年、金原作輔氏を初代会長とする「日本医書出版協会」が設立されたのです。もっとも設立の時期や中心となった人物が何人かは諸説があり、正確な記録は見付かりませんので、一応、1961（昭和 36）年 3 月 18 日をもって設立ということにしております。

その後、第 2 代会長に、南江堂の小立正彦さま、次いで文光堂の浅井忠晴さま、南山堂の鈴木公雄さまと続き、1970～72（昭和 45～47）年に小生が代表世話人に就任しました。当時は、「第 18 回医学会総会（沖中重雄）東京」の頃で、大阪万博、元軍曹横井庄一さんのグアム島での発見で大騒ぎでした。

協会の業務は①定例会、②懇親旅行、③日本医学会との関わり、すなわち 4 年ごとに開かれる“日本医学会総会”の際の、学術論文集の作成 15 冊計 1,000 頁と図書目録でありました。簡単にいえば、激動の前の比較的、静穏な時期であったと思います。

次いで医歯薬出版の今田喬士さま、克誠堂の今井 彰さま、医学書院の長谷川 泉さま、中外医学社の青木三千雄さまが会長に就任しました。

## 日本医書出版協会 50 周年によせて



第 25・26 期、第 27・28 期、第 29・30 期  
理事長 本郷 允彦

一般社団法人日本医書出版協会 50 周年にあたり、一言お祝いを述べるとともに、私の在任中を思い起こし多少の思い出を述べさせていただきたいと思います。

医書団体にはご存知のように、全国医書同業会が百数十年の歴史をもってありますが、日本医書出版協会も、その前身としては昭和初期に医書組合が発足したとの説があります。このたび活動実態が明らかである 1961 年 3 月 18 日を設立とするとの決定により、ここに設立 50 周年を迎えるとのこと、まことに慶賀の至りでございます。

さて、私が文光堂 浅井社長より JMPA の理事長を委嘱されたのは、1999 年でございます。その年の 4 月に第 25 回日本医学会総会が終了し、日本医学会総会展示委員長の役目も何とか周りの皆様のおかげで全うすることができた矢先、10 月 3 日の第 24 期通常総会で選任をいただきました。「業界に入って 5 年しかたっていない私が理事長」と当惑をしたのが思い出されます。

私が理事長の間、何をしたわけではありませんが、在職中の出来事を思い出しながら時系列で示させていただき、お許しをいただきたいと思います。

### [第 25・26 期 役員構成]

副理事長・金原優（医学書院）、理事・中尾俊治（メジカルビュー社）、秦幸大（医歯薬出版）、長谷川恒夫（へるす出版）、柴田勝祐（金芳堂）、藤実彰一（診断と治療社）

この 2 年は従来から発行していた「著作権の知識」の改訂に着手、現在でも改訂を重ね、医書の世界だけでなく専門出版社の間でも有効に活用されている著作権専門冊子であります。また医学会総会終了後、各種の展示会の出展料の版元負担ルールの検討も 99 年末から始まりました。

2000 年に入り現在のブルービルディング移転前のビル所有者から保証金の返還がなく、弁護士を入れて保証金返還請求の裁判を起こしたのもこの年でありました。このころ複写権センター（JRRC）での「白抜き R」の取り扱い中止の問題が発生、その他著作権関係では違法コピー業者に対する訴訟問題も発生しましたが、特に JRRC の「白抜き R」取り扱い中止については、後「JCLS」の設立にいたる大きな問題に発展していきました。現在で

は JCLS の機能は JCOPY に引き継がれ、複写問題の窓口として機能を発揮されています。また政府から「国家公務員倫理規定」が発表され、協会でも国公立の先生方と話し合い、検討がなされたのもこの頃であります。2000 年末にかけては医書大型書店の倒産が発生、医書出版社・取次を含めてその処理に追われました。

2001 年に入り JRRC の「白抜き R」の取り扱い廃止を受けて、当協会加盟社を中心に「JCLS」を設立、自然科学書協会の協力も得て、株式会社として発足いたしました。この年は三者懇が初めて 2 カ所（東京・大阪）で開催された年でもあり、以降 2 カ所での開催が続いております。

#### [第 27・28 期 役員構成] 副理事長、理事とも留任

2002 年には翌年に控えた日本医学会総会・福岡大会の概要がまとまり、福岡国際会議場・マリンメッセで開催が予定され、前回に引き続いて健康医学書の展示も求められ準備に入りました。同時期に著作権分野においては「患者のプライバシー保護」「著作権法の改正にともなう制限規定の見直し」について検討を開始しました。また、従来から懸案になっていた認定店の中の総合書店と医書専門店の認定基準について検討を始めました（現在は総合書店と医書専門店の認定を分離認定）。

2003 年は日本医学会総会福岡大会が皇太子殿下ご臨席のもと福岡国際会議場で開催され、小林謙作展示委員長（医学書院）の下、3 月 30 日～4 月 6 日の会期を盛況のうちに終了しました。また当協会会員社における医学書総目録など広告掲載料等の引き下げを行いました。

#### [第 29・30 期 役員構成] 役員を改選し以下の役員で業務を遂行

副理事長・金原優（医学書院）、理事・中尾俊治（メジカルビュー社）、平田直（中山書店）、今井良（克誠堂）、柴田勝祐（金芳堂）、藤実彰一（診断と治療社）、梅澤俊彦（医事新報社）、監事・川井弘光（金原出版）、長谷川恒夫（へるす出版）

2003 年末に医学書総目録、新刊書情報、雑誌テーマポスター等の価格表示を総額表示に改めて表示することにしました。出版界は外税表示が主流でありましたが、個々の出版社の表示は別にしてカタログ・ポスター類は総額表示を採用し、また新刊書情報の入稿もすべて電子入稿とし処理の円滑化を行いました。

2004 年に入り 6 月に東京・大阪にて三者懇を開催、製薬会社との関係を強化するとともに医広協との円滑化を図ってきました。同じ時期、従来の「医学書販売マニュアル」改訂の検討に着手するとともに、著作権においては二重投稿・不正投稿が問題となり引用・転載についても同時に検討をはじめ、今日では「著作権の知識」をホームページに掲載、各出版社の参考に供しています。

2005 年に入り著作権分野で京都大学 OCW プロジェクトが問題となり、協会として京都大学に質問状を送付、一方「著作権制限規定の見直し審議」については意見交換を始めま

した。

9月25日総会において役員を改選、金原優氏を理事長として推薦、現在も金原理事長の下「一般社団法人 日本医書出版協会」としてますます発展していることは、喜ばしい限りであります。

## 総務担当理事として(平成 17~21 年) —どう事務局を変えていくか—



金原出版株式会社  
代表取締役社長 川井弘光

日本医書出版協会は本年創立 50 周年を迎えるに当たり、記念事業として医学会総会での「特別展示」ならびに 50 周年記念式典・祝賀パーティなど関係諸団体の来賓をお迎えし、お祝いできますこと、偏に会員社の日頃の協会に対するご理解と活発な活動を行っている各委員会があってこそその発展と思われまます。

さて、私が日本医書出版協会に深く関与するようになったのは、2005 年 9 月に開催されました総会にて、総務担当理事を仰せ付かった時より始まります。

前中尾俊治担当理事に事務局の内情など事前にお伺いもし、またご指導もいただき大変感謝を致した次第です。

そんな中、閉塞しがちな協会をどう活発化し、充実させて行くか、窮境の問題とその要因は何なのかを熱く語られました。

私が実施し感じられたのは、組織として曖昧な部分が多く見られたこと、改善策として一つ一つ解決して行くしか方法はないと決断し、まず目前に控えた退職者の処遇と新規採用者の確保が第一歩と考えました。お陰をもって事務能力に長けた現事務局長の田村由加利氏を迎えることができ、また彼女もこちらの意図することに理解し、次から次へと発生する問題にその都度対応していただけたことはこれからスタートをきる総務担当としては今後を左右する問題でもあった訳で素晴らしいスタートであったと思います。

次いで協会運営に関する職員教育、服務規程、賃金規程などの労務環境の改善、財務、経理に関わる徹底見直し、その他、全国医書同業会からの業務委託の契約締結に至る検討書類の作成、一般社団法人設立に向けての必要書類の作成、そして協会自身の強化策の一環として安定した実績のある羊土社、真興交易医書出版部、ベクトル・コアの 3 社の入会手続き等々対応に追われた日々の毎日でありました。

副委員長の木下 攝氏には私の気づかない点、特に労務環境面ではご尽力をいただき、大いに助けられましたし、また委員会の活動も活発化し委員会も増える中、多様化した協会の事情に明るい浅原実郎氏に参画いただいたことは、非常に心強く邁進できたことも事実です。お二人のご協力には敬意と感謝を申し上げます。

また今思えば、これら一つ一つの改善も金原 優理事長（現代表理事）をはじめ、理事

会での理事各位の素早い、そして的確な判断のお蔭で、問題処理をスムーズにできたのだと思います。したがって私自身もそれほどストレスを感じることなく、また自社の仕事と平衡して対応できたことも事実です。諸業を曲がりなりに無事遂行させていただき、協会発展に多少なりともお役に立てたかなーと思っております。在任中ご無理をお願い申し上げたことも事実です。失礼の数々お詫び申し上げます。同時にありがとうございました。

最後に日本医書出版協会が一般社団法人としての飛躍と出版業界の先導役としてますますその役割は大きく成長することを願っております。



## 「法人」化への取り組みと法人設立



第 35 期（第 1 期）総務委員会  
委員長 浅原実郎

平成 21 年（2009 年）8 月 1 日、第 35 期を迎えた任意団体・日本医書出版協会の最大の課題は、一般社団法人化への取り組みでありました。その法人格取得に向けての業務は当然ながら総務委員会が担うこととなり、当期より総務委員会担当の理事に就任した私の最初の仕事でもありました。

法人格取得への動きは、直接的にはその前年（2008 年）12 月に施行された「公益法人制度等の改革関連三法」がきっかけであり、その「一般社団法人・一般財団法人法」により、それまでは許認可制であったのが届出（登記）制に変更され、きわめて容易に法人格取得ができるようになったのであります。

しかし、それはあくまでもきっかけであって、当協会の社団法人化の必要性は、時代的にも社会的にも大きくなっていったのであります。

さて、一般社団法人設立のためには、法の定める要件を充足する必要があります。具体的には、社員数や基本財産などの要件については問題がなく要は法に則った「定款」を定めなくてはならないということでありました。

そこで、従来の「会則」をもとにして新しい定款の原案作りに着手しましたが、私を始め総務委員は「法律的裏付け」に関してはまったく無知で、正直原案作りができない有様でありました。そこで、齊藤司法書士事務所（司法書士：齊藤 弘氏、担当：阿部哲也氏）に監修を委嘱して、何度となく訂正・修正を繰り返しながらようやく定款原案を作成し、理事会に報告して承認を受け、平成 21 年 9 月 27 日（日）の定例総会に引き続いて開催されました「法人設立臨時総会」に提議し、満場一致で可決されたのであります。

「設立時社員」として金原代表理事を始め理事・監事を明記したこの定款は、直ちに公証役場において認証され、平成 21 年 11 月 2 日（月）法務局へ登記し、ここに「一般社団法人・日本医書出版協会」が設立されました。

### 法人としての組織の整備と運営

社員（協会会員社）ならびに財産をそのまま継承して設立された一般社団法人・日本医

書出版協会は、当然ながら社会的なステータスを確立し、その社会的使命や業務内容なども周知されるようになってきました。しかし同時にまた、法人格をもつ団体としての組織や運営に変革することも急務となったのであります。

まずは社団法人として初めて迎えた第一期「決算」であります。一般社団法人には法律で規定されている「決算基準」があり、その基準によれば「正味財産増減計算書」とか「収支計算書」など、従来にはない計算書を作成しなければならず、税務・会計監査を委嘱している大槻税理士事務所（税理士：大槻徳市氏、担当：福田和彦氏）としても一般社団法人の決算処理は初めてのため、参考資料と付き合いながらの悪戦苦闘の計算書作りでありました。たまたま小社（メジカルビュー社）の監査役が社団法人の財務・会計に精通している公認会計士で、幸いにもその方的確なアドバイスを受けながら、何とか「決算報告書」としてまとめられたのはなんと総会開催日の数日前でありました。

その決算基準で浮上してきたのが「基金」計上のことであります。任意団体から継承した財産の中の社員（当時は協会加盟社）から徴収した「出資金」は、当然ながら一般社団法人では「出資金」として計上できず、基本財産である「基金」として計上・保持すべきものであります。しかし、設立時の定款には「基金」についての条文がなく、したがって、急きよ定款を改定する必要が生じたのであります。

定款の変更・改定は総会での決議事項であるため、定例総会に引き続き開催された臨時総会で発議し、満場一致で承認されることとなりました。

そして正職員（事務局員）の新規採用であります。従来は協会幹部の人脈というか、縁故による採用が主であって、それはそれで協会との親密度が最初から高く、良い面もあったのでありますが、一般社団法人として初めて迎える正職員であり、法人としての社会性も勘案して、あえて「一般公募」として、通常会社や官公庁と同じ採用システムを導入したのです。応募者はなんと100名弱。書類選考のうえ、筆記試験と実技（おもにPCスキル）試験を実施し、若干名に絞って面接をしたうえで最終決定としました。

また些事ながら、従来は事務局での申し送り程度にしか決められていなかった慶弔に関する内規も整理して「慶弔に関する規程」として整備いたしました。

このように、法人化への準備から法人設立、そして法人としての組織の整備と運営までをわずか1年という短期間に成し遂げたのは、まさに事務局長・田村由加利氏の力に負うところが大きかったことをここに明記しておきたいと思っております。定款の原案作成における斉藤司法書士事務所、第一期決算書作成における大槻税理士事務所との粘り強い折衝をはじめ、協会内における調整、各種文書の作成など、田村氏の能力と頑張りがあったからこそあります。あらためてその労に感謝したいと思います。

## そして 50 周年を迎えて

一般社団法人となって 2 期目の平成 23 年、日本医書出版協会は創立 50 周年を迎えることとなりました。そこで、50 周年を記念して「特別記念事業」を展開して、協会の事業内容を広く一般にアピールし、協会が果たすべき使命・役割を知ってもらおう絶好の機会にしようということになりました。

その記念事業そのものは協会が挙げて取り組むもので、「特別実行委員会」を立ち上げ遂行されているのでありますが、広く一般に知らしめるというまさに「広報」活動でありますので、総務委員会として全面的に協力して推進していくこととなりました。

このように、一般社団法人の設立から法人としての組織の整備と運営を担当し、さらに創立 50 周年記念事業への全面的な参画・協力活動まで、近年になく多事多難な総務委員会を支えてきたのは、総務委員各位の誠心誠意の活動があったればこそであり、ここに委員各位を明記して、あらためて感謝の意を表したいと思います。総務委員会副委員長：木下 攝氏（協同医書出版）、総務委員：中山穂積氏（ベクトル・コア）、梅澤俊彦氏（日本医事新報社）の 3 氏であります。

## 著作・出版権委員会との関わり



出版者著作権管理機構（JCOPY）顧問・元医歯薬出版  
秦 幸大

日本医書目録刊行会 1978 年 1 月発行の A5 版「著作権の知識 編集・執筆のために」が手元にあります。

本冊子の発行される 1 年ばかり前だと思われませんが、今田喬士社長から「刊行会で著作権委員会をつくり、会員間の著作権トラブルの解決と啓蒙を行うことになった」から参加せよ、との指示をうけました。

第 1 回の会は、医学書院・畔上氏、金原出版・吉川氏、南江堂・大友氏、他に文光堂の方と私、今田委員長の 6 人だったように思います。委員会の仕事は、会員間の著作権トラブルは話し合いで解決する、共通する著作権問題を協議し解決する、会員の著作権思想を啓蒙する、としました。

冒頭の「著作権の知識」を作ることにし、目次を作り分担を決めてそれぞれが書くことにしました。数回持ち寄った原稿を検討していたところ、今田委員長が、中外医学社の青木社長の原稿を持ってきました。ほとんど手を入れるところのない原稿で、検討していた付表その他を若干付け加えて出来上がったのが、冒頭の冊子であります。公衆送信権など新しく支分権が追加されたときや、複製権等譲渡型出版契約書を作成したときなど、必要に応じて改訂し、第 2 版から B5 版の冊子になりました。

克誠堂出版・今井社長、診断と治療社・藤實社長のもとで委員であった記憶がございます。大阪に単身赴任した 2 年間は委員会に出席していません。中外医学社・青木社長が委員長に就任され、青木委員長のあと私が仰せつかりました。

記憶に残る出来事を 2、3 記します。

複写権センターができたとき、複写利用料ページ 2 円では委託できないとして、各社独自に利用料を設定して委託しました。センターの主業務は包括許諾方式で、青木委員長は包括許諾に反対で個別許諾を主張されていました。医学書院・山本委員や私は、利用者の利便性から包括方式もやむをえないと考えていました。そこで山本委員と 2 人で、白抜き R の複写利用料の徴収・分配方式（JCOPY の徴収・分配方式とほぼ同じ）を作り、書協の役員をされていた医学書院・椿忠雄社長に提出し、センターで利用してもらおうとしました。

印刷工業会が東大の中山信弘教授を委員長とした委員会で、出版物の版面の権利は印刷者が保有するとする報告書を公表しました。これに反対し、大日本印刷・凸版印刷・共同印刷・図書印刷の大手4社の当該部門の責任者に協会に来てもらい、その意思を伝えました。定期的に協議をしようということになりましたが、2回ばかりの話し合いで続きませんでした。この業務委託契約書のひな型も作ったような気がしますが定かではありません。医歯薬出版では、印刷所等と業務委託覚書を結び、発注する業務に関する権利は出版者にあることを明確にいたしました。

雑誌論文の複製権等（上映権・譲渡権・公衆送信権・可能化権）を、著作者から譲渡してもらい、執筆依頼状と執筆承諾書に入れる文言、投稿規程の表示方法、雑誌本体への表示の仕方（JCOPYのホームページの表示）をまとめて会員各社に提示しました。

書籍についても、譲渡型出版契約書のひな型を作成し、三山裕三弁護士の校閲をうけ会員各社に提示しました。複製権等（上映権・譲渡権・公衆送信権・可能化権）を書籍の販売されている間譲渡してもらい、期限付き複製権等譲渡型出版契約書であります。

書籍の場合は、執筆者も多く、周到な準備が必要であります。著作者代表を決め、複製権等の期限付き譲渡・代表して契約書に署名することを了承してもらい、これらを執筆者に了解してもらい手続きをとる。具体的には、企画書（執筆依頼状）に明記し、執筆承諾書にもその文言を入れる。この作業を疎かにすると、この譲渡契約は成立しない。雑誌の場合もそうですが、事前に著作者の了解を得たうえで行うことが肝要であります。



## 著作・著作権委員会活動を振り返って



中山書店

著作・著作権委員長 平田 直

### 著作・著作権委員会の活動

当委員会の重要な活動としては、ほぼ毎月開かれる委員会の場で各委員や会員社から寄せられた著作権関連の問題や課題を検討し、適宜解決することがあげられます。また、近年、デジタル化の進展やネットワーク化の普及で著作権問題も多様化し、ホームページへの無断掲載、二重投稿、違法な著作物の頒布（電子辞書のコンテンツや書籍の簡易製本版など）ほか、いろいろな問題が起きています。委員会としては、著作権に対する啓蒙活動を広めるとともに、出版社がそれらの問題に法的にも対抗できるような著作権契約の締結を進めることが重要な課題であると考えています。

### 歴代委員長の苦心の作

『著作権の知識：編集・執筆のために』の初版の発行は1978年1月であり、初代の青木三千雄（中外医学社）委員長、二代目の秦幸大（医歯薬出版）委員長の二世代に亘る委員長を中心に先輩委員の方々が心血を注がれた結果を冊子にまとめ、その充実に努めて来られました。この間、各社の著作権意識の高揚と編集部員の教育用のテキストとして、この冊子は大きな役割を果たしました。以来、2001年1月までの23年間に版を重ね、第5版へと至りました。

2003年に私が委員長をお引き受けした直後に要請されたことは、第5版の増刷でした。このことについて何回か委員会で検討を加えた結果、著作権環境の大きな変化に対応し、さらに今後発展をする可能性のある電子出版などの新メディアにもその視野を広げて考える必要があるだろうということで全委員の意見が一致しました。そして、

- ・同タイトルでの発行は今回限りとし、最低限の修正を加えた“第5版（増補）”とする。

- ・特に執筆者にむけたQ & Aを作成して協会のホームページにアップする。その後適宜バージョンアップを行う。

- ・出版社の編集者に向けた内容の冊子を『編集者のための著作権の知識と実務』のタイトルで新たに委員の分担執筆により出版する。その際、さまざまな参考資料を収載する。

を3つの原則としました。

こうして『編集者のための著作権の知識と実務』は、2009年4月1日に発行されました。

STMガイドラインについては、自然科学書協会の著作権委員会でとりまとめ、理事会で承認された『転載許諾ガイドライン 2008』を自然科学書協会の了解のもとに、同冊子の巻末資料として収載しました。

### 機関リポジトリ

会員社の雑誌に掲載された論文を大学の機関リポジトリに登録したいという申し出が執筆者の所属している大学図書館などから会員社に多く寄せられています。著作・出版権委員会では、委員会での検討に加え、電子出版委員会との合同会議を経て、機関リポジトリについての基本的な考え方と対応について2007年8月27日付「機関リポジトリへの登録について」と題したレポートをとりまとめました。

### 著作権についての啓蒙活動

1) ホームページに「著者の皆様へ：著作物の利用にあたって」と題して転載許諾のお願いの書式とともに著作物を利用するうえでの注意点を掲載しました(2005年10月)。

2) 大学等で、テキスト(教材)作成するために他書の図表等を利用する場合の注意点を「大学等におけるテキスト作成時のご注意」としてホームページに掲載しました(2007年11月)。

3) 啓蒙活動の一環として、ACCS(社団法人コンピュータソフトウェア著作権協会)と連携し、B5判1/2頁の違法コピー撲滅のための広告を作成し、各社の定期雑誌に啓蒙広告として掲載しました。

### 会員社向け講習会の開催

2010年7月23日、東京ガーデンパレスにて、当委員会のメンバーが講師となり会員社の著作権処理の担当者を中心に受講者約80名の参加を得て講習会を開催しました。

## 『医学書総目録』とは



元（任期：平成 3～13 年）PR 委員会  
副委員長 椎橋 辰夫

PR 委員会の主任務は、医学書総目録（年版）と医学書（新刊）・医学雑誌（特集テーマ）のポスターならびに同リーフレット（毎月）の作成・発行で、全国医学書取扱店等への配付を通じて、広く PR することです。メンバーは委員長（1）、副委員長（1）、委員（5）、計 7 名前後で、顔ぶれは実務に長けたつわもの揃いであることが特徴といえます。

昭和年代は、出版各社から所定用紙に必須事項を手書きで記入していただいていた発行物の原稿としていました。昭和 36 年 9 月の『医学書総目録』を見ると、23 会員出版社、122 頁、医書同業会医学書総目録編集委員会発行と記してあり、13 年後の昭和 49 年 3 月の総目録には「医・歯・薬・看護などの書籍、雑誌のほとんどすべてを収録しました」と声高らかに宣言して、A5 判横長型、232 頁の版型に変えた総目録が日本医書出版協会（20 会員社、文京区湯島 4-1-22 SY ビル）の名で発行されています。大阪で第 21 回日本医学会総会が開かれた昭和 58 年には、会員社 21 社、非会員社 107 社の出版物が掲載された 455 頁余に及ぶ総目録に成長しています。やはり日本医学会総会が開催される年は、PR 効果も大いに認められることから掲載出版社の数も大幅に増加する傾向にありました。

現在の判型スタイル（四六倍判）に改められたのは 26 年前の昭和 60 年 2 月で、このときは「収録書籍全点を電算処理し、書名は 50 音順に、かつ監・編・著・訳者欄は編集の都合上 1 名とした」として電算化を強調し日本医書出版協会（文京区本郷 2-11-5 第 2 谷口ビル）の名のもとに 21 会員社、115 非会員社の書籍等が束＝約 1.5 cm に納められています。なお、昭和 50～57 年の間は、日本医書目録刊行会の名で総目録が発行されています。

このように PR 委員会は、ポスターや総目録等を通じて対外的 PR 活動を行ってありますが、これに伴う外部からのご要望やご意見、クレーム（？）などにも対処しなければならない立場にあります。総目録の電算化（分類方法や書名を 50 音順に改めた等）の頃の実例を「思い出」として 2 例ほど紹介しておきます。

・重厚な書籍を出版したと思われる著者から「総目録と謳っている貴発行物に自著が掲載されていない。医学書総目録というのは誇大ではないのか。」

・「先輩を差し置いて、後輩の著書が前掲されているが、なぜか。」



いずれも前記の基本方針に基づいて処理されたことでもありますので、担当の PR 副委員長がお問い合わせいただいた先生に対して郑重にご説明をしてご理解を得た次第です。

結びに、PR 委員会のメンバーが作業上、常に心掛けたことは「正確・迅速」で、定価、タイトルの校正（例：予防摂取→接種、臭覚→嗅覚）には特に気を配りました。

ここ 10 年間（平成 12～21 年）の『医学書総目録』の年平均掲載数は、新刊 1,160 点（月約 90 点）、既刊 17,700 点、また掲載出版社数は同 176 社であります。





中外医学社  
代表取締役 青木 滋

### 1995 年以前の冊子体作業

1997 年春に CD-ROM 版「医学書総目録」が刊行されるまでは、日本医書出版協会には電子版の出版物は存在しておりませんでした。私自身は 1991 年より PR 委員会に所属しておりましたが、当時は入稿方法も専用原稿用紙を用いており、原稿とゲラの引き合わせ校正が必要でした。

総目録に関しては、普通紙と印画紙でそれぞれ校正作業が行われ、印画紙の赤字は場合によっては熟練した委員のはさみと糊による文字通りの切り貼り作業により対応することもあったと記憶しております。

各社の毎月の新刊発行点数は現在ほど多くはなく、1990 年代の初頭に、春の学会シーズンがらみの新刊が多く刊行され、ひと月の掲載点数が 100 点を超えてしまい、新刊リーフレットを中綴じで製本する必要が生じたことを記憶しております。

### CD-ROM 版医学書総目録の刊行

日本医書出版協会の各委員会委員の資料を見ますと 1993 年（第 19 期）に「電子メディアによる医学書情報を研究するための委員会（仮称）」が設立されております。委員会メンバーとしては金原 優氏の名前のみが記されているにすぎません。私は 1995 年（第 21 期）より参加させていただきましたが、金原 優氏を委員長、金原 俊氏を副委員長かつ実質的なリーダーとして、PR 委員会とは独立した委員会として存在しておりました。この時代に書誌の電子データの仕様が検討・決定され、それは今日の web データベースにまで、受け継がれています。その他の検討事項としては、検索ソフトの検討、電子入稿方式の検討（前回データの追加・削除か、社内データを基に全面差し替えとするか）等がありました。

成果として 1997 年春には 8 センチシングル CD 版の初の電子版医学書総目録を刊行し、CD-ROM はその後半年に一度ずつ刊行されました。

また、1998 年春には「日本医書出版協会ホームページ」を開設し、現在とほぼ同様のオンラインサービスを開始しました。また、時代を感じさせるのは同時にパソコン通信（NIFTY-Serve および PC-VAN）へのデータ提供も開始しております。

## 電子カタログ小委員会の時代

1999年(第25期)組織変更が行われ、この委員会はPR委員会の下部組織の電子カタログ小委員会となりました。この時代には、冊子体小委員会で発行する新刊情報の入稿は紙カードで行われ、webデータベースに追加する説明文、目次等の情報のみが電子的に入稿されました。冊子の新刊情報は、多くの場合、書籍・雑誌の刊行前に原稿が作られるため、実際に刊行されたものでは書名などが変更されている場合もみられます。この点を補い、より正確でより充実した情報をwebで提供することを目的に「チョコッとチェック」のシステムが検討され、2000年7月に説明会が行われるとともに開始されました。これは新刊情報の原稿提出の1~2カ月後に、実際に刊行された書籍と新刊情報を照らし合わせてチェックすると同時に、説明文、目次等のより充実した情報を付与するものであり、現在までもほぼ同様な方法で行われてきております。「チョコッとチェック」が書籍を対象としたものでありますが、ほぼ同様の作業を雑誌に対して行う「雑誌でGO!」のシステムも2001年8月に開始されました。

## 総目録への自動組版導入

協会のwebだけではなく、冊子体の医学書総目録の組版についても、電子的な視点から工夫がなされました。自動組版の導入である。それまではテキストを流し込んだ後の体裁の修正はまったく手動で行っていたため、初校の赤字の量が非常に多く、しかもそれを毎年繰り返していました。総目録に流し込むテキストの「書名」「著者名」「定価」といった要素は出現順が決まっており、字間をつめて一行に納めてしまうか、次の行に送ってしまうかのルール付けが比較的やりやすかったです。数年にわたる検討により、2007年にはほぼ自動組版プログラムは完成型となりました。

## 協会の基幹業務の電子化

1990年代の後半から、書誌データをPCで作成し、ネットワークでやり取りすることが一般的になってきました。それとともに、毎月の新刊データについても電子入稿を希望する声が大きくなってきました。これに答える形で2004年7月より毎月の新刊データの入稿を完全に電子化し、原則としてそれまでの専用原稿用紙の使用を取りやめました。この時点で、電子カタログ小委員会の仕事は、協会の目録を電子的にも発行する立場から、協会の基幹業務の一端を担う立場へと変化したといえるでしょう。このような変化を受け、2005年には2つの小委員会を一体化したPR委員会が発足しました。

また医学書総目録に関しても2009年より、協会会員社、非会員社ともに完全に電子入稿となりました。

## さらなる協会webの充実へ向けて

広く書誌情報を紹介するうえで、冊子体に対してwebの重みが増すにつれ、協会のwebに関して読者や書店へのきめ細かい対応の取れた、充実した作りが求められてきております。2009年より、中長期をふまえた検討をPR委員会としても開始しました。詳しくは、電子化特別委員会の項をご覧ください。と思えます。

## 広告委員会の活動について



日本医書出版協会  
広告担当理事 今井 良

広告委員会の設立は、日本新薬協会があった頃の1985年（昭和60年）にさかのぼります。当時、広告料金の審査方法に問題があり、独占禁止法に抵触するのではないかということが話題にのぼり、それに対抗し出版社としての独自性を保つために設立されました。現在は、医学専門雑誌に掲載されている広告のあり方についての研究を行っていますが、その活動の一つとして、2～3年に一度「三者懇談会」を開催しております。

三者懇談会とは、立場が違いますが医療に携わる三者、(1) 広告主であるクライアント様、(2) 広告を取り扱う代理店様、(3) 日本医書出版協会会員社が一同に会して、知識の吸収や情報交換のイベントを行って親睦を深める会合で、広告委員会のメインの活動となっております。

元々この三者懇談会は、日本新薬協会の中にありました広告部会の主催で行われていましたが、日本新薬協会がなくなり暫く途絶えていました。しかし、2001年に当時の広告委員長である長谷川恒夫氏（へるす出版）をはじめ、多くの方々のご尽力で日本医書出版協会主催にて復活させることができました。

私が関わったのは2004年の第2回からです。この時は、前年に雑誌広告に関する読者アンケートを実施、その結果発表と「私と医学雑誌」と題しまして医師をお招きし、ご自身と医学雑誌の関わりについてご講演をいただきました。また、日本製薬工業協会様からは薬事法の改定点についてのご説明をいただきました。

第3回は2006年に開催いたしました。この時は「これからの医学・医療産業の現状と展望」と題しまして、日本医師会様、日本製薬工業協会様、そして私ども日本医書出版協会よりそれぞれの立場での問題点、将来の展望についてご講演をいただきました。

第4回は2008年の開催で「医療用製品情報概要記載要領等の改訂」と題しまして、日本製薬工業協会様より改訂点の具体例を掲げ、大変わかりやすくご説明をいただきました。もう一つの講演として医学専門広告協会様のご要望もあり、会員各社の医学専門雑誌の媒体説明会を行いました。講演会形式による一社ごとの説明では、各誌にかける時間が足りないのです。各社ごとに説明用のブースを設営し一斉に説明会を行いました。クライアント様は聞きたい出版社のブースを重点的に回ることができ、出版社側では宣伝課員のみなら

ず、編集に携わる方々も積極的に参加され、媒体の特徴、対象者、編集委員、編集の意図や特集のテーマの決定などさまざまなエピソードを交えて説明したことで、より親近感ある説明会となりました。

第5回は2009年に開催いたしました。2年連続で開催いたしましたのは、6年ぶりに雑誌の読者アンケート調査を実施、その結果発表を情報がホットなうちに行う必要があったからです。このアンケート調査は今までのものと違い、広告についてだけでなく雑誌そのものの読まれ方を調査する内容で、私どもが出版している医学専門学術誌と主として新聞社系の出版社から発行されております大型媒体誌との比較という形式で行いました。より公正を期するために、調査・集計・分析については専門調査機関に依頼して実施しました。その結果、私どもの医学専門学術誌のほうが、記事の信頼性、雑誌の長期保存性、閲覧の反復性のいずれも優れていると評価されていることが明らかになり、大きな反響となりました。

また、2010年11月に新たな試みとして「二者懇談会」と称し、医学専門広告協会様の営業スタッフの方への媒体誌説明会を行いました。これは広告代理店の営業の方々に、より深く各出版社の雑誌についての知識を深めていただくことを意図したものです。懇談会の前半は講演会形式で、日本医書出版協会会員社が1社あたり5分間で媒体誌概要説明を行い、後半は三者懇談会の時と同様に、出版社ごとにブースに別れての説明会を行いました。広告代理店の方々の感想や参加者アンケートでは概ね好評でした。

一連の三者懇談会などの活動を通じて広告委員会では、私どもの医学専門学術誌は発行部数こそ少ないものの、それゆえ99パーセント有料で購読され、読者層もはっきりしており、編集側も執筆される先生方も読み手の顔を見て制作、執筆していることをPRしてまいりました。また、学術論文だけでなく広告も重要な情報の一部であるという認識で、読者層の顔を見ながら見やすい誌面作りを心掛けているので、医学専門学術誌の特徴や読者層を十分ご理解いただき、ご出稿頂ければ必ず効果があるということを常にクライアント様に訴えてきました。時代はさらに厳しさを増して行きますが、これらを基本姿勢として今後も継続して活動して行く所存です。



## 販売委員会創設の頃



株式会社文光堂  
代表取締役会長 浅井宏祐

昭和 55 年か 56 年頃と思いますが日本医書目録刊行会・企画委員会で雑誌が毎号特集になってきましたので「雑誌特集ポスター」を制作しました。そうしたら書店から「新刊ポスター」も作ってくれという要請がありこれも作り出しました。小立武彦理事長（南江堂）になって企画委員会を発展解消して PR 委員会と販売委員会というのを作ったらどうかということで、企画委員会のメンバーの中嶋上氏（医学書院）を PR 委員長に、販売委員長は私になりました。昭和 57 年秋のことです。この時は事務所も SY ビルから谷口ビルに移転して間もないときでした。当時の委員は橋本幸一（金原出版）・三好龍城（医学書院）・木村道之助（南山堂）・栗原昭良（医歯薬出版）・浦沢保雄（南江堂）・池田清（文光堂）の海千山千のバリバリの営業マンでした。

まず、私が最初に心懸けたのは情報の共有化と徹底した議論です。委員の誰かが出張をして問題点を見つけてきたり、書店様からの要望等に対する報告がなされると徹底的に議論をした。決して委員長の独裁でなく民主的に運営しました。なお、当時は経営者同士の交流はありましたが社員同士の飲み会等の交流は会社で禁止されていたので、委員会が終わると情報交換会と称してよく飲んだりしたものでした。

また、日販に委員会が出向き講堂で常務・部長・課長たちを集め早く本格的に「医学書」を扱うように訴えたこともありました。その後、日販王子流通センターに医書センターが誕生しました。

委員も栗原氏から岩瀬昭氏（医歯薬出版）に、木村氏から内田栄一氏（日本医事新報社）に替わり、バリバリの現役とベテランとバランスが取れて結束の堅い良いチームワークが取れてきました。

ここで日本医学会総会書籍展示販売について少し述べておきます。第 17 回日本医学会総会（昭和 42 年・名古屋）から第 19 回（昭和 50 年・京都）までは洋書がよく売れた時代なので丸善が単独で執行していました。和書も各社が出品していましたが 7 割近くが洋書の売上でした。当協会として初参加したのは第 20 回日本医学会総会（昭和 54 年・東京）からで高崎・廣川書店、松本・明倫堂書店、東京・稲垣書店、千葉・志学書店、東京・文光堂書店の 5 社に委嘱しました。この時から和書の売上が伸びてきました。そして第 21

回日本医学会総会（昭和 58 年・大坂）・第 22 回日本医学会総会（昭和 62 年・東京）が開催された際には販売委員会と PR 委員会とが協力をして医学書展示即売会を執行しました。販売担当は日本医書専門店連合会に委嘱をし、物流はトーハンと日販に交互に委嘱をしました。

第 23 回日本医学会総会（平成 3 年・京都）からは医学会総会展示準備委員会が正式に発足をしたため販売委員会と PR 委員会とから委員を出し強力な体制を作り、関連する委員会の協力を得る体制ができました。この委員会が医学会総会事務局と展示料・展示場所・展示スペース等の交渉をしていくという方法が現在まで続いております。そして今まで成功裡に実行されてきていることは大変喜ばしいことです。

昭和 63 年には「医学書販売に携わる人々のために」（現在は改訂され「医学書販売マニュアル」となっている）と言う小冊子を作成しました。これは 46 医科大学から 80 医科大学となり医学生が 4,300 人から 8,000 人と急増し、47 都道府県すべてに医科大学が設立されて医学書を扱う書店が急増したためであります。医学書専門書店の支店増だけでなく、医科大学ができたため本格的に医学書販売を始めた書店が増えたためであります。われわれの目的はいかに「医、歯、薬、看護、その他のコ・メディカル書」の売上を増やしていくかにあります。そのために新規の医学書取扱書店を専門書店レベルまでアップしてもらうことにあります。

昔から医学書の販売額の高い県は医療レベルが高いといわれております。私たちの委員会は全国の医療レベルを均一化したいと医学書専門店・医学書取扱店とともに医学書販売の売上増に苦心をしていました。その一助として「認定医学書専門店」制度を作りました。店頭に来られたお客様には医学書を買うことの安心感を与え、外商ではこのお店の販売員は自分の専門分野の書籍を間違いなく薦めてくれるという安心感を与え、入札等の際にはこのお店に任せれば多少値が高くてもアフタフォローがしっかりしているという安心感を与える。そういう間違いのない安心感を与える医学書店ですと、アピールができるとして設置しました。

金原優氏（現・代表理事）と交代するまで、私は 13 年間という永い間販売委員長を務めました。これはひとえに委員のお陰であります。私が販売委員長時代に委員として協力してくれた方々に感謝と御礼をこの誌上を借りて申し述べて最後にします。



## 販売委員会'95～'05

診断と治療社  
代表取締役 藤実彰一

当委員会には、委員として30代の頃を中心に9年間、委員長としては40代に入ってから10年間、在任したことになります。とにかく活動が多く忙しい委員会でしたが、業界の諸先輩にご指導いただき、気鋭の委員の方々に助けられて、何とか任務をこなしてきました。思い起こせば'95年、42歳のいわゆるヤク年でした。健康面では何の問題も起きず、医学会総会展示委員長の任務も無事終わり安堵していたところ、ついに回ってきたのが販売委員長の大ヤクでした。

出版科学研究所が「出版月報」'96年10月号で医学書特集を組みました。初代委員長で当時理事長の文光堂浅井社長や当方など医書数社へ取材し、同研究所の出版統計などにも照らし合わせ、'95年の医書市場は800億円と推定されました。これには看護・洋書を含み、家庭医学書などの一般書は除外されています。この年の出版市場全体は2兆6,000億円（今となっては翌'96年がピークとなってしまいました）ですから、医書のシェアは3%ということになります。出版市場は'82年に1兆5,000億円を超え、'89年に2兆円を突破しましたが、医書市場は600億円といわれていました。ポストバブルでも、まだ不況に強いといわれていた出版界が年々拡大する中、医書シェアが4%なら1,000億円になると皮算用したこともありました。その後、出版市場は長期低落中で、'09年には2兆円割れと20年前の水準に戻ってしまいました。医書はというと、漸増しているような実感もありました。低迷している出版界の中で健闘している分野には違いないでしょう。

委員長になり、第1に医書の市場拡大をめざしました。これからも医学・医療の読者人口は増えそうであり、ゼロサムの世界ではないと考えました。各社が企画・販売促進などで競争を繰り広げるのは当然としても、市場全体を拡大させるためには、業界としてそれなりのチームプレーも必要と思いました。委員も半数が世代交代して若返り、来るべき21世紀に向け一同、前向きな意欲に燃えました。

第2に、正しいと思われる販売情報を吟味して、できるだけオープンに会員社へ流すことを励行しました。すでに先達のご努力で、当委員会には種々の1次情報が業界で最も集まる仕組みはできていました。一方、業界にはいろいろな会があり、1次情報が口承を経て曲がって伝わり、判断に苦慮されている事例も散見されました。会員社の判断の一助と



していただくため、月例委員会や臨時会の記録をなるべく詳しく記述し送付しました。手間はかかりますが、会員社からは好評でした。各社の自由な取引には関与しませんが、正しい販売情報を会員各社が活用して発展していただくことは、市場拡大につながると考えました。

総合書店の出店ラッシュが続き、究極の専門書としての医書ブームとなった時期でもあります。看護・医療系の学部増設も相次ぎました。取引の是非は取次社と各社が判断することですが、まず当委員会へ相談に見えることも多かったです。いくら拡大志向といっても、読者数にも発行部数にも限りはあります。一時の流行に乗った、思いつきでの着手では永續きしません。専任の担当者を置いて長期的に取り組む覚悟は不可欠です。既存店を含めた市場環境も考慮します。注意深く対応しました。

学会販売も年々盛んになってきました。これも窓口となり、ルール作りを試み、売上調査なども行いました。「認定書店つうしん」をスタートさせ、種々の案内だけでなく、各学会展示の売れ筋タイトルを速報送信して、全国的な販売などに活用していただけるようにしました。

在任中はきわめて多くの方々とお会いし、親しくさせていただきました。全国の専門書店・総合書店・大学生協、取次会社・出版社の、経営者・社員の皆さんと、年例会そして臨時の打合せなど、年々盛んになって行きました。月例委員会には来客がないほうが珍しいくらいです。

'88年に当委員会で作成した新入社員用研修テキストを全面改訂新版し、「医学書販売マニュアル」として'97年発行、'04年にはその改訂増補版を刊行しました。

この他に、展示巡回販売、再販問題、消費税表示問題などもあり、書き出せばきりがありません。

こうした多岐にわたる役務をこなすため、分担制にして、当初7名で始めた委員会も、補充・交代を重ね、ついには12名の大所帯となりました。販売実務のベテラン・中堅を中心に若手経営者も加え、業界のアクティブな方々に多数参加いただきました。歴代の委員の方々の熱意に溢れた貢献に心から感謝申し上げます。

## 五十年では区切れない



へるす出版  
代表取締役 岩井 壽夫

協会創立から50年に渡る長い歴史、もっといえば設立の前史からも迎れる時間が横たわっており、その間に先人によって何がなされてきたのか、何が積み上げられてきたのか。今では確かめようのない膨大な過去に比べると、ごく最近の数年にのみ関与した私には、不用意に声を出せない躊躇と戸惑いがあります。それにもかかわらず、たまたま50周年の区切り時点で販売委員長を仰せつかっていることで、何らかの記録を残す役割が私に回ってきました。不確かですが、販売委員会活動の概略を記すことにします。

申し上げるまでもなく、刊行した出版物を販売し、代金回収で完了するまでの過程には、実にさまざまな方が関与されています。各出版社は自社商品の販売戦略を練り、流通には取次会社や専門書輸送の作業があり、読者に最も近い地点には書店様がおられます。当然それぞれの立場から強烈な主張が発せられ、異なる販売手法や条件・要求が飛び交うこととなりますが、この取引上の格闘に首を突っ込むのが私どもの委員会業務です。

また、専門書の出版と流通は限定した分野でのターゲットを絞った仕事です。商品内容とは分野が異なる読者（専門家）の購入は予定できず、結果、少部数生産になり、高定価にならざるを得ません。つまり、専門領域の読者に対して、専門出版物を製作し、専門書販売に精通した書店人が扱うこととなります。したがって、一冊の医学書が読者の手に届くまでには、「専門書」をキーワードにした関係者が結集し、繋がっており、その結束はおのずから強固なものになります。結束は会社や年齢、立場を超え、驚くほど密接な交流になり、信頼関係に支えられた長いお付き合いを築くこととなります。

初代販売委員長を浅井宏祐氏（文光堂）がつとめられ、金原優氏（医学書院）、藤実彰一氏（診断と治療社）に続いて私がお引受けしたときには、難問はほとんど踏み固められ、一定の取引慣行が定着した平らな大地が広がっていると見えました。先人が専門書販売のためのルールや条件、手法などを整え、医書販売の特殊性を確立した多大なご苦勞のあとでありました。やがて新しい波として立ちあがってきたのは、一般書版元の参入、大型書店の販売攻勢というもので、専門書の特殊性が希薄になりつつある事態でした。さらに、看護介護分野の伸張、学会展示販売の隆盛、通販利用の成長があり、現在では電子書籍が迫ってきています。

当初は医学書版元として専門書の特性に応じた流通を確立すること、そのための環境整備に苦勞されたと聞いています。地域差があり、競合があり、人材や資金が求められ、専門書流通の経路の確保が肝要でした。そして全国に大学医学部や医科大学を整備する政策と相まって急速に医学書専門店様が増え、業界の発展が可能になったようです。

これらの時代に販売委員会の役割は書店様への情報発信であり、専門書販売の足場を確保する地ならし作業でした。まず、認定店制度を設け、医学書の販売で大きな実績を示されている書店様を協会認定店と位置づけました。この制度の主眼は、医学書の専門的な販売所を際立たせること、その書店様と協会会員社との関係を強固にすることのほか、お客様が安心して医学書を選書し購入できる環境を提供することにあります。したがって、店舗での十分な品揃え、専門知識をもった販売担当者の存在、また、業界発展のために書店様相互の連携協力などが認定基準になっています。書店様は認定店であることを掲示してお客様にアピールし、協会会員社は発行雑誌で認定店リストを広告掲載し、学会展示販売でも特別協力しています。

「医学書販売マニュアル」も作成しています。これは専門書の出版流通に関わる版元や書店様、取次会社の方々にその特殊性をご理解いただくための入門書です。また、取次会社や書店様との定例会合もっており、情報や意見の交換会は毎年10回余に及びます。

私が関与した数年間にもさまざまな変化がありましたが、今後、インターネットの発展とともに、出版物の形態や流通手段はさらに急速な変貌を遂げると思えます。つまり、どのような方々が、どのような形態の情報を、どのようにして入手するかの変化です。しかし、医学書出版社として“必要な専門知識を、必要な専門医療者に届ける役目”は変わらないと考えます。そのための立場を確保し、販売営為を可能にするのが当委員会の役割かと。

ところで、販売委員を引き受けられた方々は各社の販売責任者であり、各地の書店様と濃密な交流をもち、業界事情に精通した方々です。これら歴代の委員の方々の惜しめない情報提供、旺盛な行動力、無償のお力添えによって委員会活動は支えられてきました。心から御礼申し上げる次第です。それにしても今後の遙かなる次代を想えば、50周年は瞬く間に過ぎ去る区切りにすぎませんが…。

## 電子出版委員会の軌跡



JMPA 電子出版委員会  
副委員長 金原 俊 (医学書院)

「電子出版委員会」は当初、「電子ジャーナル委員会」として、2006年1月に誕生しました。当時、洋雑誌は、既にその殆どがインターネットを通じて提供されており、日本の医師や研究者にも、洋雑誌は紙媒体ではなく電子ジャーナルにての利用が既に定着していました。そのため和雑誌においても著者や編集者から電子化を望む声が聞かれるようになり、会員社の間でも電子化を進めるべきか、当面は紙媒体でも良いのか、また、電子化を進める場合はどうするか、などが大きな関心事となっていました。そうした状況の中、専門委員会設立の要請が多く出されるようになり、それに応える形で「電子ジャーナル委員会」が発足しました。委員長は理事である金原優（医学書院）が務め、私が副委員長となり、委員には電子出版に高い知識と経験がある、青木滋（中外医学社）、新長佳明（メジカルビュー社）、長山泰男（医薬ジャーナル社）、福田淳（医歯薬出版）、松田真美（医学中央雑誌刊行会）、横井信（南江堂）の各氏が就任しました。

まずは欧米の電子ジャーナルの調査、研究から行い、その機能、ビジネスモデル、利便性、長所、短所などを詳細に分析しました。次に委員各社の電子化に対する考え方、具体的な取り組みなどを率直に報告し合い、それらを踏まえて経験の少ない出版社が電子化する場合の具体的な方法を、いくつかの条件に分けて検討しました。しかし、いくら論議しても結論が出ないのが、「当社は電子化すべきなのか？」という会員社の素朴な疑問への答えでした。その答えを得ることこそが委員会の設立趣旨でもありましたが、分野を問わず国内の出版社に電子ジャーナルの実施例は乏しく、エビデンスのある回答はありません。その中で電子化を進めるべきか否かは、各社が仮説を立てリスクを負って実証し、判断して行くしかないと思われました。

そうして2008年9月、それまでの2年半余りの委員会での検討を報告する「電子ジャーナル委員会 中間報告会」を、多数の会員社の参加を得て実施しました。骨子は①海外の電子ジャーナルの現状分析と評価、②委員各社の電子化に対する考え方と実施例、③会員各社が電子化する場合の方法と負荷、の3点でした。会員各社における今後の対応については、各社にてさらに分析し判断して行くこととなりますが、その際に必要となる情報は提供できたように思います。

その後、書籍配信が業界全体の大きなテーマとして注目を集めることになってきたことから、当委員会も電子ジャーナルだけでなく、より広く電子出版全般について論議することとなり、2009年6月に名称も「電子出版委員会」と改めました。

こうして発足から丸5年が経過し、この間に前述のメンバーのうち福田淳が高山一平（医歯薬出版）へ、さらに加藤申命（同）へと交代し、長山泰男が退任しました。また、合計37回もの会合を行っており、その中には国立国会図書館本館、同関西館、大学付属図書館（2館）への訪問と意見交換会実施も含まれます。検討したテーマとしては、最新の技術動向や各出版社の対応に加えて、①CrossRefとの契約、②機関リポジトリの分析と対応、③国会図書館によるジャパンプックサーチ構想、④協同配信システムの検討、⑤事務局のITインフラの整備、などがありました。活動成果として特筆すべきはCrossRefとの契約です。CrossRefは引用論文のリンクに欠かせない仕組みですが、利用には多額の会費や英語での書誌情報の提供が必要です。この契約締結によってそうしたハードルもなく、必要なリンクが廉価で利用可能となりました。また、機関リポジトリについては推進しているNII（国立情報学研究所）との話合いで、和雑誌は洋雑誌とはまったく事情が違うため、本来リポジトリの対象とすべきではないことを理解していただき、それ以降各機関からの要請が沈静化しています。

そして現在取り組んでいるのが、会員社向けの新たなセミナーの実施です。これまでの検討成果を踏まえて、会員社が電子出版を考えるうえで指標となるようなセミナーを検討中です。

日本語の「出版」という言葉には、紙媒体を前提とする「版」という言葉が含まれるためか、「出版は紙であるもの」、との概念がことさら強い気がします。しかし出版を英語で言えば「Publish」であり、Public、即ち公に伝えることが出版で、そこに紙という手段の制約はありません。これからも媒体や手段にとらわれず、われわれが収集し整理した情報を伝えるのに最適な方法を模索していきたいと考えております。

## テントで、書籍展示を



金芳堂

顧問 柴田勝祐

4年ごとに開催される日本医学会総会における医学書展示は、当協会の重要な事業の一つである。この書籍展示を日本医書出版協会が主催して医学書専門書店様と協同で行うようになったのは、東京で開催された第20回日本医学会総会（昭和54年）からで、その会場は、晴海でした。初めてのことで、準備から搬入、そして会期中にもいろいろとご苦労があったと聞いていました。

さて、第23回日本医学会総会は1991（平成3）年4月5～7日（書籍展示は、1～7日）、国立京都国際会館で開催されています。その準備期間における交渉等を担当するという意味で、私は、日本医書出版協会の理事に1988（昭和63）年8月1日付けで、選任されています。当時の理事は、現在のように委員会制になっていなくて、常任理事が4名で、他の理事は無任所だったように記憶しています。

当時の私は、展示委員長の主な仕事は、会場と展示料を決めることだけで、後は販売委員およびPR委員にお任せするものと、まったく軽い気持ちで委員長を引き受けたように思います。総会展示委員長の吉田修先生（当時、京都大学泌尿器科教授）と（展示）業者の代表者に挨拶を済ませただけでのんびりと構えていました。ところが、いざ動き出してくると、いろいろな要望が、理事会で提示され、のんびりムードがふっ飛んだことを思い出します。

「展示会場は、必ず総会のメイン会場と隣接していること、広さは300坪はほしい」、さらに展示料についても4年ごとに少しずつ上昇していたため「前回と同額で」と吉田先生にお願いしたことを記憶しています。吉田先生は、医療機器や製薬の展示以上に書籍展示の重要性を理解しておられましたので、業者にもその旨伝えていただきました。

その結果、「メイン会場の駐車場にテントを設置しますので、そこで書籍展示は行ってください」という案が業者から出されました。初めての経験で、よくわからなかったこともあり、どうなることかと思いましたが、とにかく理事会でも同意を得て、会場だけは決定しました。

これで一段落したと思っていたところ、展示実行委員のひとりから「柴田さん、準備が遅れています」という電話をいただいたのですが、何が遅れているのか理解できなくて、トンチンカンな返事をしたことだろうと思います。

ちなみに展示実行委員会を正式に組織したのは、当時の協会の記録をみますと、総会の始まる8ヵ月前の1990(平成2)年の8月1日付けで、発足しています。その委員も業界内の事情がよくわからなかったので、経験者をお願いしますということで、他の理事に決めていただいたと思います。販売委員と兼任で、浦澤保雄(南江堂)さん、内田栄一(日本医事新報社)さん、藤実彰一(診断と治療社)さん、PR委員と兼任で、相馬三喜男(南江堂)さん、杉本隆之(篠原出版)さん、そして私の補佐役として中島繁男(金芳堂)の6名で組織をしました。それからの半年は、今のようにメール、携帯電話もありませんから、書類はワープロ専用機で作成、連絡は、固定電話かFAXという時代です。東京でも京都でも機会を見つけては、頻繁に会合をもったと思います。短い期間ではありますが、準備が円滑に進んだのは、委員のもっておられた経験と、行動力の賜物と思っています。

初期の段階から計画はどんどん変更していくわけですが、会場のレイアウト一つをとっても、当時は手書きだったと思いますが、担当の相馬さんは、ただちに修正をしてくれましたし、私が気付かないような細かい指摘の積み重ねがあったことが成功に結び付いたと思います。

この総会から展示実行委員会が組織されたこと、書籍展示がテントで行われたことも特質すべきことですが、ようやくパソコンが普及し出した時代を反映して、初めて「ニューメディアコーナー」を設けたことです。当時は、数社のブースのみで、質、量ともにまだまだ満足できるものではなかったかも知れませんが、新しい時代の到来を予感させました。

特別展示として、書籍展示以外に魅力ある展示をしてほしいという、吉田先生の要望もあり、「ノーベル医学・生理学賞」受賞者の顔写真、プロフィール、業績の解説パネルの展示をしました。好評で、メモをとる来場者も多く、総会終了後、青梅市にある医学文化館(現在、閉館中)に寄贈しました。これだけの力作ですが、うかつにも誰に執筆を依頼したのかといったことが、思い出せません。多分、医学書院の志田原氏を通して、医学書院の方にご執筆をいただいたのではないかと思います。

搬入日は、冬に逆戻りしたように冷え込んでいました。搬入は、夕方からだったように記憶していますが、トーハン、書店および協会出版社の応援部隊が100名以上はいたでしょう。私は、ただ眺めていただけでした。搬入責任者の指示のもと、手際良く棚に書籍が詰められ、並べられ、予定の時間より早く完了したことを覚えています。並行してPR委員の方々は、棚の表示や案内看板パネル、ノーベル賞展示パネルの校正を担当していました。当時、こういったパネル類は、写(真)植(字)で作成されており、パソコンのようにデータが残っていないため、間違いを発見するたびに写植を打ち直し、看板に切り張りして修正していました。

準備万端整い、初日の朝、わくわくしながら会場入りしたところ、いきなり問題が発生していました。平積みしていた表紙が夜露でぬれていました。原因は、テント内と外の温度差による結露でした。急遽、平台の幅のビニールを手当てして閉店時に覆って帰りましたが、その後、結露はまったく起きませんでした。イベントホールと会場のテントをつな

ぐ通路の床や会場内の床が軋むたびに、補強をしたりしましたが、テントによる不自由も不便も感じませんでした。総会の行われている本館からは、イベントホールを横切ってくるので、人の入りを心配しましたが、順調で、それまでの売上を大幅に更新したという報告を受け、ほっとしたことを覚えています。

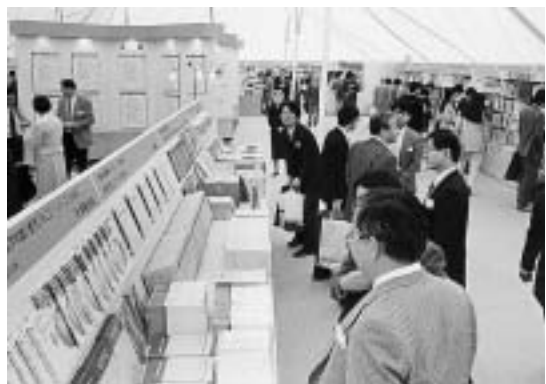
売上が大幅に伸びたのは、この総会から初めてカード決済をしたこと、宅配便を設けたことが一番の要因ではないかというのが、各社の営業担当者や書店の意見でありました。ただ日々の補充が十分ではなく、日が経つにつれ棚の空いているところが目立つようになり、ジャンルが複数に関連する書籍を重複して展示するなどの苦肉の策を弄しましたが、先生方の数名からどういう分類で並べているんだという、お叱りも受けました。それでも書店さんや取次店にとって最も忙しいこの時期に、良い結果で応えられたことが一番嬉しかったことです。ちなみに入場者数は 32,585 人で、当時としては最高でした（第 26 回の福岡が、33,154 人で過去最高）。

今、20 数年前に経験したことを思い起しながら「日本医書出版協会 50 年史」の原稿を書いています。当時のことがつい昨日のことにように目に浮かびます。特に搬入から閉会までの数日間の経験は、まるで体育会系の合宿そのもので、楽しくもあり、若かったんだなということをしみじみと感じています。皆さんのもっているエネルギーの凄さ、仕事もするがよく遊び、よく飲むし、これが仕事をする馬力になるんだということを知りました。私にとってこの数年間の経験は、貴重で、その後の自分の仕事に有形無形に役立っています。

閉会式も終わり、すべての荷物もなくなった会場で、委員長として最後の挨拶を求められたとき、委員や関係者の皆さんの惜しみないご尽力の結果が、展示会の成功に結び付いたことを思い、私は、感慨無量で、言葉がでませんでした。「有難うございました」、というのが精一杯だったことを覚えています。

その後、リタイヤされても、年賀状等のやり取りはしてはしていましたが、理事を初め、委員や書店の関係者の中の数名が鬼籍に入られていることを思うと、20 年という現実の時間は、遠くに流れていったんだと感じずにはおれません。

私は、業界全体の結束を固めるには、このようなイベントを通して、ともに協力することが本来の三位一体ではないかと思っています。



〔日本医事新報 No.3494(1991. 4. 13 号) グラフ P40〕



## 名古屋医学会総会'95

診断と治療社  
代表取締役 藤実 彰一

今から 20 年前、30 代の若輩で協会理事（無任所）を拝命してから、初めての重任が医学会総会展示担当でした。名古屋での開催は 28 年ぶりで、前回の担当は父でしたから（当時は展示販売ではなく受託出版）、何か因縁のようなものを感じたのを思い出します。ちなみに祖父が当社を創業したのは大正 3（1914）年で、第 4 回医学会総会を契機に臨床総合誌を創刊したものです。

'90 年代前半といえばポストバブルで、総会登録人数も伸び悩んでいるところへ、直前の 1 月には阪神・淡路大震災が起きて、そのダメージを心配しました。

医学書展示会場の交渉は困難を極めました。展示料の予算には限りがあるが、会場は学術講演会場内で広い面積を希望し、3 年がかりでお願いを続けました。途中、杉田展示委員長が急逝され、準備・総務・広報の各委員会の先生方や幹事長・幹事の先生方とも話し合いを重ねました。初めに出た基本方針は、すべての展示を金城埠頭の国際展示場に集めるというものでした。これを覆していただき、医学書展示だけは学術講演の行われる、白鳥の国際会議場とすることに正式決定したのは、総会直前の 1 月でした。過去の医学書展示の歴史から学んだのは、たくさん来場していただく意味での会場立地の重要性です。ぎりぎりまで待った甲斐がありました。

交渉の中で先生方から出た意見の一つは、冊子体だけでなく電子メディアの展示も考えてほしいということでした。そこで「見て、触れて、体験するニューメディア」というテーマ展示を企画しました。協会初の電子出版である、医学会総会記念「医療用ソフトデモ集 CD-ROM」を 3,000 本作り、お買い上げ客に配布したところ、すべてなくなり、この展示も大賑わいでした。

もう一つ出て来たのは「名古屋総会広報」の協会会員社発行雑誌への無料掲載です。初の試みでしたが、合計 85 誌・延べ 392 頁の協力をいただきました。こうした積み重ねが交渉に活きたと思います。

割り当てていただいた展示スペースは 260 坪と、前回京都よりさらに広いのですが、ロビーでした。吹き抜けで背の高い植栽があって動かせず、柱が多く、エスカレーターもあり、有効面積を減らしていました。ところが一見ハンディキャップと思われる箇所を、む

しろセールスポイントとする設計図ができました。ロビー備え付けの椅子は木陰など各所に配置したところ、座って読書・吟味される先生方も多く好評でした。正面から、横から、上からエスカレーターで、エレベーターで入って来られるオープンスペースの1階ロビーというのも、来場者の多さにつながったと思います。

開幕前夜の搬入は大変スムーズでした。夕方から、床の着生・内装工事、丸善より棚150本の搬入・組み立て、日販より和洋書籍・雑誌3万冊の搬入、書店・出版社合わせて100名以上が棚分類別にチームに分かれて棚差し、ニューメディア展示の設営といった作業が、合計200名近い方々により、テキパキとシステマティックに進められ、日付が変わる前に完了しました。

開幕に際しては「人事を尽くして天命を待つ」と申し上げました。できる限りの準備はできたという充足感と、良好な立地などの明るい材料による期待感、そしてポストバブルや大震災ダメージについての不安感が、ないまぜになっていました。

幸い、始まってみると、登録人数も終盤でかなり挽回していただき、朝早くから夕方遅くまで連日、大盛況でした。山陽新幹線も会期中に繰上げ開通し、売上も当時の最高を記録しました。サリンの噂もありましたが、どこかへ吹き飛んでしまいました。桜も満開となり、とても晴れやかな気分でした。

内科学会からの依頼により、内科学会の初日から展示販売を医学会総会展示と同じ棚・会場で、都合6日間連続で開催したのも、初めての試みでした。前半3日間の内科学会の売上が、品揃えと展示方法により従前とは破格のものとなったのには驚きました。実はこんなに売れるものとは思わず、展示料は勘弁してもらっていました。

会場には、医学会総会の飯島会頭・斉藤準備委員長・高橋展示委員長・松尾展示担当幹事、内科学会の下方準備委員長他、多数の先生方が来場され、医書界のまとまりの良さを賞賛され、盛況を喜んで下さいました。浅井広報委員長・山木広報担当幹事も来場され、「名古屋総会広報」の雑誌掲載について何度も御礼の言葉を述べられました。さらに飯島会頭から後日、感謝状と記念品まで頂戴しました。これも異例なことです。

今、振り返っても、自社では得難い貴重な経験をさせていただき、大変勉強になりました。日本医書専門店連合会と丸善名古屋支店の方々による書店連合、日販名古屋支店・医書センター・書籍部の方々、医学会総会展示委員・ニューメディア委員・洋書幹事3社の方々、会員社の人員応援・広報協力と、多くの方々が共通の目標に向って一丸となりました。こうした方々に支えられてこそ、委員長の任務を全うできたと思います。



〔日本医事新報 No.3703(1995. 4. 15号) グラフ P40〕

## 第 25 回日本医学会総会を振り返って



第 25 回 医学会総会展示  
委員長 本郷允彦（南江堂）

第 25 回日本医学会総会（100 年記念式典）は、1999 年 4 月 2 日に、天皇皇后両陛下のご臨席を賜り、「社会とともにあゆむ医学—開かれた医療の世紀へ—」をメインテーマに、今世紀最後の医学会総会として東京国際フォーラムで開会され、博覧会会場である東京ビッグサイトを含めた 2 会場を中心に 4 日まで開催されました。

JMPA 浅井理事長（文光堂）の下、私が展示委員長に推薦されたのが 1995 年、私が高業界から南江堂に転出したときでした。内田副委員長（日本医事新報社）はじめ多数の委員の協力もあり無事に役目を果たすことができました。今では東京国際フォーラムといえば、多くの方が一度は足を運んだことがあると思いますが、その当時は建設途上、完成したのが 1998 年秋のことでした。97 年末から具体的な打ち合わせが始まり、フォーラムや事務局のある東京大学医学部また日本医師会に何度となく足を運んだのも懐かしい思いとなりました。

特に書籍展示では、このとき初めて一般市民参加の「医学展示・博覧会」としたこともあり、博覧会会場（ビッグサイト）では一般書を含めた「健康医学書」の展示即売を行いました（会期 3 月 30 日～4 月 8 日）。この展示には JMPA 会員社だけでなく、会員外の出版社に協力を依頼、10,000 点の書籍展示を行うことができ盛況のうちに会期を終了することができました。

また学術展示会場（フォーラム）では、地下会場約 400 坪のスペースに専門医学書、和書籍 5,500 点、洋書籍 3,000 点、ニューメディア商品 50 点以上を展示し、また本総会の展示から出版社別のワゴンセール台も設けました（会期 4 月 2 日～4 月 4 日）。

開会前日には、物流を担当していただいたトーハンの皆様の協力で、無事に搬入・展示が完了、会場は専門医学書で埋め尽くされました。また今回は安田生命相互会社（現明治安田生命）のご協力をいただき「Medical CD-ROM World」と題した医療ソフトデモ集を記念出版し、ご来場の先生方に無料で配布いたしました。開会前には、総会事務局のご好意により、地下の展示会場に「医学書籍展示会場」のバルーンを無償提供いただき、華やかな会場にできたのは私にとって思い出に残る総会となりました。

最後になりますが、日本医学会総会前後に内科学会、循環器学会等の 12 の分科会が近

接の各地で開催されましたが、すべて総会と同条件で展示販売できたことは、日本医書専門店連合会の協力によるものであり、連合会会員の皆様に感謝いたします。

[第 25 回日本医学会総会 役員]

日本医学会会長 森 亘先生

医学会総会会長 高久史磨先生、副会長 矢崎義雄先生、展示委員長 開原成允先生

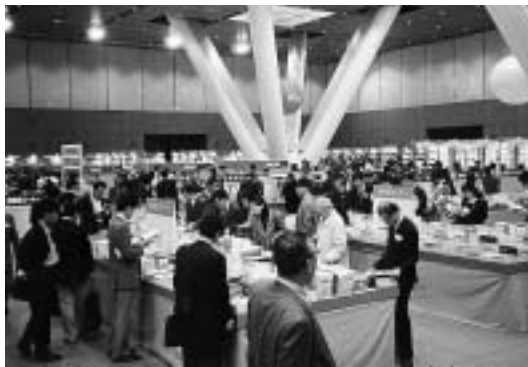
[第 25 回日本医学会総会 日本医書出版協会 展示委員会 委員 (以下敬称略)]

委員長 本郷允彦 (南江堂)、副委員長 内田栄一 (日本医事新報社)

委員 豊田敏行 (医学書院)、西澤政幸 (診断と治療社)、石川省二 (金原出版)  
金原俊 (医学書院)、清水豊 (南江堂)、横田信幸 (南江堂)、相馬三喜男  
(南江堂)、生澤泰雄 (医歯薬出版)

販売協力 日本医書専門店連合会、名誉会長 関明吉 (明倫堂)、会長 青鹿亮二 (文  
進堂)、副会長 家田通久、河野正彦

物流協力 株式会社トーハン、最高責任者 安井一男、責任者 阿部好美



〔日本医事新報 No.3911(1999. 4. 10 号) グラフ P38〕

## 初めて海を越えた医学会総会 —福岡 2003 年



医学書院  
小林 謙作

遡ること 100 年以上も前の東京での第 1 回の医学会総会以来、東京、大阪、京都、名古屋以外の都市で開催されたことは一度もなく、私が展示委員長を務めさせていただいた第 26 回にして初めて海を超えた福岡で行われました。2003 年は九大医学部創立 100 周年に当る年とのことで、奇しくも 21 世紀最初の記念すべき総会が九州の地で開かれたのです。

副委員長の西澤政幸さんをはじめ 12 名からなるわれわれ展示委員会は、展示会場の交渉から会場のレイアウト、商品の運搬、搬入・搬出の体制、商品の補充方法等々、九大会当局ならびに販売実務を担当していただく書店さん、および物流を担っていただく日販さんと何度となく会合をもち、準備を進めてきました。まず何といたっても気にかかるのが展示の会場でした。学術講演の主会場は当時まだ建設中の福岡国際会議場ですが、われわれが要望する 300 坪のスペースが物理的にどうしても無理とのことで、国際会議場と徒歩で 5 分程度隔たったマリンメッセが展示会場となりました。

われわれの展示期間は、総会に先立って同じ会場で行われる内科学会、4 月 1 日からの 3 日間と、4 日から 6 日まで開催されるメインの総会の 6 日間です。併せて、学会当局からの強い要請を受けて、4 月 2 日～8 日の間、一般市民向けの公開展示が行われる福岡ドームで健康医学書の展示販売も行いました。

マリンメッセの展示スペースは会場の 1 階、300 坪で、和書、洋書の書籍・雑誌からニューメディア商品まで含めて約 3 万点、6 万冊の膨大な展示量になります。レイアウトは、和書、洋書、ニューメディアの 3 つのコーナーと、レジ台 2 ヶ所、本の検索などができるインフォメーションデスクといった配置です。

メッセでの搬入当日はわれわれ書籍だけということもあって、3 千数百個にも及ぶ段ボール箱を電動のフォークリフトやハンドリフトを活用して効率よく運び込み、搬入はとも順調にいったのですが、翌日からの販売のほうは思うようにはままなりませんでした。

今回、メッセ会場での売上目標は、遠隔地で行われること、また展示会場が前回の東京、その前の名古屋と違い学術講演の会場ではないというハンディもあるので、前回国際フォーラムの時の 8 割程度と設定したのですが、最終的には 7 割程度の約 5,200 万円でした。展示初日からして会場内は、ドクターの姿はまばらでわれわれ版元と書店さんたちが

着込んでいる黄色のジャンパーだけがやけに目立ち、初日の売上は400万にも達しない有り様でした。2日目と併せても1,100万円という数字です。3日目は学術展示の初日で医療機器などの展示もフルオープンしたということもあって、この日は初めて1,000万円の大台を越えました。翌日の総会初日に大いに期待をかけたのですが、あいにく朝から雨と天候にも恵まれず、見込んだ数字の半分にも達しないという惨憺たる成績でした。目標を片手の5,000万に急遽下方修正し、集客作戦に工夫をこらしました。

展示事務局に掛け合い、メッセで書籍展示が行われている旨の立て看を自前で作って国際会議場の目立つ通路に置かしてもらったり、展示案内のスクリーンのテロップに書籍展示という文字も入れて流してもらったりしました。また、書籍展示のビラをパソコンで作成して1万枚くらいコピーし、国際会議場1階のメインロビー近くで徹底してビラ撒きを行いました。その甲斐あってか、残りの2日間で修正した数字を何とか達成できました。

一方、健康医学書フェアと銘打って展示を行った福岡ドームでは、看護、介護、福祉、リハビリ、薬剤、栄養などのコメディカル書を中心に展示販売しました。初日は平日ということもあって来場者はまばらでしたが、3日目は日野原重明先生のサイン会があり、大盛況でした。130人ほどでしょうか、途切れることもなく手に手に日野原先生の本を持った人の列ができ、1時間びっしり笑顔を絶やさず、一人一人と握手しながらサインされる先生のエネルギーには改めて恐れ入りました、という感じでした。

今回の総会は、販売成績からみますと必ずしも満足できる総会ではなかったのですが、期間中、これといったトラブルや事故もなく何とか無事に終えることができました。これも偏に、販売から毎日のレジの集計など諸々の実務を担当していただいた神陵文庫さん、宇部井上書店さん、丸善福岡ビル店さんを初めとする幹事書店さん、そして搬入、搬出は言うに及ばず期間中も応援に駆けつけてくれた専門店連合会と版元の皆さん、ならびに遠く九州の地まで流通を担っていただいた日販さんのご支援、ご協力の賜物と存じております。この誌上を借り、改めて厚く御礼申し上げます。



(日本医事新報 No.4120 (2003. 4. 12号) グラフ P38)

## 第 27 回日本医学会総会 書籍展示を担当して



日本医事新報社  
梅澤俊彦

第 27 回日本医学会総会は、2007 年 4 月 5 日から 4 月 8 日の期間で「生命と医療の原点—いのち・ひと・夢」をテーマに開催されました。開催会場は大阪市内の大阪国際会議場（グランキューブ大阪）で会頭に岸本忠三大阪大学前学長が、当協会書籍展示に関係する役員である準備委員長には堀 正二大阪大学大学院医学系研究科教授が就任され盛大に運営されました。

当協会書籍展示は、先立って行われた第 104 回日本内科学会総会の書籍展示から連続して、4 月 3 日から 4 月 8 日までの 6 日間行われました。商品の出展数は書籍が 6565 点、雑誌が 136 点を数え、その他マルチメディア商品のブース展示や各出展社の自社ブースでの展示が行われました。

幹事書店は会長として神陵文庫 谷村俊樹社長、副会長として奈良栗田書店 栗田秀樹社長に就任していただきその他中国・四国地方の書店を中心に計 13 社にて構成されました。

私が担当させていただいた医学会総会展示委員会は 2003 年 10 月に前回の福岡開催の委員会から引き継がれる形で発足しました。当協会の医学会総会での書籍展示は医学書業界の一大イベントでありますので、当時私が委員長をお引き受けするのにあたり、自ら一抹の不安を覚えた記憶があります。また委員長拜命後は医学書業界でお会いしてお話する方々はもれなく医学会総会書籍展示の話題に触れられるので日を増すごとに緊張感が湧いてきた思い出があります。それでも各委員、諸先輩方、各会員社の方々のご指導とご協力の元、何とか 4 年間乗り切れたと自負しております。

まず、医学会総会展示委員会として目標に掲げるのが前回は上回る成績かと思われま

す。その目標に向かって 4 年間邁進するのですが、その時の開催地や学会自体の運営方針の違いにより、やはり簡単に物事は進みません。

当時まず躓いたのが、委員会の活動開始時期でした。前回福岡開催時の申し送りから、良好な展示場所を抑えるために、早期に活動を開始しました。しかしながら地理的条件による集客の違いからか、当時の医学会総会事務局の運営が福岡開催時と比べて非常に遅いペースで行われました。そのような状況下でも、なんとか日本内科学会事務局との折衝を

同時に進め比較的早い時期に展示場所を決定できたと思っております。

委員会では早速大阪まで会場下見に出向き、書籍展示会場のレイアウト図を作成し、私は当協会の例会にて会場の見取り図を配布し展示場所決定の報告をさせていただきました。

しかしながら数週間後にはすべてを白紙撤回せざるを得なくなりました。これが第二の躓きです。日本内科学会の方針の変更で日程は連続するものの医学会総会とは運営を完全に異にするとのことでした。医学会総会参加による日本内科学会認定医の更新単位の取得もできなくなるとのことで、後半の集客にも暗雲が立ち込めてきました。前回までの医学会総会と比べ変更事項が多かったこともあるのでしょうかが私自身、少し委員会活動のペースを急ぎ過ぎたのかとも反省いたしました。

しかしそれでも医学会総会の開催時期はやってきます。また一から折衝を行い、副委員長（南江堂 清水 豊氏）を始めとして各委員の奮闘もあり、結果当初の展示場所よりも好条件な場所を得ることができました。

トラブル、ハプニング続きで委員会発足時に予定していた成績は得られませんでした。各委員の惜しめない努力と医学書業界の皆様のご助力のお陰をもちまして、当時の条件下としましては、まずまずの成功を収めることができたのではないかと胸を撫で下ろしております。



〔日本医事新報 No.4329 グラフ欄 P41〕



## 第 28 回日本医学会展示にむけて



第 28 回 医学会総会展示  
委員長 小立 鉦彦 (南江堂)

2011 年開催の第 28 回日本医学会総会（東京）は、これまでと違い内科学会との続開日程となりませんでした。第 28 回の展示委員会が組織されず動き始めにそのことが確認され、委員会のモチベーションはやや下がりました。総会が内科学会と続開でない場合、来場者減が懸念されるからです。しかしながら、医学界にとって医学会総会の開催意義は崇高です。日本医書出版協会第 28 回医学会総会展示委員会として、やるからにはこれまで以上の展示様態に腐心し、これまで以上の成果を目指すことを委員全員で確認し活動を始めました。

そしてもう 1 つ、いうまでもない今回の大きな特色はこの日本医書出版協会創立 50 年記念事業との合体です。医学会総会開催年が協会創立 50 周年と重なったことは因縁を感じざるを得ず、当協会としてはおめでたさも倍増です。その意味でも、われわれ展示委員会としては毎回以上に緊張し精力を傾注しなくてはなりません。

医学会総会展示委員会組織の特徴として、副委員長以下委員の皆さんは歴任の方が多いのに比して、委員長は 1 回ごとに入れ替わります。マイナス志向にオーバーに言えば、委員長は“お飾り”的存在なのかなとも考えてしまいますが、やはり委員会をまとめて前進させるという重要なお役目です。いわば初心者自分を経験豊富な委員たちに助けをもらいながら学習し、リーダーシップを発揮しなければ、4 年に 1 回の医学の祭典を立派に司ることは到底不可能です。

この拙文をご高読いただく頃は本総会がいよいよ間近に迫っているか、もう終了後かも知れませんが、現在、委員長を助けてくれる頼もしいメンバーは、副委員長に石川省二（敬称略、以下同）、以下上原達史、兎島 誠、三澤 岳、小川文一、西村淳一、井上和夫、壹岐一也という侍たちです。転職を機に委員を勇退するまで小長谷雅哉さんにも助けていただきました。もちろん協会事務局長の田村由加利さんには的確で強力な支援をいただいています。このスタッフで、熱く真剣に、ときには愉快にときには意見衝突しながら、「展示丸」は航海を続けています。

今回は、流通は日販さん、販売は日本医書専門店連合会さんです。当初 3 者の足並みがやや揃わなかったこともありましたが、開催も迫って精力的に順調に協力し合っており、

展示販売の成功に光明がみえ始め、自然、ヤル気も増進しています。前述の 50 周年記念事業実行委員会とは、田村事務局長を仲介に必要に応じて委員長同士で連絡を連携し合い、展示委員が記念事業実行委員を兼ねたり、という協力体制を組んでいます。

展示委員会委員の皆さん真面目で熱心ですが、小長谷さんが辞められるときは送別会、三澤さんが昇任異動の際にはお祝い会、そして日販さん、専門店連合会さんとの懇親会をもつなど、骨休めをしながら、というか骨休めも熱心に(!?)、活動しています。なかなかどうして、私が経験した他の委員会に負けず劣らずカラオケ達者も多いと知りました。その中でも委員長は……、この先はご想像にお任せします。

現役委員長としてボケている場合ではないですね。本委員会も新組織発足からあっという間に 3 年経ち、協会 50 周年記念併催でも意義深い第 28 回総会開催まで 4 カ月となりました。委員会開催機会も徐々に増し、この段階では、流通を担う日販さんとも毎回合同会議というかたちをとりながら、進行しています。当然ながら緊張感も増し、気のせいも皆の目つきも鋭くなっていくように感じ、委員長として、その責任の重さがジワジワとしかかってきます。いよいよホームストレッチ、人馬一体となって栄光のゴールを目指します。

## 電子化特別委員会の活動方針



一般社団法人 日本医書出版協会  
電子化特別委員会委員長 金原 優

日本医書出版協会が2009年11月に一般社団法人日本医書出版協会として組織を法人化したことに加え、近年のインターネットとコンピュータの発展に伴い、協会としての情報提供、情報発信の役割と必要性はますます高まってきました。協会はこれまでもウェブサイトを開設し、協会会員社が発行する書籍・雑誌の書誌データ、認定医学書専門店と認定医学書販売店ならびに協会会員社の情報を掲載し、読者、著者の先生方に広くご利用いただけてきました。日本医書出版協会はこのたび創立50周年を迎えるにあたり、協会ウェブサイトの拡充を含め、協会の情報発信の電子化をさらに推進することを目的として、協会の一般社団法人化と同時に電子化特別委員会を設置しました。この委員会は協会の各委員会それぞれと密接に関連し、協会活動を電子的にまとめる役割もあるため、代表理事が委員長を務めることになりました。

この特別委員会の目的は以下の通りです。

協会ウェブサイトの機能拡充

医学書総目録の電子化

協会事務局と情報交換の電子化

協会ウェブサイトは大きく分けて①読者向け、②著者・一般向け、③書店・流通向け、④会員社向け、の4つの部分で構成することを基本として検討中です。このうち③書店・流通向けと④会員社向けへのアクセスにはそれぞれ認証が必要となります。

①の読者向けサイトでは、会員社が発行する出版物の検索、新刊案内、雑誌特集案内、協会からのお知らせ等を掲載します。

②の著者・一般向けサイトでは協会案内、協会概要、組織・役員紹介、委員会活動紹介、社会へのメッセージ、各種ディスクロージャー資料、協会からのお知らせ、会員社名簿および会員社へのリンク、認定書店一覧および各書店へのリンク等を掲載します。

③の書店・流通向けサイトでは認定店通信、販売マニュアル、書誌データベースとダウンロード機能、表紙ダウンロード機能等を含め、書店営業に役立つ各種の販売データを提供します。

④の会員社向けサイトでは事務局からの連絡事項、理事会・各委員会資料等を含め、会員社が利用できるさまざまな情報を提供します。

この協会ウェブサイト機能の拡充によって読者・著者のみならず、広く社会に一般社団法人としての公益性をPRし、協会活動への理解と協力を仰ぐことが可能になると考えています。また会員社、認定書店向けはそれぞれアクセスには認証が必要ですが、会員社への事務連絡の機能向上と迅速性向上、網羅性の確保が可能となり、書店への情報提供によって各書店の販売力向上と各書店システムの電子化推進に役立てることを目的とします。いずれもまだ検討中の段階ですが、部分的に創立50周年誌の発行時点までにスタートさせたいと考えております。

協会は現在「医学書総目録」を毎年発行し、書店、読者の方々に広くご利用いただいております。この医学書総目録は発行部数約4万部ですが、この目録を電子化し、検索機能を拡充したうえで、より多くの読者の方々に利用していただくことを検討中です。出版物のコンテンツ検索には、一般的には全文検索が必要ですが、そのことを含め、どのような検索機能をもたせ、検索結果をどのように表示させ、さらにその結果を出版物購入にどのように結びつけるかについてはさらに検討が必要であり、まだ成案を得ておりません。出版物コンテンツの検索には類義語の統一、階層語、外字、旧字、異体字等の処理が必要であり、また全文検索へ向けたコンテンツデータ提供の可能性も検討しなければなりません。システム開発にも相当の時間と費用が必要であり、2011年末を目処に検討を継続中です。

協会ウェブサイトの機能拡充と医学書総目録の電子化に伴い、協会事務局の電子化インフラ整備も重要であり、当委員会ではこの問題も含めて検討中です。いずれも検討には相当の時間が必要であり、種々の影響を考慮しながら慎重に考えていきますが、電子化は時代の趨勢であり、今後精力的に取り組んでいかなければなりません。

## 第5章

# 日本医学会総会開催の 協力と展示販売

---



## 日本医学会総会への協力 — 学術講演集の編纂と展示販売



「50年史」編纂委員会副委員長 内田栄一

第3章の「座談会」の中で藤實廣由氏が「日本医学会との関係が非常に深まってきたことです。4年ごとに行われる日本医学会総会は盛大に行われまして、その際にここにあります日本医学会総会の学術講演集を必ず日本医学会から出版されました。その制作を協会で行うようになりました。」と述べています。また、「医学会から委嘱を受けましてね。(中略)何千ページという膨大なものを協会で作りました。」とも述べている。

そこで、日本医事新報社の図書室で調べたところ第14回日本医学会総会特別講演集、第15回日本医学会総会学術集会記録、第16回・第17回日本医学会総会学術講演集（以下「講演集」）が保管されていた（図1, 2）。この他に各回（古いのは第3回、新しいのは第20回）の日本医学会総会誌というものも保管されていた。

この講演集の奥付を資料として図3～6までを章末に掲載するが、第14回（昭和30年）の講演集では「医書出版協会」発行として17社の出版社名が記されている。講演集は全5巻で各巻1,500円で発売されている。第15回（昭和34年）の講演集では「第15回日本医学会総会学術集会記録刊行会」の名で発行され18社の出版社名が記されており、全5巻で各巻2,500円で発売されている。「本巻は上記の出版社が刊行会を組織し、第15回日本医学会総会の委嘱を受けて刊行したものである」と記されているので、この講演集を刊行するために出版社に参加依頼をし、賛同した出版社で組織したものと思われる。故に、医学書院の名がなく、共立出版の名が記されているのだろう。トップに文光堂の名が記されているのは、文光堂が委嘱を受け編集責任者を出されたからだと思われる。

第16回（昭和38年）の講演集では「日本医書出版協会」の名で発行され19社の出版社名が記されている。「日本医書出版協会」は昭和36年に設立されているのでこの19社の出版社は設立に賛同して参加した出版社と同じである。ここでも文光堂がトップにきているということは、日本医書出版協会が初めて日本医学会総会より委嘱を受け、協会として編集責任者に文光堂の浅井忠晴氏に就任依頼をしたからであろう。この講演集も全5巻で各巻6,000円で発売されている。当時としては大変な高額書籍である。

第17回（昭和42年）の講演集では「日本医書出版協会」参加出版社に世界保健通信社が加わって20社になっている。この講演集も全5巻の発行で各巻8,000円である。

残念ながら「日本医書出版協会」が日本医学会総会より委嘱を受け講演集を発行したのはこの第 17 回日本医学会総会が最後となった。

第 17 回日本医学会総会からは医学書展示販売も委嘱され、丸善に実務をお願いした。当時はまだ医学書は洋書が和書よりよく売れており、丸善に依頼した。総会では 60～65% が洋書の売上だった。医学会総会での医学書展示販売を丸善に依頼したのは第 19 回（昭和 50 年）までである。徐々に和書の売上が伸びてきたので、第 20 回（昭和 54 年）からは医学書専門書店に委嘱をした。協会側も医学会総会担当理事を選出し医学会総会事務局と展示料の交渉をした。協会側の実務担当は販売委員会と PR 委員会から選出した。

第 23 回（平成 3 年）からは実務量が増大したため正式に医学会総会展示委員会が発足した。その後、医学会総会展示委員会は第 28 回（平成 23 年）の現在まで引き継がれ活動をしてきている。

ここまで日本医学会総会との関係を歴史的に振り返って記述してきた。日本医書出版協会が設立される前から医学書出版社は何らかの関わりを日本医学会ともってきた。それはわれわれ医学書専門出版社が刊行する出版物の監修者・編者・執筆者の医師の先生方は必ずといっていいほど日本医学会に所属する学会の会員であるからである。その時の医学会総会の会頭先生か学術担当の先生から直接依頼を受けたと思われる。

第 14 回（昭和 30 年）の時は未だ日本医書出版協会の設立気運が高まっていなかったので有志を募って便宜上「医書出版協会」を作ったと推察できる。だが、第 15 回（昭和 34 年）には協会設立の話が持ち上がってきたので「第 15 回日本医学会総会学術集会記録刊行会」の名で刊行したのだろう。昭和 36 年 3 月に「日本医書出版協会」が設立されてからも、藤實氏が述べているように日本医学会総会との関係は相当深いものになってきている。

協会はその時々にもいろいろな問題が生じたりして、いろいろな活動をしてきているが昔も現在も変わらずに協会活動の中では医学会総会との関係は大きな柱の 1 つである。

姿形こそ講演録の刊行から書籍の展示販売と変化してきても、関わり方の内容には変化はないのである。

今後も「日本医書出版協会」が活動していく中で、日本医学会総会との関わりは今後も深く続くと思われる。



第 22 回医学会総会（昭和 62 年）  
〔日本医事新報 No.3285(1987. 4. 11 号) グラフ P41〕





図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6



## 第6章

# 歴代の理事長







---



# 歴代の理事長

## 日本医書出版協会のあゆみ (1961年～2010年)

	年(西暦)	年(年号)	期	代表世話人	医学会総会(会頭)
日本医書出版協会	1961年	昭和36年		金原作輔 (金原出版)	第16回(今村荒男) 大阪
	1962年	昭和37年		金原作輔 (金原出版)	
	1963年	昭和38年		金原作輔 (金原出版)	
	1964年	昭和39年		小立正彦 (南江堂)	第17回(勝沼精蔵) 名古屋
	1965年	昭和40年		小立正彦 (南江堂)	
	1966年	昭和41年		小立正彦 (南江堂)	
	1967年	昭和42年		浅井忠晴 (文光堂)	第17回(勝沼精蔵) 名古屋
	1968年	昭和43年		浅井忠晴 (文光堂)	
	1969年	昭和44年		鈴木公雄 (南山堂)	第18回(沖中重雄) 東京
	1970年	昭和45年		鈴木公雄 (南山堂)	
	1971年	昭和46年		藤實廣由 (診断と治療社)	第18回(沖中重雄) 東京
	1972年	昭和47年		藤實廣由 (診断と治療社)	
	1973年	昭和48年		今田喬士 (医歯薬出版)	第19回(平沢 興) 京都
	1974年	昭和49年		今田喬士 (医歯薬出版)	
日本医書目録刊行会				代表世話人[理事長]	
	1975年11月～1976年10月	昭和50年11月～昭和51年10月	第1期	今田喬士 (医歯薬出版)	第19回(平沢 興) 京都
	1976年11月～1977年8月	昭和51年11月～昭和52年8月	第2期	今井 彰 (克誠堂出版)	
	1977年9月～1978年8月	昭和52年9月～昭和53年8月	第3期	今井 彰 (克誠堂出版)	
1978年9月～1979年8月	昭和53年9月～昭和54年8月	第4期	今井 彰 (克誠堂出版)		

		理事長				
日本医書目録刊行会	1979年9月～1980年8月	昭和54年9月～昭和55年8月	第5期	長谷川泉 (医学書院)		第20回(樋口一成) 東京
	1980年9月～1981年8月	昭和55年9月～昭和56年8月	第6期	長谷川泉 (医学書院)		
	1981年9月～1982年8月	昭和56年9月～昭和57年8月	第7期	青木三千雄 (中外医学社)		
	1982年9月～1983年7月	昭和57年9月～昭和58年7月	第8期	青木三千雄 (中外医学社)		
	1983年11月	昭和58年11月	(第9期)	青木三千雄 (中外医学社)		第21回(吉田常雄) 大阪
	1984年7月	昭和59年7月	(第9期)	小立武彦 (南江堂)		
日本医書出版協会 (任)	1985年3月～1985年11月	昭和60年3月～昭和60年11月	(第10期)	小立武彦 (南江堂)		
	1985年12月～1986年9月	昭和60年12月～昭和61年9月	(第11期)	小立武彦 (南江堂)		
	1986年10月～1987年7月	昭和61年10月～昭和62年7月	(第12期)	小立武彦 (南江堂)		第22回(中尾喜久) 東京
	1987年8月～1988年7月	昭和62年8月～昭和63年7月	第13期	三浦裕士 (医歯薬出版)		
	1988年8月～1989年7月	昭和63年8月～平成元年7月	第14期	三浦裕士 (医歯薬出版)		
	1989年8月～1990年7月	平成元年8月～平成2年7月	第15期	三浦裕士 (医歯薬出版)		
	1990年8月～1991年7月	平成2年8月～平成3年7月	第16期	三浦裕士 (医歯薬出版)		第23回(岡本道雄) 京都
	1991年8月～1992年7月	平成3年8月～平成4年7月	第17期	三浦裕士 (医歯薬出版)		
	1992年8月～1993年7月	平成4年8月～平成5年7月	第18期	三浦裕士 (医歯薬出版)		
	1993年8月～1994年7月	平成5年8月～平成6年7月	第19期	三浦裕士 (医歯薬出版)		
	1994年8月～1995年7月	平成6年8月～平成7年7月	第20期	三浦裕士 (医歯薬出版)		第24回(飯島宗一) 名古屋
	1995年8月～1996年7月	平成7年8月～平成8年7月	第21期	浅井宏祐 (文光堂)		
	1996年8月～1997年7月	平成8年8月～平成9年7月	第22期	浅井宏祐 (文光堂)		
	1997年8月～1998年7月	平成9年8月～平成10年7月	第23期	浅井宏祐 (文光堂)		
	1998年8月～1999年7月	平成10年8月～平成11年7月	第24期	浅井宏祐 (文光堂)		第25回(高久史磨) 東京
	1999年8月～2000年7月	平成11年8月～平成12年7月	第25期	本郷允彦 (南江堂)		
	2000年8月～2001年7月	平成12年8月～平成13年7月	第26期	本郷允彦 (南江堂)		
	2001年8月～2002年7月	平成13年8月～平成14年7月	第27期	本郷允彦 (南江堂)		
2002年8月～2003年7月	平成14年8月～平成15年7月	第28期	本郷允彦 (南江堂)		第26回(杉岡洋一) 福岡	
2003年8月～2004年7月	平成15年8月～平成16年7月	第29期	本郷允彦 (南江堂)			
2004年8月～2005年7月	平成16年8月～平成17年7月	第30期	本郷允彦 (南江堂)			

		理事長				
(任)	2005年8月～2006年7月	平成17年8月～平成18年7月	第31期	金原 優 (医学書院)		第27回(岸本忠三) 大阪
	2006年8月～2007年7月	平成18年8月～平成19年7月	第32期	金原 優 (医学書院)		
	2007年8月～2008年7月	平成19年8月～平成20年7月	第33期	金原 優 (医学書院)		
	2008年8月～2009年7月	平成20年8月～平成21年7月	第34期	金原 優 (医学書院)		
	2009年8月～2009年10月	平成21年8月～平成21年10月	第35期	金原 優 (医学書院)		
(社)				代表理事		
	2009年11月～2010年7月	平成21年11月～平成22年7月	第1期	金原 優 (医学書院)		





## 第7章

# 会員社一覽

---



JMPA 会員社一覧 (50 音順)

医学書院	☎ 03-3817-5657 FAX : 03-3815-7804 <a href="http://www.igaku-shoin.co.jp">http://www.igaku-shoin.co.jp</a>
医学中央雑誌刊行会	☎ 03-3334-7625 FAX : 03-3332-1394 <a href="http://www.jamas.or.jp">http://www.jamas.or.jp</a>
医学図書出版	☎ 03-3811-8210 FAX : 03-3811-8236 <a href="http://www.igakutosho.co.jp">http://www.igakutosho.co.jp</a>
医歯薬出版	☎ 03-5395-7610 FAX : 03-5395-7611 <a href="http://www.ishiyaku.co.jp">http://www.ishiyaku.co.jp</a>
医薬ジャーナル社	☎ 06-6202-7280 FAX : 06-6202-5295 <a href="http://www.iyaku-j.com">http://www.iyaku-j.com</a>
金原出版	☎ 03-3811-7184 FAX : 03-3813-0288 <a href="http://www.kanehara-shuppan.co.jp">http://www.kanehara-shuppan.co.jp</a>
協同医書出版社	☎ 03-3818-2361 FAX : 03-3818-2368 <a href="http://www.kyodo-isho.co.jp">http://www.kyodo-isho.co.jp</a>
杏林書院	☎ 03-3811-4887 FAX : 03-3811-9148 <a href="http://www.kyorin-shoin.co.jp">http://www.kyorin-shoin.co.jp</a>
金芳堂	☎ 075-751-1111 FAX : 075-751-6858 <a href="http://www.kinpodo-pub.co.jp">http://www.kinpodo-pub.co.jp</a>
克誠堂出版	☎ 03-3811-0995 FAX : 03-3813-1866 <a href="http://www.kokuseido.co.jp">http://www.kokuseido.co.jp</a>
新興医学出版社	☎ 03-3816-2853 FAX : 03-3816-2895 <a href="http://shinkoh-igaku.jp">http://shinkoh-igaku.jp</a>
真興交易医書出版部	☎ 03-3798-3315 FAX : 03-3798-3096 <a href="http://www.sshinko.com">http://www.sshinko.com</a>
診断と治療社	☎ 03-3580-2770 FAX : 03-3580-2776 <a href="http://www.shindan.co.jp">http://www.shindan.co.jp</a>
全日本病院出版会	☎ 03-5689-5989 FAX : 03-5689-8030 <a href="http://www.zenniti.com">http://www.zenniti.com</a>
総合医学社	☎ 03-3219-2920 FAX : 03-3219-0410 <a href="http://www.sogo-igaku.co.jp">http://www.sogo-igaku.co.jp</a>

- 中外医学社 ☎ 03-3268-2701 FAX : 03-3268-2722  
<http://www.chugaiigaku.jp>
- 東京医学社 ☎ 03-3265-3551 FAX : 03-3265-2750  
<http://www.tokyo-igakusha.co.jp>
- 永井書店 ☎ 06-6452-1881 FAX : 06-6452-1882  
<http://www.nagaishoten.co.jp>
- 中山書店 ☎ 03-3813-1100 FAX : 03-3816-1015  
<http://www.nakayamashoten.co.jp>
- 南江堂 ☎ 03-3811-7239 FAX : 03-3811-7230  
<http://www.nankodo.co.jp>
- 南山堂 ☎ 03-5689-7855 FAX : 03-5689-7857  
<http://www.nanzando.com>
- 日本医事新報社 ☎ 03-3292-1555 FAX : 03-3292-1560  
<http://www.jmedj.co.jp>
- 日本臨牀社 ☎ 06-6204-2381 FAX : 06-6204-2948  
<http://www.nippon-rinsho.co.jp>
- 文光堂 ☎ 03-3813-5478 FAX : 03-3813-7241  
<http://www.bunkodo.co.jp>
- ベクトル・コア ☎ 03-3813-3351 FAX : 03-3813-3353  
<http://www.v-core.co.jp>
- へるす出版 ☎ 03-3384-8035 FAX : 03-3380-8645  
<http://www.herusu-shuppan.co.jp>
- メジカルビュー社 ☎ 03-5228-2050 FAX : 03-5228-2059  
<http://www.medicalview.co.jp>
- MEDSI ☎ 03-5804-6051 FAX : 03-5804-6055  
<http://www.medsj.co.jp>
- 羊土社 ☎ 03-5282-1211 FAX : 03-5282-1212  
<http://www.yodosha.co.jp>
- 一般社団法人 日本医書出版協会 〒 113-0033 東京都文京区本郷 2-19-7  
 ブルービルディング  
 ☎ 03-3818-0160 FAX : 03-3818-0159  
<http://www.medbooks.or.jp>

## 第 8 章

# 江戸から平成へ —今に生きる医学の足跡

---



# 江戸から平成へ—今に生きる医学の足跡

酒井シヅ先生 (順天堂大学客員教授) 校閲  
 JMPA 50 周年記念特別展示実行委員会 制作

- |            |   |         |   |
|------------|---|---------|---|
| 宝暦 9 1759  | 山脇東洋「蔵志」を出版   | 30 1897 | 伝染病予防法公布<br>志賀 潔が赤痢菌発見<br>海軍軍医学校設立 (現在の国立がん研究センター)  |
| 安永 3 1774  | 杉田玄白ら「解体新書」を出版  | 31 1898 | キュリー夫人 (ポーランド) がラジウム発見  |
| 寛政 8 1796  | ジェンナー (英) が痘瘡ワクチンを開発  | 32 1899 | 東京帝大に初めてのレントゲン装置設置<br>広島でベスト第 1 号患者が死亡<br>京都帝国大学医科大學設立<br>ピーア (独) がコカイン液で腰椎麻酔法を創始<br>ウルマン (ハンガリー) が小腸の自家移植実験に成功<br>バイエル社 (独) が初の人工合成薬「アスピリン」発売                      |
| 文政 5 1822  | 日本最初のコレラが発生   |         |   |
| 文化 2 1805  | 華岡青洲が麻酔薬「通仙散」を創製し乳癌摘出手術に成功  | 33 1900 | 野口英世 横浜でベスト患者を発見<br>中山森彦が日本初の X 線写真の発表<br>リンゲル (英) がリンゲル液を創製  |
| 12 1815    | 杉田玄白「蘭学事始」を出版   | 34 1901 | 高峰讓吉 アメリカでアドレナリンを発表<br>明治政府は癩患者に対する一斉調査 (患者数 3 万 393 人, 人口 1 万人当たり 6.43 人)<br>クライル (米) が麻酔, 輸血, 補液など処置法を開発<br>レントゲン (独) がノーベル物理学賞を受賞<br>ランドシュタイナー (米) が ABO 式血液型を確立 |
| 13 1816    | ラエンネック (仏) が聴診器を発明  | 35 1902 | 北川乙治郎が胃全摘に日本で始めて成功<br>第 1 回日本連合医学会 (現, 日本医学会) 開催<br>カレル (仏) が三点支持連続縫合法による動脈吻合法を考案, 血管移植に成功<br>ペイリス (英) とスターリング (英) が最初のホルモン「セレクトチン」を発見                              |
| 天保 15 1844 | 緒方洪庵「病学通論」を出版<br>ウェルズ (米) が抗菌に亜酸化窒素を麻酔利用                                      | 36 1903 | 東京慈恵医院医学校を東京慈恵医院医学専門学校に改称 (私立医学専門学校の認可第 1 号)<br>江口襄が日本人初の肺腫瘍の肺切開手術成功<br>ケリー (米) が直腸鏡検査法を創案<br>アイントーヴェン (蘭) が心電計を開発<br>キュリー夫妻にノーベル物理学賞                               |
| 安政 5 1858  | 徳川幕府が蘭方医の種痘所の設立を許可  | 37 1904 | 富士川游が「日本医学史」を刊行<br>肺結核予防令公布   |
| 慶応 3 1867  | リスター (英) が手術時の消毒法を確立  | 38 1905 | クッシング (米) が新生児の頭蓋内出血に対する手術法に成功<br>コロトコフ (露) が拡張期血圧を明らかにする。  |
| 4 1868     | 徳川幕府が倒れ, 江戸は東京と改称   | 39 1906 | 医師法公布 医師の公的資格が確立される。<br>ワッセルマン (独) が血清反応による梅毒診断法を発表   |
| 明治 元 1868  | 朝廷は西洋医術の採用を公許   |         |   |
| 2 1869     | 学制改革 昌平学校を大学とし, 開成学校が大学南校, 医学校が大学東校と改称  |         |   |
| 4 1971     | ドイツ人教師, 陸軍軍医少佐ミュルレル (外科) と陸軍軍医少佐ホフマン (内科) が大学東校に着任                            |         |   |
| 5 1872     | 大学東校が第一大学区医学校と改称  |         |   |
| 7 1874     | 第一大学区医学校が東京医学校と改称   |         |   |
| 8 1875     | 文部省の西洋医学による医術開業試験実施通達   |         |   |
| 9 1876     | ドイツ人教師エルウィン・ベルツ来日 その後, 東大内科で 26 年間の教鞭をとる。                                     |         |   |
| 10 1877    | 東京開成学校と東京医学校を合併し, 東京大学創立に伴い医学部と改称   |         |   |
| 14 1881    | ドイツ人教師ユリウス・スクリバ来日 東大外科学教師として 20 年間外科医の育成に努めた。<br>ビルロート (独) が胃がんの胃切除 (幽門側) に成功 |         |   |
| 15 1882    | コッホ (独) が結核菌を発見。翌年, コレラ菌を発見   |         |   |
| 18 1883    | 荻野吟子が公許女医第 1 号となる。  |         |   |
| 19 1886    | 帝国大学令公布, 東京大学医学部は帝国大学医科大学と改称 (初代学長 三宅 秀)                                      |         |   |
| 23 1890    | 第 1 回日本医学会総会東京で開催 (個人会員制)<br>北里柴三郎がジフテリアおよび破傷風血清療法を発見                         |         |   |
| 25 1892    | インフルエンザ流行 (当時の呼称は流行性感冒)   |         |   |
| 25 1892    | 伝染病研究所設立 (北里柴三郎帰国 初代所長)   |         |   |
| 26 1893    | 天然痘, 赤痢大流行  |         |   |
| 27 1894    | 北里柴三郎がペスト菌を発見 (ほぼ同時にイェルサン (スイス) もペスト菌を発見。                                     |         |   |

	アルツハイマー (独) がアルツハイマー病の 1 例目の症例報告	15 1926	古畑種基らが血液型遺伝の 3 型説を発表 大正天皇崩御 (47 歳)
	ヤング (米) が前立腺癌の根治切除術に成功		
40 1907	癩予防法公布	昭和 元 1926	12 月 25 日昭和に改元
41 1908	東京府が強制種痘実施 (全国種痘患者数 8995 人)	2 1927	健康保険法全面実施
	トレンデレンブルグ (独) が肺動脈の塞栓摘除に成功	3 1928	国際連盟衛生委員会が血液型に「ABO 式」と命名 フレミング (英) がペニシリンを発見
42 1909	高峰讓吉がタカジアスターゼの特許を取得 種痘法公布	4 1929	フォルスマン (独) が心臓カテーテルを発明 ベンゲル (独) が脳波計を創案
	ビーア (独) が静脈性局所麻酔法を創始	5 1930	宮城順が胃の内視鏡を日本初紹介 西村庚子が女性初の医学博士に
	カレル (仏) が臓器移植の動物実験に成功		ノースロップ (米) が蛋白分解酵素ペプシンを精製
43 1910	秦佐八郎が梅毒特效薬サルバルサンの創製に成功	6 1931	癩予防法公布 癩患者 1 万 4263 名
	アインホルン (米) らが十二指腸ゾンデを発明		ワルブルグ (独) が細胞呼吸の研究によりノーベル生理学・医学賞を受賞
44 1911	野口英世がスピロヘータの純粋培養に成功	7 1932	佐々木隆興, 吉田富三が肝癌の人工発生報告
	鈴木梅太郎オリザリン (抗脚気効薬) の抽出に成功		ウォルフ (独) らが柔軟胃鏡を考案
	緒方正清が日本初の膣式帝王切開を行う。	8 1933	流行性脳炎大流行
	ヒップス (米) が脊柱癒合術を考案		グレアム (米) が肺癌の片側肺全摘術に成功
45 1912	明治天皇崩御 (59 歳)	10 1935	肺炎・気管支炎を抜き結核が死因の第 1 位 ショウル (独) らが肺 X 線断面撮影法を実用化
大正 元 1912	全国でコレラ患者 1000 人を超える 全国医師数 4 万 90 人 (女医 175 人)	11 1936	古賀良彦が胸部 X 線間接撮影法考案
	コーシュ (独) が膨大部癌に対して脾頭十二指腸部分切除に成功		ケンダル (米) がコルチゾンの分離に成功
2 1913	リンデマン (独) が注射器による輸血に成功	12 1937	アメリカシカゴに世界初の血液銀行が成立
3 1914	売薬法改正 品質確保, 広告の規制	13 1938	国民健康保険法公布
	ケンダル (米) が甲状腺ホルモン分離に成功		リンドバーク (米) らが人工心臓を作製
	第 1 次世界大戦が勃発	16 1941	ロッキー (米) が膣全摘術に成功 日本軍がハワイ真珠湾攻撃 (日米開戦)
4 1915	山極勝三郎らが人工皮膚がんの発生に成功	17 1942	妊産婦手帳制公布 結核予防 BCG 接種
	稲田達吉ら, ワイル病原体を発見		薬事法公布 医師の調剤権確立
	東北帝国大学医科大学開設		コルフ (蘭) が血液透析器の臨床応用に成功
	アルビー (米) が骨移植 (生骨片移植) を初報告	19 1944	太平洋戦争のため学会活動の中止
5 1916	結核死亡率 1 万人あたり 25.3 人に		ワクスマン (米) がストレプトマイシン発見
6 1917	石原忍が色盲検査表を創案・発表	20 1945	フレミング (英) がノーベル生理学・医学賞を受賞 太平洋戦争終結
7 1918	アメリカを中心に「リハビリテーション」の概念が生まれる。		医療制度審議会, 医学教育審議会発足 医師の資質向上, 医育の新興を目的に
	第 1 次世界大戦終結		第 1 回医師国家試験実施 (267 人受験) 発疹チフス流行 (死者 3,351 人), 天然痘流行 (死者 3,029 人), コレラ流行 (死者 560 人) 日本国憲法公布 (施行は 1947 年 5 月 3 日)
8 1919	野口英世が黄熱病原体を発見	21 1946	東京帝国大学を東京大学と改称
	塩田広重が日本初の輸血に成功		性病蔓延 (患者 40 万人)
	ヤング (米) が殺菌消毒剤「マーキュロクロム」を創製		シュピーゲル (米) が「定位脳手術」を創始
	スペインかぜ (インフルエンザ) の世界的大流行	23 1948	厚生省「母子手帳」配布 世界保健機関 (WHO) 発足
9 1920	慶應義塾大学医学部開校式・開院式		日本脳炎大流行 (患者 4757 人, 死者 2620 人)
10 1921	北海道帝国大学医学部, 京都府立医科大学, 慈恵会医科大学設立		スウェンソン (米) がヒルシュスプルング病に対して, 腹会陰直腸結腸切除術を創始
	カルメット (仏) らが BCG ワクチンの開発	24 1949	厚生省 ペニシリン使用の決定
11 1922	インスリン治療がカナダトロントで初実施		梶谷鑠らが日本初の脾頭十二指腸切除術に成功
	プランマー (米) らがパセドウ氏病に対する甲状腺手術前処置としてヨード療法を行う。		本庄一夫が脾頭部癌の膣全摘術に日本で初成功
	パンチング (加) らが膵臓インスリンを発見		モニズ (ポルトガル) が分裂病に対する白質切除術で, ノーベル生理学・医学賞を受賞
12 1923	関東大震災		
13 1924	流行性脳炎が全国で蔓延		
	ケインズ (英) がラジウム組織内照射に成功。		
	グレアム (米) らが造影剤静脈内注射による胆のう撮影法を創始		
14 1925	ハインセルマン (独) が膣内検査鏡を創製		



- リドレイ (英) が白内障手術に眼内レンズを用いる。  
 湯川秀樹ノーベル物理学賞受賞 (日本人初)
- 25 1950 平均寿命男性 58 歳, 女性 60 歳を超える。  
 日本初の血液銀行 (後のミドリ十字) が設立  
 ロウラー (米) が慢性腎不全患者に腎移植を行う
- 26 1951 改定結核予防法公布 (医師の患者届出義務)  
 WHO, 日本の加盟承認  
 結核が死因の 2 位に下る (1 位 脳溢血)。  
 榊原亨, 榊原仔兄弟らが日本初の動脈管閉存症の手術に成功  
 医薬分業法案成立 医師の処方箋発行義務付け
- 27 1952 初の四年制看護大学発足 (高知女子大学)  
 榊原仔 (東京女子医大) 僧帽弁狭窄症の手術に成功  
 木本誠二が腹部大動脈瘤の手術に成功  
 ハフナゲル (米) が心臓人工弁を開発
- 28 1953 熊本県水俣市で水俣病患者第 1 号発生  
 中山恒明が大動脈瘤手術に成功  
 ヒーリー (米) らが肝区域 (ヒーリー&シュロイ分類) の概念を発表  
 ゴル (米) が心臓ペースメーカーを開発  
 ワトソン (米) らが DNA の立体構造を発見
- 29 1954 稲生綱政が日本で初めて人工腎臓に成功  
 クイノー (仏) が肝区域 (クイノー分類) の概念を発表  
 マレー (米) らが一卵性双生児間の腎移植に成功
- 30 1955 6 年制医学部発足 (国公私立計 35 校認可)  
 森永砒素ミルク事件発生  
 ソーク (米) が不活性ポリオワクチンを開発
- 31 1956 イタイタイ病報告 (富山県)
- 32 1957 梅澤瀧夫ら, カナマイシン発見  
 セーピン (米) がポリオ生ワクチンを開発
- 33 1958 ソーンズ (米) が冠動脈造影法を導入
- 34 1959 厚生省が水俣病の原因を有機水銀化合物と結論  
 日本国民健康保険法実施 すべての国民が医療保険の対象となることを規定
- 35 1960 小児マヒ生ワクチンの集団投与開始  
 ヤコブソン (アルゼンチン) が手術用双眼顕微鏡を用い, 血管縫合を創始
- 36 1961 日本医書出版協会設立 (初代理事長 金原作輔)  
 国民皆保険スタート  
 小児マヒ (ポリオ) 患者, 全国 1000 名突破, 厚生省ワクチン緊急輸入
- 37 1962 クライネルト (米) ら切断指の再接着に成功
- 38 1963 スターツル (米) が世界初の肝臓移植を実施
- 39 1964 小児マヒワクチン完成 (日本)  
 東京オリンピック開催
- 40 1965 朝永振一郎, ノーベル物理学賞受賞
- 41 1966 厚生大臣がインターン制度廃止を表明  
 石坂公成らが物質免疫グロブリン E を発見  
 ハッグINS (米) が前立腺癌のホルモン療法開発によりノーベル生理学・医学賞を受賞
- 42 1967 インターン制度反対運動で受験有資格者の 87% が医師国家試験をボイコット  
 バーナード (南ア) らが世界初の心臓移植手術成功
- 43 1968 インターン制度廃止, 研修医制度発足  
 和田寿郎が日本初の心臓移植手術を施行  
 グドリック (米) が小児患者に高カロリー輸液を注入
- 44 1969 発癌性の疑いで人工甘味料チクロの使用禁止  
 東京女子医大が国産人工心臓を開発  
 ハウンスフィールド (英) が頭部 X 線 CT を開発
- 45 1970 医療費値上げで日本医師会全国一斉休診
- 46 1971 多田富雄らが T 細胞を発見
- 47 1972 老人福祉法改正 (70 歳以上医療無料化)
- 48 1973 コーエン (米) らが遺伝子組換え方法の基本的な技術を開発  
 ラウンターバー (米) が MRI 映像化に成功  
 江崎玲於奈がエサキダイオードの発明によりノーベル物理学賞受賞
- 49 1974 全国サリドマイド訴訟和解  
 丸山千里, 丸山ワクチンの治療成績を発表
- 50 1975 三種混合ワクチン接種中止  
 厚生省サリドマイド児の認定賠償金 60 億円を国と製薬会社に負担
- 51 1976 高月清 (熊本大) ら成人 T 細胞白血病発見  
 イギリスで X 線 CT 装置を開発
- 52 1977 利根川進らがマウス胎児免疫グロブリン可変部の遺伝子の単離成功  
 板倉啓壺ら, ソマトスタチンの生産に成功  
 平均寿命が世界 1 位に (男 72.69 歳 女 77.95 歳)  
 肝炎の HB ワクチン開発成功
- 53 1978 板倉啓壺らがヒトインスリン産生に成功  
 イギリスで世界初の体外受精児 (試験管ベビー) 誕生
- 54 1979 東京大学と日本大学共同研究にて B 型肝炎ワクチン開発  
 国立佐倉病院で初の死体腎摘出移植  
 第 20 回医学会総会 (東京) 開催より「日本医書出版協会」が書籍展示販売を開始
- 55 1980 渥美和彦教授グループが補助人工心臓を人間に初めて着用  
 WHO が「天然痘根絶」を発表  
 ワイスマン (スイス) らが大腸菌の遺伝子組換えでインターフェロンを複製  
 アメリカで B 型肝炎ワクチンが開発  
 クライン (米) が世界初の遺伝子治療の試み
- 56 1981 日本の死亡原因の 1 位が脳卒中からがんに交替
- 57 1982 成人 T 細胞白血病ウイルスの発癌作用実証  
 東芝が核磁気 断層装置 NMR - CT の国産第一号機を開発  
 ユタ大学医療センター (米) にて世界初の永久型人工心臓埋め込み手術実施  
 アメリカでヒトインスリンを初認可  
 アメリカで脳死後 84 日目の女性が女兒を出産
- 58 1983 日本初の体外受精妊娠に成功 (東北大学)  
 ヒト免疫不全ウイルス (HIV) 発見 (米, 仏)  
 ツア・ハウゼン (独) が子宮頸がん患者からヒトパピローマウイルスの DNA を発見
- 59 1984 筑波大で重症糖尿病患者に脳死患者の臓器, 腎臓同時移植 (日本初)

- 60 1985 厚生省が日本初のエイズ患者 1 号を確認と発表  
アメリカでヒト成長ホルモンを認可
- 61 1986 エイズ日本上陸の原因は、輸血血液製剤と判明  
飯塚理八らがパーコール法で、日本初の子児産み分けに成功  
東大、京大グループが成人 T 細胞白血病 (ATL) の生ワクチン開発に成功  
厚生省インターフェロン $\alpha$ 型製造承認 (腎癌初の治療薬に)
- 62 1987 利根川進、日本人初のノーベル医学生理学賞受賞  
遺伝子組換え製剤のインターフェロン承認  
厚生省が日本初の女性エイズ患者を認定
- 63 1988 日本産婦人科学会が冷凍保存受精卵の使用承認  
ベトナムの二重体児の分離手術を実施  
ライア (ブラジル) が世界初の生体部分肝移植実施
- 64 1989 昭和天皇崩御 (87 歳)
- 
- 平成 元 1989 凍結受精卵で不妊症女性が妊娠 (東京歯科大、慶應大学)  
島根医大、初の生体部分肝移植手術に成功
- 2 1990 東大医科学研究所、京都大学の倫理審査委員会が脳死を人間の死と認め、肝臓移植申請を承認  
九州大学で日本初の体外肝切除手術実施  
浦和市の幼稚園児が病原出血性大腸炎 O157 による中毒で死亡  
アンダーソン (米) らがアデノシンデアミナーゼ欠損症患者に遺伝子治療を実施
- 3 1991 日本エイズ死者 170 名となる。  
宮城県で凍結卵の体外受精に成功 (国内初)  
東京女子医大がベルギーの脳死者の肝臓で日本初の脳死肝移植  
フラン (英) らがアルツハイマー病は遺伝子の突然変異が原因と発表  
日本複写権センター設立
- 4 1992 乳幼児突発性症候群 (SIDS) が日本での 1 歳未満の死亡原因の第 1 位に
- 5 1993 世界のエイズ患者 1400 万人に (WHO 発表)
- 6 1994 北大倫理委員会が遺伝子治療を国内初承認  
老人医療費が国民医療費の 30% を上回る。  
オレゴン州 (米) の住民投票で安楽死法案が可決
- 7 1995 国内初の遺伝子治療の臨床試験開始 (北大病院)  
エイズウイルス感染者の臨床試験開始 (熊本大)  
阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件
- 8 1996 らい予防法廃止  
日本初の生体小腸移植を実施 (京大)  
O157 による世界最大規模の食中毒が発生  
ロスリン研究所 (英) でクローン羊「ドリー」誕生  
イギリスで変異型クロイツフェルト・ヤコブ病 (vCJD) 患者の初報告
- 9 1997 臓器移植法成立 臓器移植の場合に限って「脳死は人の死」とする
- 10 1998 日本初の生体肺移植を実施 (岡山大)  
世界初の大人のウシの体細胞を使ったクローンウシが誕生 (近畿大、石川県)  
埼玉医大が性同一性障害の性転換手術を施行  
トムソン (米) らヒト ES 細胞作製成功
- 11 1999 厚生省、電子カルテを正式な診療録として承認  
低用量ピル (経口避妊薬) 承認発売  
厚生省、結核緊急事態宣言
- 12 2000 介護保険制度施行  
厚生省、夫婦間外の体外受精容認  
日本初の脳死肺移植 (大阪大)、肝臓の分割移植 (京大、信大) を実施  
ヒトゲノムの概要解説  
WHO が西太平洋地域での野生株由来のポリオ患者の終息宣言
- 13 2001 HIV・HCV 患者への世界初の生体肝移植 (東大)  
日本初の代理母による出産  
日本初の凍結卵子を使用した体外受精による出産成功  
日本初の BSE (牛海綿状脳症) ウシ確認  
アメリカで同時多発テロ  
野依良治ノーベル化学賞
- 14 2002 日本で初めて肝臓移植患者が出産  
オランダで「安楽死法」が施行 (世界初の安楽死合法化)
- 15 2003 SARS 騒動  
高病原性トリインフルエンザの大量発生  
ヒトゲノム解説完了
- 16 2004 日本初の瞬息細胞移植を京大病院が実施  
新臨床研修制度実施
- 17 2005 ツベルクリン反応検査廃止  
日本初の国産人工心臓の手術 (東京女子医大)  
日本初のウエストナイル熱感染者を確認
- 18 2006 政府が H5N1 型インフルエンザを指定感染症<感染症予防・医療法> および検疫感染症 (検疫法) に指定  
がん対策基本法成立  
山中伸弥らが人工多能性幹細胞 (iPS 細胞) 作製に成功  
病気腎移植が発覚 (愛媛県宇和島市)
- 19 2007 カプセル内視鏡の輸入を厚生労働省が承認
- 20 2008 特定健康診査 (特定健診)・特定保健指導開始
- 21 2009 臓器移植法改正  
臨床研修医制度見直し  
新型インフルエンザ (H1N1 型) 流行
- 22 2010 平成 20 年 (2008 年) の医師法に基づく「医師数調査」を発表 医師総数 28 万 6699 人、産婦人科・産科では 10 年ぶりに増加  
子宮頸がんワクチン発売 (10 歳以上が対象)

〈注〉黒文字は日本、青文字は外国の医学的事項を示し、赤文字は社会的事項を示しています。  
なお、本年表は「医学 100 年のあゆみとそれを支えてきた医学書展—JMPA 創立 50 周年記念特別展示—」に展示した「江戸から平成へ—今に生きる医学の足跡」から抜粋したものです。

## 編集を終えて

子どもの頃、父の会社に金原作輔様、金原一郎様、金原四郎様が時々お見えになったことが昨日のように思い出されますが、どのようなことを話されておりましたことか想像に思い当たりません。今回編集の責任者を仰せ賜り、作業を進行しつつ思い浮かべることが乏しいことは寂しい思いがします。なぜ25周年記念史を先輩方がつくられなかったか残念です。私の乏しい記憶では、誌面を覆い尽くすことができません。藤實広由様、青木三千雄様、浅井宏祐様のご記憶を思い起こしていただきましたが、すべてを覆い被せることができませんでした。日本医書出版協会の組織ができた以前に、日本医書出版株式会社、日本医学雑誌株式会社があったことが、また本郷台に医学書の出版会社が集中していたことが、日本医書出版協会の始まりではないかと想像いたします。1961年以前にも日本医学総会の学術講演集を1955（昭和30）年に編集するなど活動していた記録があります。組織の会員は現在の会員社とは多少違いますがございました。

今書きとめうるすべてを記したつもりですが、新事実が解明されましたら次回の年史に改訂をお願いして編集を終えます。

2011年2月

編纂委員長 太田 博  
編纂副委員長 内田栄一  
委員 高木 淳  
中村正徳  
塗木誠治  
松本 岳

## 日本医書出版協会 50 年史

2011年3月18日 発行

発 行 者 代表理事 金原 優  
発 行 所 一般社団法人 日本医書出版協会  
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-19-17  
ブルービルディング  
電 話 03-3818-0160  
<http://www.medbooks.or.jp/>

印刷・製本 三報社印刷

©一般社団法人 日本医書出版協会

本書の無断複写を禁じます。転載・複写の際はあらかじめ許諾をお求めください。